風の伝説

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の伝説

【Ｎコード】
Ｎ３８６２Ｅ

【作者名】
空風灰戸

【あらすじ】
入学した学校の部室で見つけた一冊のノート。そのノートを読んだことで異世界に旅立つこととなってしまった。その使命は風邪の民を救うことだった。

プロローグ

都はずれにある小さな学校、風神高等学校。
ここは、風の神がすんでいるといわれている学校である。
しかし、それは噂でしかなく本当にいるかは定かではない。
そんな学校にも新入生が入学してくる季節となった。入学式には、真新しい制服を着ている、新入生達が百人ほど並んでいた
「話し長いな……」
入学式の中で、一人、ぶつぶつと文句を言っている一人の新入生がいた。彼の名前は風樹空という。
空は校長の話をぶつぶつと文句を言いながら聞いている。小学生時代から長い話しが嫌いなのである。
そんな中、やっと校長の話が終わり、長々とした入学式を終えた。
入学式が終わったら、始まる前に行っていた教室に戻った。教室の中は誰もしゃべらず静かな空間だった。
そして、先生の話などを聞き、この日の入学式を終えた。
空は電車で学校まで来ているため、帰るには駅に向かう必要がある。
駅に向かっているときに後ろから誰かがやってきた
「待ってよ！　空」
「なんだ？　あかりか」
後ろからやってきたのは武内あかり。空の幼馴染で、幼稚園、中学の時一緒だった少女だ。
「入学式どうだった？」
「どうだったってなにが？」
「退屈だったか退屈じゃなかったかってことよ」
「ああ、そう言うことか。結局、どこに行っても校長の話の長さはほとんど変わらないと思ったよ」
「そう言うだろうと思った。あの長さは空が嫌がる長さだと思ったの」

「じゃあ、なんで聞いたんだよ？」
「だって、新しい場所でしょ？　なにか、変わったかな～と思って」
「はぁ、そうか」
空とあかりは会話をしながら駅に向かい、家に帰っていった
それから数日がたった日のことところ
教室内は入学時の静けさが恋しくなりそうなほどにぎやかになった
もちろん、空もあかりもそのにぎやかな中に入っていた
ところが、一人だけその中に入っていない少年がいた。席は真ん中の列の真ん中だ
その少年が空は気になったため、声をかけてみた
「おはよう」
「え？　あ、おはよう」
「俺は空。お前は？」
「僕は、川原灰戸って言うんだ」
「灰戸か。よろしく。ところで、なにをしているんだ？」
「特にすることがないから、本を読んでるんだ」
「本か。俺にはまったく関心がないものだな」
「そう……」
「ともかく、よろしくな。灰戸」
「うん」
空はこうして灰戸との会話を始めてしたのである
その日、入学してから初の授業をした。最初の授業は数学だった
それから、一ヶ月がたったころの放課後
「待ってよ、あかり。俺は入るきないって」
「いいから、来るだけ来なさいよ」
空はあかりに引っ張られながら、ある場所へ向かっていた
空は一ヶ月たったのだが、部活に入っていなかった。風神学校は必ず部活に入らないといけないのだが、空はぎりぎりごまかしているのだ
それを知っているあかりは、空を部活に入れようとしているのである

「ここよ」
あかりが入っている部活の部室に空を案内した
室内は質素な部屋で、床には大量のノートが重ねられておいてある
「ノートがびっしりだな」
「ええ。私たち、風研究部は、風の研究をしているからね。それをすべてノートに記録してるから」
「ふーん。でも、俺はなんと言われようと部活に入る気はないぜ」
「なに言ってるのよ。部活は必ず入らなきゃいけないんだよ」
「なんとかごまかせてるから大丈夫だって」
空がそう言うと部室に誰かが入ってきた
「あれ、空くんじゃない？」
空はその声を聞き、後ろを向いた。すると、そこには灰戸がいた
「灰戸じゃないか。どうしたんだ？　こんなところで」
「え？　どうしたもこうしたも、いま、記録をとってきたから部屋に戻ってきただけだよ」
「ってことは、お前。もしかして、風研究部？」
「うん」
「空。灰戸くんがいるじゃない。私もいるんだし、安心できるわよ」
「なにが安心できるんだよ」
「別に。深い意味はないわ」
「空くんも風研究部に入るの？」
「いや、俺は……。まあいっか」
「まあいっかって？」
「わかった。俺もこの部活に入る」
「決まりね。じゃあ、先生に届けを出すから、これに必要事項を記入してきてね」
あかりはそう言うと、ポケットから入部届けの紙を空に渡した
「わかった」
「よかった。空くんが入ってくれて」
「どうしてだ？」

「だって、この部活であまり中のいい人がいないから。空くんなら結構話してるもんね」
「そう言うことか。これからもよろしくな、灰戸」
「うん。こちらこそ」
「じゃあ、空。今日、少し体験入部みたいなのをしてみる？」
「ああ」
「じゃあ、僕も行くよ」
灰戸はそういって持っていたノートを近くの机に置いた
「じゃあ行きましょう」
あかりがそう言うと二人はあかりについていった
部室から出て、校舎の屋上に向かった。風の観測・研究は屋上でやっているのである
「ここで、風の観測をするの」
「観測？」
「風の流れ方。風の強さとかそう言うのを調べるんだ」
「そう。後は調べて資料を使って研究をするわけ」
「わかった。でもさ、風がない日とかの場合はどうするんだ？」
「この学校は風が強いことで有名なのよ。なんでも、風の神がいるってことでね。だから、風がやむことはないの」
「そうか。でも、本当に風の神様なんているのかな？」
「さあ？　研究資料を読めばわかるかもしれないけど、まだ、全部見てないからわからないわ」
「でも、もしいたらもう大騒ぎになっていると思います」
「そりゃそうだ。まあ、ともかく風の観測をすればいいんだろ？」
「ええ。それじゃ、始めましょうか」
こうして三人は観測を始めた
次の日。空は風研究部の顧問、高橋風神先生に入部届けを出した
これで、空も風研究部の一員となるのであった
この空の入部により何かが起こるとも知らずに……

第０１話　「風の神・雷の神」

空が風研究部に入部し、歳月が流れついに夏休みとなった。
夏休み中でも、週二回ずつ部活があったので、空はあかりに引っ張られながらも部活に参加したのである。
そんな、ある日のこと。空がいつも通り、あかりと灰戸と一緒に部室に散乱しているノートを整理しているときだった。
空が一番下にあった一番古そうなノートを発見したのである。
「なあ、これ相当古いな」
空がそう言いながらあかりに言い、そのノートを渡した。
「本当ね。これは、昭和三十年の記録みたい」
「昭和三十年？　なんで、そんな古い記録が残ってるんだ」
「そうだよね。先輩が平成元年までの記録しか残していないと言ってたのに」
近づいてきた灰戸がそう言ってきた。
「ちょっと見てみるか？」
「そうね。部活のものだし見ても大丈夫よね」
あかりはそう言うとそのノートを見た
「なにこれ？　全然読めないじゃない」
すると、そこにはあかりに読めない文字が書かれていた。どうやら、外国語で書かれているみたいである。
「どれどれ。なになに、『雷の神が迫り、我ら危機にさらされたり。この事態をくい止めたり』」
「え！？　どうして、これを読むことができるの？」
「いや、なんかわかんないけど読めた。灰戸はどうだ？」
「僕は読めないよ。どうやら、空くんしか読めないみたいだね」
「それよりもどういうことかしら？　我ら危機にさらされたりということは、何かあったのかしら？」
「そうだとしか考えられないよ。先輩に聞いてこようか？」

「そうね。そうしたほうがいいかも」
「じゃあ、行ってくるね」
そう言って灰戸が部室を出ようとしたとき、空が言った。
「『事態悪化。情報は内密にしたり。外部にもれると危機にさらされたり』」
「どういうこと？」
それを聞いた灰戸は部室から出るのを止め、空に訪ねた。
「さあ？」
「さっき、読んだ所の時期より事態が悪くなったのね。文からして、外部に情報を流したのが原因というかんじだわ」
「そうなんだ。じゃあ、僕は行ってくるね」
「待って！　灰戸。ここで、待ってるんだ」
部室から出ようとした灰戸を再度、空が止めた。
「どうしたの？」
「一番最後のページにこう書かれている。『若者よ。我を助けたり。状態依然悪化。しばし待たれよ』と」
「え？　でも、それって、昔の記録だよね？　ここで待ってる必要はないんじゃ……」
「それがそうでもないみたいなんだ。これをちょっと見てくれ」
空はそう言うと灰戸に近づき、ノートの一箇所を指差しながら灰戸に見せた
「これは今日の日付だ。いったい、どうしてこんなところに今日の日付が書かれているんだろう？」
「それに、この字。依然として、読めないけどさっき見た文字より何か新しいみたい」
横からそのノートを見たあかりがそう言った
すると、その時、部室に誰かがやってきて、ドアを開けた。すると、そこには身長は百六五センチメートル程度の中年男性が現れた
「あなたたちが新しい使者の方々ですね。お迎えにあがりました」
入ってきた男がそう言った

「どういうことだ？」
「そのノートを読まれましたね？」
「あ、ああ」
「そのノートを読むことができるのは風の神であるシルフ様に選ばれし者のみ。あなたがそれを読むことができたということは選ばれし者なのです」
「空が選ばれた人間？　そんな冗談はよしてくださいよ。それに、一体あなたは誰なんですか？」
「申し遅れました。私はウィンディンと申します。それと、私が言ったことは冗談などではありません」
「だったら、証拠を見せてもらいましょうか」
「ちょっと待てよ、あかり」
ここで空がいったんあかりとウィンディンと名乗る男との会話を止めた
「証拠なんてあるわけないだろ。冗談に決まってるんだから。そんな争っていたってしょうがないだろ」
「でも、あの人が……」
「いいでしょう。そこまで信じないなら証拠をお見せしましょう」
そう言うとウィンディンは目を閉じ何かを念じ始めた
すると、部室は質素な部屋から草原の上空に移動していた
「な、なんだ！？」
「心配はありません。幻想です。それより、あれを見てください」
ウィンディンは真正面を指差した。そこにはなにやら城が見えた
「あれが雷の神であるボルトが存在する城。我々は奴に倒されかけているのです。私たちは奴らを倒すための風の戦士を求めています。その人物こそそこの少年なのです」
ウィンディンがそう言うとあたりは元の質素な部屋に戻った。部屋には少しの間、ちんもくが流れた。そのちんもくを破ったのは空だった
「わかった。行ってやろうじゃんか！」

「空！　あなた、なにを言ってるの！？」
「そこまで言われたら行くしかないだろ」
「でも……」
「では行きましょう。シルフ様の元へ」
「その前に聞きたいことがある」
「なんでしょうか？」
「俺がそこに行ったらこっちの世界の時間はどうなるんだ？　俺が急にいなくなったらほかの人が心配してしまう」
「それならご心配は及びません。これから行く場所は異次元の世界。この世界にない場所なのですからね」
「この世界にない場所？」
「はい。ですから、時間を気にする必要はありません。では、行きましょうか」
ウィディンはそう言うと、先ほどのように目を閉じ何かを念じ始めたそれを見た、あかりがそれを止めた
「待って！　私もいくわ！」
それを聞いたウィンディンは念じることをやめ、目を開けた。そして、あかりに言った
「あなたが来てもなんの意味もありません」
「空一人でなにができるもんですか！　私だっていくわ」
ウィンディンはあかりを少しばかり見つめた。そして、こう言った
「わかりました。ですが、邪魔になるようなことはしないようにしてください」
「ええ」
「二人とも行っちゃうの？」
二人を見ていた灰戸がそう聞いてきた
「ええ。空一人じゃ頼りないから」
「俺だって、一人できることはできるっていうんだよ。あかりは来なくていいのに」
「あなた一人でなにができるっていうのよ」

「なに！」
「なによ！」
「ま、まあ、落ち着いてよ二人とも」
けんかになりそうだった二人を灰戸は止めた
「がんばってね、二人とも。僕は何かできるわけでもないから、応援しかすることしかできないけど」
「ああ」
灰戸はどこか悲しげな顔を見せていた。仲のいい二人が一時的でもいなくなってしまうのが悲しいのであろう
それを察したあかりは灰戸に言った
「灰戸。あなたも一緒に行かない？」
「え？　僕が？」
「ええ。あなたはがんばりやだし、いろいろと私たちをサポートしてくれそうだから」
「で、でも。僕……」
「あかり。嫌がってるのに無理に行かせるわけには行かないぜ」
「わかってるわよ。でも、灰戸の意見も聞きたいの。どうするの？　灰戸」
それから少しちんもくが流れた。相当、迷っているらしい
「……。わかった。僕も行くよ」
「よし、決まりね。いいわよね？　ウィンディン？」
「どうぞ。それでは行きましょうか」
ウィンディンはそう言うと目を閉じ何かを念じ始めた
そして、質素な部室から空たちはいなくなり、異次元の世界に向かうのだった……

第０２話　「新しい世界と神」

「ここが異次元世界か……」
ウィンディンの力によって、異次元世界にやってきた空たち。
異次元世界といえども、現実世界とはあまり違いはなかった。だが、一番違うとわかったものは、剣や盾などの武器を普通に売っていることだった。
「はい。ここが、あなた達の世界から見て異次元の世界である、テイルゴッドワールドです。そして、ここは風の民の首都である、ウィンドシティです」
「まあ、そんなことはどうでもいいわ。さっさと行きましょう。どこに行けばいいの？」
「まずは、シルフ様にお会いしましょう。きっと、お待ちかねでしょうから」
ウィンディンはそう言うと、街から見えていた城に向かった。そして、城内に案内され、シルフと出会った。
「シルフ様。お連れいたしました」
「君たちがあの本を読むことができた人たちかい？」
シルフと言われた人物は、見た目が人間ではなかった。後ろに緑色の綺麗な羽がついていた。
年齢はそれほど高そうではなく、せいぜい二十歳かどうか程度だった。そして、話し方は少し子供に近かった。身長もそれほど高くなく百五十程度である。
「ああ。ただし、こいつらは読めてないけどな」
「ということは君だけが読めたんだね？」
「そう言うことだ」
「そうか。三人とも読めたのかと思い、驚いていたが失望してしまったな。まあいいや。君だけでも読めたなら。君の名前は？」
「風樹空だ」

「風樹くんか。その後ろの君たちはなんていうんだい？」
シルフは空の後ろにいたあかりと灰戸に聞いた。
「僕は川原灰戸」
「私は武内あかりよ」
「よろしく」
シルフはそう言うとあかりたちを少し見つめた。その間は沈黙の時間が流れていた。すると、あかりが言った。
「どうかしました？」
「ああ。君たちもなかなかのやり手だなと思ってね。風樹くんには劣るが、なかなかの力を持ってる」
「力？」
「うん。僕に選ばれたものと、その予備軍がいるんだ。その予備軍の力を君たち二人は持ってるよ」
「ところで、俺たちはどうすればいいんだ？」
「ああ、そうだったね。じゃあ、話そう。君たちは街を見たかい？」
「見た」
「あそこはこの世界では有名な街だったんだ。そして、僕が管理している街であり、風の民の首都でもある。でも、少し活気がなかったと思うんだ」
「そうだったか？」
「確かに少しなかった気がするよ。結構、人がいたのに」
「それは雷の神であるボルトが、僕たちを倒そうとしているからなんだ。風の民の街は他にもあった。もちろん、この街みたいに大きいところばかりではなかったけどね。その小さな町をボルトたち雷の民は襲い始めたんだ。領土を広げるためにね。僕たち風の民と雷の神のほかに炎の神と水の神が存在している。それで、この世界はバランスが保たれていたんだが、突然、炎の神と水の神が衰退し始めてね。雷の神が一気に勢力を押し上げ、炎の民と水の民。そして、僕たち風の民の領土を奪い始めたんだ」
「その炎の神と水の神はいまどうしているの？」

「二人とも何とか、民の首都である街でなんとか過ごしている。だけど、結構苦しい状態らしい。そして、僕たち風の民達もこの街に全員集まって生活をしている。だから、ボルトの勢力がいる各神の首都を襲うかわからない状態だ。そこで、僕に選ばれた君たちに雷の民の勢力を弱めてもらいたいんだ。僕もやったんだけど、僕だけではどうしてもダメなんでね」
「わかった。二人ともいいよな？」
「ええ」
「うん」
「決定だね。じゃあ、後はウィンディンから指示を聞いて。ウィンディン頼んだよ」
「承知いたしました。それでは皆さんこちらへ」
　ウィンディンがその場をはずれたので空たちもウィンディンについて行き、その部屋を後にしたのである。
ウィンディンについていくと、一つの部屋に案内された。ログハウスのような床。黄緑系の壁紙を貼っている壁である。
中にはソファが二つあり、その間に木のテーブルがある。一番奥には大きなドアがありベランダにつながっている。
「こちらにお入りください」
　ウィンディンはそう言って部屋の中に空たちを招きいれた。
そして、空たちはソファに座った。ウィンディンはたちながら話しを始めた。
「シルフ様がおっしゃっていたようにあなた方には雷の民の勢力を弱めることをしていただきます。ですが、あなた達は選ばれし者と予備軍の者ですが、まだ、詳しい能力についてはわからないと思いますので、それについてお教えします」
「能力？　私たちにそんなのが備わっているの？」
「はい。予備軍の方でも力は弱いですが備わっています。あなた方はその能力に気づかないだけなのです。それでは、まず、これを持ってください」

ウィンディンはそう言うと、一枚の白い紙を取り出した。そして、その紙を空に渡した。
すると、紙の色が深緑色に変わった。
「な、なんだ！？」
「あなたに秘められている能力が現れたのです。色はあなたに備わっている属性。色の明暗はその強さを表します。あなたは風の属性を持ち、なかなかの力の持ち主ということがこの紙でわかります」
「ふーん。属性ってなんだ？」
「あなたがどの神の民かをあらわすものだと思ってくだされば結構です。さあ、それをそちらの女性に」
ウィンディンにそう言われると空はあかりにその神を渡した。すると、あかりが持つと色は変わらなかったが、明暗が明るくなった。
「ふむ。あなたも風の属性を持っていますね。そして、力は弱い。では、そちらの男の子に」
そう言われたあかりは灰戸に紙を渡した。
すると、紙は色が青に変わった。明暗は明るさと暗さの中間ぐらいの色だった。
「これは……。あなたは水の属性。つまり、水の民。そして、強さがなかなかある」
「え？　僕は水の民なの？」
「この紙が指すにはそうなっています。まあいいでしょう。では、次にあなた方の得意なわざを見つけることにしましょう」
ウィンディンはそう言うと、今度は白いミルクのようなものを出した。
「これを皆さんには飲んでいただきます。さあ、どうぞ」
ウィンディンはコップにそれを三つ注ぎ、空たちに渡した。
「うえ、なんだこれ？　苦いぞ」
そう言ったのは空だった。どうやら飲んだものは苦かったようだ。
「え？　空。あなた味覚がおかしいんじゃないの？　これ甘いわよ」
「僕も甘く感じる。全然、苦くなんてないよ」

「はっ？　どう考えても苦いぜ。ちょっと、貸してみろ」
空はそう言うとあかりのコップを取り上げた。
「ちょ、ちょっと空！」
あかりは空が取ったコップを飲む前に頬を少し赤らめ取り上げた。
「なんだよ？」
「や、やめてよ。これは私が全部飲むの」
「ふむ。甘いと感じたのはそちらの女性と男性か。どんな味がしましたか？」
「いちごよ」
「え、いちご？　僕はマンゴー味だけど」
「いちごとマンゴーか。わかりました。そして、苦いと感じたのは空さんだけですね」
「そうみたいだな。なあ、どうしてみんな味が違うんだ？」
「この飲み物はあなた方の能力の中で一番高いものを選択するものです。まあ、今にわかります。こちらへどうぞ」
ウィンディンは立ち上がり、部屋を出るように促した。そして、廊下に出てなにやら武器庫のような場所にやってきた。
「では、お話ししましょう。先ほどの飲み物の結果を。苦いと感じた空さんは、剣士の素質があります」
「剣士の？」
「はい。苦いと感じると剣士としての能力が高いのです。そして、甘いと感じたお二方。あなた方は、魔法を使うことができます」
「魔法を？」
「はい。いちご味のあなたは回復系の魔法。マンゴー味のあなたは攻撃の魔法を使うことができます」
「そんなバカな話しってある？　私たちが魔法なんか使えるわけないじゃない」
「それはあなたが自分の力について無知であるためそう思うだけで、実際は使うことができます。まあ、練習をつめばのことですがね。さあ、皆さんにはこれからこの武器庫で装備品を装着してもらいま

す」

ウィンディンはそう言い空たちの装備品を選び始めた。

こうして、空たちは戦いに向ける準備をはじめるのだった。

第０３話　「異世界の夜」

戦いの準備を整えた空たち。
この新しい世界”テイルゴッドワールド”での初の夜を迎えた。
テイルゴッドワールドの夜は真っ暗だった。部屋は電気がついているため明るいが、外には街灯がほとんどないからである。
空たちは、自分達の能力を知ったあの部屋で、寝泊りすることとなった。
「でもさ」
その部屋の中でソファに座っている空が言った。
「なんで、俺たち三人とも同じ部屋なんだ？」
「さあ？　部屋が空いてないんじゃないかな」
空の質問に対し灰戸がそう答えた。
「でも、こんな広い城だぜ？　空いている部屋ぐらいあると思うんだけど」
「兵士が寝泊りするところとか、あの武器庫みたいなところがいっぱいあるんだよ」
「そんなところなのか？　城っていうのは。でも、俺がこう思ってるってことは、相当あかりは嫌がってるんだろうな」
「どうして？」
「あかりは女だぜ？　俺たちと一緒の部屋にいるなんて想像つかなかっただろうよ」
「それはそうかもね。そういえば、いま武内さんはどこにいるんだろ？　さっきから見ないけど」
「あかりなら風呂みたい。さっき、灰戸が部屋を見てるときに行ったみたいだ」
「そう」
「そういえば灰戸。お前だけ違ったな」
「なんのこと？」

「あの能力検査みたいなやつのことさ。俺たちとは違って、水の民だったじゃないか」
「うん……。どうして、僕だけ違ったんだろう？」
「うーん。それよりも、あれがどうやって区別されてるかがわからないからな」
「そうだね……。あれ？　もう、十時みたいだね」
「もう十時？　まだ、十時だろ？」
「え？」
「え？　って言われても。灰戸はいつも何時ごろ寝るんだ？」
「僕は大体、十一時ごろに」
「早！　俺なんか一時は当たり前だぜ」
「本当？　遅くない？」
「そうか？　遅くはないと思うけど。じゃあ、灰戸はそろそろ寝るのか？」
「うん。そろそろ、寝ようと思う。でもまだ、お風呂入ってないから」
「風呂か。それにしても、あかりの奴長いな……」
「女の子だからね。じゃあ、武内さんが出たら僕が先に入っていい？」
「ああいいぜ。どうせ、俺は一時ごろまで起きてるつもりだしな」
それから数分後。あかりが風呂から出てきたため、灰戸は風呂に向かった。
「ねえ、空。今日の部屋割りどうするの？」
「部屋割りってなんだよ？」
「寝室みたいな所の部屋にはベッドが二個しかないじゃない。だから、一人はベッドで寝れないわけじゃない。だから、誰がどこで寝るのかを決めないと」
「ああ、そう言うことね。あかりはどっちがいい？」
「どっちって何よ？」
「一人で寝るか、二人で寝るかってことさ」

「も、もちろん一人の方がいいに決まってるでしょ。なんで、男子と一緒に寝なきゃならないのよ！」
「そ、それもそうだな。じゃあ、どうするか。ベッドは二個だし。一人で寝るってことはこっちのソファで寝るしかないけど」
「じゃあ、私はこっちで寝るわ」
「そうか。お前何時に寝るんだ？」
「私はそろそろ寝ようと思うんだけど」
「そろそろ寝る！？　早くないか？」
「まあ、確かに今日は早いわね。でも、疲れたから早めに寝るわ。空はいつ寝るの？」
「俺は一時ぐらいまで起きてようと思ってるんだけど」
「じゃあ、テレビ見るのね。でも、見たいテレビなんてあるの？」
「そういわれれば確かに……。こっちの世界にあるんだろうか？」
「ないと思うわ。今日は早く寝たら？」
「仕方ない。そうするか……。そうだ、あかり。お前疲れてるって言ったな？」
「ええ」
「じゃあ、ベッドで寝ろよ。そっちの方が疲れは取れるぜ」
「嫌よ。隣に誰か来るんでしょ」
「大丈夫さ。俺と灰戸はこっちで寝るから」
「でも、灰戸くんはそれでいいって言うかな？」
「大丈夫大丈夫。あかりはゆっくり寝ろって」
「わかった。じゃあ、灰戸くんに言っておいてね」
「ああ」
　こうして、あかりは寝室に入り、眠るのだった。
それから、数分すると灰戸が風呂から出てきた。
「あれ？　武内さんは？」
「もう寝た。灰戸。俺たちはこのソファで寝ることになった」
「え！？　ベッドは？」
「あかりが寝てる。もう一個は空いたままだけど、あかりがそこに

俺と灰戸が入るのを嫌がってるからしょうがないのさ」
「そっか。じゃあ、今日はここで寝るんだね」
「そう言うことだ。よし、俺も風呂はいるか。灰戸。電気はもう消しておいてもいいぜ。俺も出たらすぐ寝るからさ」
「わかった」
　空はそう言い風呂に入った。
こうして、この日の夜を終えた。
次の日。空たちはウィンディンが持ってきた朝食を取った。
朝食後。ウィンディンの案内によって、城の一角にある庭のような場所に来た。
「ここで、練習をします。昨日、言った魔法を出す練習。そして、空さんは剣を使った練習を行います」
　ウィンディンはそう言って、空には剣を。あかりと灰戸には、杖を渡した。
「これでどうすればいいの？」
「気を杖に集中してください。そうすれば、何かしら出ます」
　そう言われたあかりと灰戸はなんとなく気を杖に集中した。
すると、杖があかりの光だし、小さな風を起こした。
それに伴い、灰戸の杖からもいきよいよく水が飛び出した。
「すごい！　水が出るなんて！」
　灰戸は自分が魔法を使えたことに感動を覚え、それを口に出した。
「ほぉ。なかなか、飲み込みが早いですね。ですが、これはまだまだ序の口。もっと、練習すればすごいわざが使えるようになります」
「よしがんばるぞ！」
「では、次は空さん。空さんはあそこにあるわら人形をその剣で切ってください。もちろん、走りながら一発で決めてください」
　そのわら人形とは、空たちのいる場所から二十メートルあるものだった。
「わかった！　行くぞ！」
　空はそう言い、走り出した。そして、行きよいよく走りそのわら

人形を切った。
「よっしゃ！　どうだ！」
「ほぉ。やはり、飲み込みが早い方たちです。それでは次の練習へと行きますか」
ウィンディンがそう言い、別の所に行こうとした時、あかりがそれを止めた。
「待って！」
「なんですか？　あかりさん」
「どうして、私だけあんな対したことのないものだったの」
「それはあなたの力がまだ弱いからです。これから、練習していくにつれて灰戸さんのようなわざが使えるようになります。もっとも、あかりさんは風の民なので風の魔法しか使えませんけどね。さあ、次に行きましょう」
ウィンディンはあかりに説明し次の場所へと向かったのである。

第０４話　「特訓と襲撃」

空たちは自分達の力を知り、次の場所に移動した。
次の場所は城を出た場所で、とても広い草原だった。
「ここであなた達にはあそこにある大きな木に攻撃をしてもらい、木を倒してます」
ウィンディンは三十メートルほど先にある木を指差しながら言った。
「魔法。剣。なんでもかまいません。できるのであれば、素手でもかまいません」
「わかった。よし行くぜ！」
空はウィンディンのその説明を聞くと勢いよく走り出した。そして、木に剣で攻撃をした。
「痛！」
剣で攻撃をしたのがいいが、木は倒れず、三センチほどの切れ込みだけが入った。
「さすがに木はそう簡単には倒れないみたいね」
「そうだね。じゃあ、次は僕がいくね」
灰戸はそう言うと、先ほどの練習の時のように目を閉じ気持ちを杖に集中させた。すると、水が勢いよく飛び出し木に当たった。だが、木はびくともしない。
「やっぱりダメか……。水の力じゃ倒すことはできなさそうだもんね」
「ウィンディン。本当にあの木は倒れるのかよ」
あかりたちの所に戻ってきた空がウィンディンにそう聞いた。
「倒れます。ただ、私がやってしまうと意味がないのでお見せすることはできませんが」
それから空たちはその木に向かいさまざまな攻撃をしたが、その木は倒れることなく、太陽はほとんど傾いてしまった。

そして、あたりは一面真っ暗になるまで、三人は攻撃をしたが結局、その木が倒れることはなかった。
「本当に倒れるのかよ……」
空が息を切らしながら言った。
「これだけやってるのに倒れないなんて……」
「もう、僕疲れちゃったよ……」
三人ともついに力尽きてしまい、その場で座ってしまった。
「仕方ありませんね。それでは今日はこの辺で終了し、明日、再度やりましょう」
ウィンディンはそう言うと、空たちを城の入り口まで案内して、空たちと別れた。
その後。空たちは部屋に戻り、休憩をしていた。
その休憩中。灰戸は空に言った。
「ねえ。本当にあの木が倒れると思う？」
「さあね。俺の攻撃で傷はついているからそのまま攻撃し続ければ倒れると思うけど、結構時間がかかりそうだし。あの木を攻撃してると手が痛くなるし」
灰戸はそれを聞き、空の手を見た。すると、そこにはまめができていた。それも一個ではなく大量に。
「空くん、それ……」
「ああ。たくさんできちまった。まあ、いずれ直るだろうから大丈夫さ」
「一応見てもらったらどう？」
「いや、いいよ。自然に治るからさ」
その日の真夜中。城の鐘がなり響いた。その音に空たちは起こされてしまった。
「な、なんだ！」
「大変です！　皆さん！　雷の民達が攻め込んできました！」
空たちが起きたとたんにウィンディンが、空たちの部屋にやってきた。そして、そう言ったのである。

「とにかく、あなた方は非難していただきます。こちらへどうぞ」
ウィンディンはそう言うと、空たちに道案内をした。すると、昼間練習をしていた草原に出てた。
「あなた方はここにいてください。私たちは雷の民と戦わなければいけません」
「え？　俺たちはここにいるだけなのか？」
「そうです。あなた達の身に何かあったらいけませんから」
「でも、俺たちは戦うために来たんだろ。戦わなければ意味がないじゃないか！」
「あなた達はまだ戦うためだけの力を持っていません。ここでおとなしくしていてください」
ウィンディンはそう言うと何か呪文を唱え、その場から消えてしまった。
「空。あなたが何を言いたいかはわかるわ。でも、私たちにはまだ力がないの。ウィンディンの言ったようにここで待ってましょう」
「そうだよ。僕たちが行ってもじゃまになるだけだよ」
「くっ。おとなしく待ってろって言うのか……」
「おい！　こっちにもいるぞ！」
空たちが話していると、空たちの所に雷の民のものがやってきた。そして、大声で仲間を読んでいる。
「まずい！　逃げよう、二人とも」
灰戸はそう言い、その場から逃げようとした。しかし、空はそこから動こうとしなかった。それどころか、剣を取り出している。
「ちょっと空！　なにをしてるの。早く逃げるわよ」
「嫌だ。俺はあいつらと戦う」
「空！　あなたなにを言ってるかわかってるの！」
「行くぞ！」
空はあかりの言葉を無視し、まだ一人しかいない雷の民の所へ走っていった。
「やる気か！　ならば！」

雷の民はそれに気づき剣を取り出した。そして、空の剣とぶつかり合った。
「とりゃ！」
空は思いっきり剣を動かした。だが、相手はそれをうまく剣で防いでいる。
「そんなもんか！」
雷の民はそう言うと、空の剣とぶつかっている時に思いっきり力を入れ、空の剣を弾き飛ばした。
「なに！？」
「これで止めだ！」
空はもうダメだと思った。切られる覚悟になったのである。
だが、それから十秒ほどたっても痛くない。空はおそるおそる閉じていた目を開けると、そこには雷の民はいなかった。
「どういうことだ？」
空はそう思った。そんな時、後ろからあかりたちがやってきた。
「大丈夫？　空」
「あ、ああ。大丈夫だ」
「はい、空くん。これ」
灰戸はそう言って、空に剣を差し出した。もちろん、さっき吹き飛ばされた剣である。
「ありがとう、灰戸。ところで、奴は？」
「あそこにいるわ」
「よし！　くらえ！」
あかりが雷の民を指差すと、空は走り出した。
そして、倒れている雷の民に空は攻撃をした。
「これで倒したな……」
空はあかりたちの所に戻ってきて、そう言った。
「そうだね」
「さあ、早く逃げましょう。あいつは別の仲間を呼んでいたんだから」

「うん。空くん、早く行こう」
「いや、俺はこのままここに残る」
「空！」
「空くん！」
「お前達は先に行くなら行くんだ。俺はこのまま残る」
「でも、空一人じゃ倒すことはできないわ」
「そうだよ。さっきだって、僕の魔法で空くんを助けたんだよ。僕らがいないと、あぶないよ」
「大丈夫だ。今度はあんなミスはしない」
「でも……」
灰戸がそう言ったその時だった。先ほど空が倒した、雷の民の上空に謎の電気物体が現れた。
「空！　あれ！」
それに最初に気づいたのはあかりだった。
それは、黄色く光っており、体からバチバチと電気を出しており、身長は百七十センチメートルほどだ。
そいつは地上に降りてきて、空たちのほうを向いた。そして、こう言った。
「お前は誰だ！」
「オレはボルト。雷の神なり。それよりきさまらが風の民の救世主だな。オレがここで始末してやる！」
ボルトはそう言うと、雷を放ってきた。その雷はさほど大きくなかったので簡単にかわすことができた。
「へん！　それだけかよ！　今度はこっちから行くぜ！」
空はそう言うと、剣を構えボルトに向かって行った。
「空！　灰戸お願い」
「うん」
あかりは灰戸に魔法を使うように言った。
その魔法は空を追いかけるように飛んでいった。
「くらえ！　ボルト！」

「無駄だ」
ボルトはそう言い、空の攻撃を簡単にかわした。
「なに！？」
「これでもくらえ！　サンダード！」
ボルトはそう言い、先ほどより強力な電撃を空に放った。
だが、その電撃は灰戸の水魔法にタイミングよくあたり、空には電撃は当たらなかった。
「た、助かった……！」
「じゃまが入ったか……。ならば、ここにいるやつら全員を倒すとするか……」
「そんなことは俺がさせない！」
空はボルトのその発言に言い返した。こうして、雷の神ボルトとの戦いが始まるのだった。

第０５話　「新しい地」

「くらえ！」
空はそう言って、ボルトに向かって走り出した。
「無駄だ」
空はボルトに切りかかったが、ボルトは余裕の表情で空の攻撃をかわした。
「とりゃ！」
かわされてはいるが、空は攻撃を続けた。しかし、ことごとくかわされてしまっている。
「もう、何やってるのよ空。灰戸やるわよ」
「わかった」
空を見ていたあかりたちは、気を杖に集中させ魔法でボルトを攻撃した。
「小ざかしい！」
だが、その攻撃はボルトの電撃により防がれてしまった。そして、空の連続攻撃も余裕でかわしている。
「少年よ。お前がオレを倒すことができるとでも思ってるのか」
「倒せるさ！　やれば倒すことは絶対できる！」
「だが、お前の攻撃ではオレを倒すことなどできん。オレを倒すことができる奴はこの世でいるかいないかだ」
「うるさい！　黙ってやられやがれ！」
空はそう言うと、ボルトに初めて剣を当てた。だが、それはかすった程度だった。
「む。さては多少できるようだな。ならばオレはお前を倒してやろう」
そう言うと、ボルトは目を閉じ何かを念じ始めた。空の攻撃やあかりたちの攻撃をかわしながら。
「くらえ！　サンダード！」

ボルトはそう言うと、電撃を放ってきた。
「ぐわっ！」
空はその電撃に当たってしまい、吹き飛ばされてしまった。
「空！」
「弱いな。しょせん、異世界の者。オレに勝とうなど無駄なのだ」
ボルトはそう言うと、あかりたちの方を向いた。
「さて、お前達も倒してやろう」
ボルトはそう言うと、何かを念じ始めた。どうやら、さっきのわざを出してくるらしい。
「灰戸！　魔法よ！」
「わかってるよ」
あかりは灰戸にそう言うと、灰戸は水の魔法を念じ始めた。
そして、あかりも魔法を念じ始めたのである。
「くらえ！　サンダード！」
ボルトは魔法を放ってきた。あかりたちはまだ念じているままである。
「サイネード！」
そのときだった。その電撃があかりと灰戸に当たろうとしたその瞬間。電撃が吹き飛ばされたのである。
「なんだと！」
「行け！　水の魔法！」
そして、灰戸の水の魔法がボルトに向かって放たれたのである。その水の魔法は見事ボルトに命中した。そして、あかりの魔法も何とか当たったのである。
「くっ。邪魔が入ったか」
「ボルト！　その子達は僕が倒させない」
すると、あかりたちの前にシルフが現れた。
「シルフ！」
「やはりお前か」
「そうだよ。さあ、雷の民達を引き上げるんだ。さもないと……」

「さもないとオレを倒すってか。そんなことができるかな」
「できるさ。ボルトの後ろには風の民であるウィンディンがいるんだからね」
そう。ボルトの後ろにはさっきまでいなかったウィンディンがいつの間にかいるのである。
「参ったねシルフ。仕方ない。ここは引き上げるとしよう。だが、必ずお前を倒す」
ボルトはそう言うと、空中に飛び上がり、一瞬で消えてしまった。
「ウィンディン。彼を」
ボルトがどこかに行くと、シルフはウィンディンに空を助けるように指示を出した。
そして、空は城の医務室に運ばれたのである。
「ここはどこだろう？　とっても暗い……」
空は夢の世界に入っていた。周りはとても暗く何も見えない。見えるものは暗黒のみ。
空はその中に一人ぽつんといるのである。
「空……」
そんな時。一つの言葉が聞こえた。
「だれ……？」
「”ヘムリス”へ行くのです。そこであなたを待つものいます」
「ヘム……リス？」
「さあ行くのです」
「あなたは一体……」
すると、空は暗い世界からもとの明るい世界へと戻ってきたのである。
目の前には灰戸とあかりの顔が移っている。
「あ、おきたんだね。無事でよかった」
「ここは一体……？」
「ここは城の医務室よ」
あかりがそう言うと、空は起き上がった。すると、痛みが走った。

「寝てなきゃダメよ、空。あなたは電撃を受けたんだから」
「ボルトはどうなった？」
「シルフとウィンディンが助けに来てくれたから、帰って行ったよ」
「そうか。ところで、ウィンディンはいるか？」
「なんでしょうか？」
空がウィンディンがいるかどうかをたずねると空の前にウィンディンが現れた。
「あのさ。ヘムリスってどこにあるんだ？」
「ヘムリス？　ヘムリスなら、この城から北に五マイル行った所にありますが」
「ご、五マイル？」
「空くんマイルって単位知らないの？」
「あ、ああ。初めて聞いた」
「マイルっていうのは距離の長さだよ。一マイル約一点六キロメートルなんだ。だから、五マイルとなると、約八キロぐらいになるよ」
「八キロ！？　かなり遠いいな……」
「失礼ですが、ヘムリスに何か？」
「いやさ。今、夢の中でヘムリスに行けって言われたんだ」
「夢の中で？　ふむ……。ならば、ヘムリスに行ったほうがいいですね」
「なんで？　夢の中の話なんて信用していいの？」
ウィンディンが行ったほうがいいと言ったため、あかりがウィンディンに反抗した。
「我々風の民は昔から夢の中でお告げをする人物をジンプウ様と呼んでいます。ジンプウ様は昔、我ら風の民を助けたとしまつわっている人物です」
「ようするに、その方のお告げは信頼できるってこと？」
「その通りです。では、空さんのお怪我が治ったら、ヘムリスに行くことにしましょう」
そして、数日が流れた。

空の怪我は風の民特有の治療法でたちまち直り、すぐに動けるほどになったのである。
そして、空たちは城の前にいた。
「それでは、ここを北に進んだところにヘムリスはあります。ヘムリスは遺跡なのでくれぐれも注意してください」
「わかってるって。ウィンディンに言われたとおりにすればいいんだろ？」
「はい。私がご案内できないのが何より不安ですが、くれぐれもお気をつけて」
「わかった。それじゃあ、行こう」
こうして、空。あかり。灰戸の三人は、ヘムリスに向かうのである。

第０６話　「四つの伝説の剣」

　ヘムリスの入り口とやってきた空たち。
ヘムリスと呼ばれたその遺跡は、普通の遺跡だったのだが、唯一異なっていた点があった。
「なんで、こんな入り口が狭いんだ？」
「知らないわよ。そんなこと」
　ヘムリスの入り口は、子供しか入れそうもない大きさだった。
だが、何とかすれば入れない大きさでもなかったので、空たちはぎりぎりヘムリス内に入ることができたのであった。
「ここ恐い……」
　ヘムリス内に入って最初にそう言ったのは灰戸だった。
ヘムリス内は、イメージ通りの遺跡の雰囲気が漂っていた。通路は狭く、二人並んで通ることはできない大きさだった。
空はウィンディンから借りていた、ランプを取り出し灯りをつけた。
「灰戸って恐がり？」
「ぼ、僕は……」
「気にすんなよ、あかり。誰にだって苦手なことはあるさ」
　空たちは空を先頭にして、奥に進んで行った。すると、階段があったので階段を下っていくと、そこには入り組んだ広ろそうな部屋が現れた。
「急に広くなったね」
　灰戸が言った。
「地下は制限がないってことね。さて、これからどうしましょうか？」
「とりあえず、ここを調べることにしよう。俺を待っている人物というのがいるって言う話しだったし」
　空たちは、入り組んだ部屋を奥に進んでいった。
だが、進んでいった道は、行き止まりだったため、引き返しては新

しい道に入っていくとさらに行き止まりだったりと、行ったり来たりしていた。
「なんだよここ。全部の道を行っても結局行き止まりだけじゃないか」
「変な場所だね」
「変すぎるよ」
「それよりどうするの？　このまま帰る？」
「どうするか。このまま未収穫で帰るのも俺たちの苦労がないしな」
「でも、結局なかったら何の収穫もないままだよ」
「まあな」
その時。階段からこつこつと誰かが降りてくると音がしてきた。
「誰かきたな」
最初にその音に気がついたのは空だった。
そして、空たちの前にその人物は現れた。
「誰だ！　きさまら！」
その人物は男だった。空たちを見ると剣を抜き戦闘態勢に入った。
「待て待て！　俺たちは怪しいものじゃない！」
「ならここで何をしていた」
「僕たちは、ある人物が待ってるということでここに来たんだ」
「もしかして、きさまらは、エンジン様のお告げでやってきたのもか？」
「エンジン？」
「私たちは、ジンプウという人のお告げでここに来たんだけど」
「ジンプウだと？　もしかして、お前達は風の民か？」
「そうだけど」
「やはりそうか。ジンプウとは風の民がまつわっているという人物だな」
「そうそう。そのジンプウさん。ところで君の言ったエンジンさんっていうのは誰？」
「エンジン様は、我ら炎の民がまつわっている人物だ」

「じゃあ、君は炎の民なんだ」
「そうだ。私はエンジン様のお告げでここに来たのだ」
「その点に関しては私たちと同じなのね」
「そのようだな。私は、炎火焔という。お前たちは？」
空たちは炎火に自己紹介をした。そして、自己紹介が終わるとあかりが言った。
「ところでこれからどうする？」
「そうだな。ここにはもうなにもないみたいだから、戻るとするか」
「なにもないとはどういうことだ？」
炎火がそう聞いてきたので、空は先ほどの体験を炎火に話した。
「なるほど。では、もう一度その行き止まりに行ってみるとしよう」
炎火はそう言うと、空たちを無理やり、行き止まりへと向かわせた。
すると、ある一個の行き止まりを見て炎火は言った。
「この壁……」
「どうしたんだ？」
「この壁が、他の壁と比べるととても傷んでいる」
炎火はそう言うと、剣を取り出した。その剣を近くで見た空たちは目を疑った。
先ほどは遠く暗くてよくわからなかったが、その剣は炎を取りまき、真っ赤な剣だったからである。手元から剣先まですべて真っ赤である。
炎火はその剣で、壁を切ると、その壁は崩れてしまった。すると、その奥に一つの階段があった。
「階段だ」
「行ってみよう」
空たちは奥に進んでいった。階段を上ると、そこは小さな小部屋があった。
「これは？」
空はその部屋にあった古びた本を見つけた。その本を空は開いて

みた。
「なになに『風の剣は古びた風の民の遺跡にあるなり』か」
「ねえ、空くん。こっちの文字はなんて読むの？」
空が読んだのは本の一箇所だけだったので、灰戸が別の文字はどう読むのかを聞いた。
「いや、こっちの文字は俺にも読めない。字形は似てるんだけどね」
「その文字は私が読もう」
「読めるの？」
「ああ『炎の剣はフレア城に安置してあるなり』と書かれている。残りの部分は私にも読むことはできない。そして、風樹が読んだその一文も読めない」
「どういうこと？　読めない字と読める字があるなんて」
「それより、この内容の意味は一体どういうことかしら？」
「読めない字と読める字は、おそらく種族の違いだろう」
「種族の違い？」
「ああ。例えば風樹は風の民。私は炎の民だ。よって、風樹は風の民に関係がある文字しか読めない。私は炎の民に関係してある文字しか読めないということだ。
この剣についてはおそらく、各民が所持しているという伝説の剣のことだろう」
「伝説の剣？」
「そうだ。各民の力に比例し威力が高まるという伝説の剣。現に私が持っているこの剣は、ここに書かれている剣の一種であるフレアブレードだ」
「フレアブレード……」
「どうやら、この本には、残りの民。すなわち、水の民と雷の民の剣について書かれているようだな」
「ああ。よし。このことを戻って報告するとするか」
「この本はどうするの？」
「この本はここにおいておくとしよう。どこかに持っていってしま

うと困るからな」
「でも、雷の民が見つけたら大変なことになるわよ」
「それなら心配はない。すでに、雷の民は、この伝説の剣を手にしているという情報が入っている」
「そうなのか！　じゃあ、大変じゃないか」
「だから、私もこのフレアブレードを手に入れたのだ」
「そうだったのか……」
「じゃあ、空。戻って、風の民の剣を手に入れましょう」
「ああ」
　こうして、空たちは炎火と別れヘムリスを後にして、ウィンドシティの城に戻るのだった

第07話　「灰戸の存在」

空たちはウィンドシティへと戻り、ヘムリスでの出来事を話した。伝説の剣のこと。風の民の剣のこと。炎火の持っているフレアブレードのこと。

それを聞いたシルフはこう言った。

「そうか。じゃあ、その風の民の剣の場所を知りたいというんだね？」

「はい。空の解読した『風の剣は古びた風の民の遺跡にあるなり』の仲の『古びた遺跡』とは一体どこのことなんですか？」

「おそらく、それは僕たち風の民が昔住んでいたと言われているあそこかもしれないな……」

「それはどこなんだ？」

「この場所を伝えていいのかな？　ウィンディン？」

「いえ。この者たちはまだ未熟な力しか持っていません。あの場所へ送るにはまだ危険ではないかと存じます」

「だろうね」

「あの、一体なにを話しているんですか？」

「武内さんが言った古びた遺跡というのに、僕たちは心当たりがあるんだ」

「本当ですか！」

「うん。だけど、そこは危険な魔物が住んでいるんだ」

「魔物？」

「うん。さっきも言ったとおり、その場所は風の民が昔住んでいた場所だ。でも、今はこの街に住んでいる。これがどういう意味を指すかわかるかい？」

「昔の場所じゃ居心地が悪かったのかしら？」

「大体そんな感じかな。昔の場所には、魔物がたびたび襲ってきたんだ。だから、風の民はその場をすて、この地へと移ってきたんだ。

少し話しがずれちゃったね。
つまり、その魔物がいるから君たちが行くと倒されてしまう確率が高いんだ。君たちは僕たちの救世主となるべき人物。そんなところで失うわけには行かないんだ」
「でも、その風の民の剣を手に入れたほうがいいのではないでしょうか？」
「まあね。ちなみに、その剣は”ウィンドブレード”という名前がつけられている。だけど、ウィンドブレードを手に入れたとしても今はウィンドブレードを操れる人物がいないのが現状なんだ」
「ウィンドブレードを操るってどういうことだ？」
「ウィンドブレードは風の民の力を経た剣。使用者自身に力がない。もしくは、風の民でないものが、剣を使用すると持っているものにダメージが与えられてしまう。だが、使用者に力さえあれば、その剣は莫大な戦力となるのは確かだ」
「まさに諸刃の剣ね」
「その通り。君たちが言っていた炎の民の少年も、相当の力を身につけている人物だということにもなる」
「あいつが相当の実力者……」
「まあとにかく、ウィンドブレードについては気にしないほうがいい。時が来た時に入手すればいいのだから」
「でも、その前に盗まれてしまったら？」
「大丈夫だ。あそこの魔物はウィンドブレードを扱えるほどの力を持っている人物でないと入っても倒されるほど強い。万が一、ウィンドブレードが安置されている場所まで行っても、風の民でない限り、ダメージを受けてしまい扱うどころではないだろうからね」
　空たちはシルフのその話しを聞き、部屋へと戻った。
その日から、空たちはウィンドブレードのことを気にかけながら、ウィンディンによる能力上昇の訓練を受けた。
空は剣の腕を磨こと。そして、風の民のわざを習得した。
あかりは、回復魔法を極めた。人の疲れを癒す力。減った体力を元

に戻す力などを習得したのだ。少しながら、風の攻撃魔法も取得した。
灰戸は、水の民ということもあり、なかなかウィンディンの指導ではわざが身に付かなかった。だが、灰戸のがんばりで、水の魔法をうまく操作できるようになった。
　その訓練を受け、この世界に来て四ヶ月がたったのであった。
そんなある日。部屋で休憩していた空たち。その中で、灰戸が言った。
「なあ。僕たちの世界に本当に戻れるのかな？」
「ウィンディンに言ったら戻してくれるんじゃないかしら？」
「そうかな……？　じゃあ、言ってこようかな……」
「どう言うことだ？　灰戸」
「僕……。僕、この世界に生きる自身がなくなっちゃったんだ。僕は体力もないし……。雷の民と戦う力に自身がないんだ」
「ってことはなにか。今までの努力を捨て、元の世界に戻ろうって言うのか？」
「うん……」
「なんで今になってそんなことを言うんだよ。今までの努力を捨てるなんてもったいないじゃないか」
「でも、僕……」
「わかった。じゃあ、帰ればいいじゃないか」
「ちょっと、空。やめなさいよ」
「あかりは黙ってろ。灰戸がこんなに弱気な奴だとは思いもしなかったよ。努力をしてきたのに、その努力を踏みにじるなんてことをするとも思わなかった」
「……」
「帰りたいならとっとと帰っちまえ！」
　空は大声でそう言うと、灰戸はゆっくりと立ち上がり部屋を出て行ってしまった。
「灰戸……。空、言いすぎよ」

「言い過ぎなもんか。あいつが、あんなに弱気なことを口にするのが悪いんだ」
「なんで、そんなことで怒るのよ」
「そんなことあかりの知ったことかよ！」
空はそう言い部屋を出て行った。
「どうして、こうなっちゃうのよ……」
そんな頃。灰戸は武器庫で一人座って泣いていた。
「空くんあんなに言わなくても……。僕だって……僕だって……」
灰戸がそう泣いていると、突然、ものすごい音が聞こえた。
「な、なに！？」
灰戸は、涙をぬぐい立ち上がった。そして、武器庫を出て、外を見てみると、そこには雷の民たちが城を襲っていた。
「か、雷の民じゃないか……」
一方、その頃。空も外を見て、雷の民から襲撃を受けていることに気が付いていた。
「仕方ねえ。行くか」
空は剣を取り出し、雷の民たちがいる、城門前まで走って向かっていった。
そして、城門前で大量の雷の民を相手にし戦い始めた。
そのように戦っていると、あかりとウィンディンを含めた城の人たちが来て、空の援護をし雷の民と戦うのであった。
だが、空はその中で戦いながら灰戸の姿を探した。
（なんで、灰戸のことなんか考えなきゃいけないんだ。今はこいつらを倒すのが先だろ）
空はそう思いながらも、灰戸のことを考えていた。
そんなときである。上空から大きな雷雲が城の一番上に止まったのである。空は横目でそれを見た。すると、その上空には雷の神であるボルトがいたのである。
「ボルト！　あいつ、一体何をする気だ……。ウィンディン！　ボルトが来たぞ！」

「わかっています。おそらくシルフ様がなんとかしてくださるでしょう」
「そんなのんきに考えていていいのかよ」
空はそう思いながらも、目の前の雷の民たちと戦い続けた。
「ふははは！　今こそこの街もオレの手になる時が来た！」
ボルトはそう言うと、なにやら巨大な電気玉を手と手の間に作り出した。そして、それを上に掲げている。
「オレのライトニングスパークをこの城に与える時が来た。死ぬがいい！　風の民たちよ！」
ボルトは一気にその電気玉を城門前へと投げた。
「なにかこっちに来る！」
空はそれを見て言い、その場から離れようとした。だが、電気玉は大きく、他の民達も逃げているため、速く進むことができない。
「もうダメか……」
空はそうあきらめた。しかし、あきらめた意味はなかった。
数秒間目を閉じていたが、電気玉が飛んできたであろうと思われた時間にたっても自分の体に痛みが発しない。
恐る恐る目を開けてみると、そこにはシルフがバリアを作り、空たちを守ってくれていた。
「大丈夫かい？　風樹くん？　武内さん？」
「し、シルフ！　ああ。大丈夫だ」
「私も大丈夫よ」
「おのれ！　またしてもシルフか！」
「ボルト！　君の好きにはさせないよ！」
シルフはそう言うと、ボルトに向かっていった。
「まあいいだろう。こいつがどうなってもいいのならな！」
シルフが向かっている途中。ボルトは一人の人物を自分の前に出した。
すると、そこには空とあかりにとっては忘れられない人物。そして、シルフたちには重要な人物がいたのである。

「灰戸！」
「くっ、人質か……」
そう、灰戸は人質になってしまったのだ。
こうして、シルフたち風の民はピンチを迎えるのである。

第０８話　「仲間と別れ」

「さあ、オレのライトニングスパークを受けてみろ！」
ボルトはそう言い先ほどの巨大な電気玉を作り始めた。
「くっ、風樹くんたちは逃げて！」
「でも、シルフは……」
「僕は大丈夫。さあ、逃げるんだ」
「なにをごちゃごちゃ言っているこれをくらえ！」
シルフと空が会話をしていたが、その間にボルトは電気玉を放ってきた。
「ウィンドバリアー！」
シルフはその電気玉をバリアを作り、耐えていた。しかし、先ほどより距離が近いからかシルフが少しずつ押されている。
「シルフ！　あかり、魔法で援護をしてやってくれ」
「でも、あそこまで届くかどうか……」
「それでもいい。やるだけやるだ」
「わかったわ」
「ウィンディンも頼む」
「わかりました」
空が指示した二人は魔法を唱え始めた。その間にもシルフは少しずつ押されている。
そんなとき。ふっと空がボルトを見てみると、ボルトは次なる電気玉を作っていた。
「まずい！　二発目を発射する気だ！」
「ウィンドストリーム！」
「サイネード！」
空が二発目の準備をしているのを発見した時、あかりとウィンディンの魔法が発動し、シルフをカバーした。
そして、その一発目の電気玉とバリアは同時に消えたのである。

だが、それと同時にシルフも力つき、地上に落下していった。
「無様だなシルフ！　これで終わりだ！　ライトニングスパーク！」
「シルフ様！」
ボルトのライニングスパークはシルフに向かって一直線で飛んでいった。
その時、ウィンディンがシルフを助け、自らがボルトのわざを受けた。
「ぐわっ！」
「ウィンディン！」
わざを受けたウィンディンはシルフと共に地上へと落ちていった。
しかし、地上にたたきつけることだけは、あかりの魔法で何とか免れたのである。
「あのやろう邪魔しやがって。まあいい。シルフはもはや戦う余地などあるまい」
ボルトはそう小声で言い、灰戸をつれどこかに行ってしまった。
だが、それに空たちが気が付いたのは少し遅かったため、ボルトがどちらの方向へ行き、灰戸がどうなったかは不明だった。
「灰戸……」
「とりあえず、救護室に二人を運び治療しましょう」
シルフとウィンディンは城の救護室へと運ばれた。
救護室の民が、二人を治療しあかりもできる限り手伝いをした。
だが、シルフこそ一命を取り留めたものの、ウィンディンはその場で帰らぬ者となってしまったのである。
それから、数時間後。シルフが目を覚ましたことに近くにいた空とあかりが気が付いた。
「大丈夫か？　シルフ？」
「う、うん。それによりここは」
シルフはそう言うと起き上がった。
「城の救護室よ。あなた達の治療をしたの」
「あなた達？　ということは僕以外にも誰かが怪我をしたのか？」

シルフはそう言うとあたりをきょろきょろさせた。そして、隣のベッドにいるウィンディンの姿を見つけた。
「ウィンディンか……。一体どうして、ウィンディンは怪我をしたんだい？」
「実は……」
空はシルフにウィンディンが怪我をした状況と今の状況を説明した。
「そうか。僕のために……」
「ああ……」
「ウィンディンには悪いことをしたな……。どうか、ゆっくりと眠らせてあげてください」
シルフは救護室にいたの民に言った。そして、ウィンディンは部屋から運び出されたのである。
「ところで、ボルトのことなんだが」
空は重い空気の中で言った。
「ボルトは俺たちがなにもしないのにどこかえ行ってしまった。これはどういうことをあらわすんだろう？」
「おそらく、エネルギーが切れたんだろう」
「エネルギー？」
「うん。魔法使い――魔法を使うことのできる者のことだが――は、魔法を使うためにエネルギーがいるんだ。このエネルギーをトリックエネルギーと言う。ちなみに、君たちは魔法魔法と言っているが、この魔法のことをトリックというのだ」
「そうだったんだ」
「ボルトは、あの巨大なわざを使うのにトリックエネルギーを使い果たしてしまったんだろう。だから、帰ったんだ」
「じゃあ、エネルギーが回復しだい、またやってくるってこと？」
「そういうことだね。僕が動けないことを知っているだろうし」
「じゃあ、一体俺たちはこれからどうすればいいんだ……。灰戸の奴も連れて行かれちゃったし」

「……。仕方ない。本当は使いたくなかったんだけど」
「なにか解決策があるのか？」
「うん。君たちが取得しているわざは、風の民のトリックのほんの一部だ。まだまだ、強いトリックはある。その中から比較的取得しやすいわざを取得してもらうことにしよう」
「わかりました。で、どうすればいいんですか？」
「とりあえず、今は教官室に誰かがいるはずだ。彼らに、風樹くんは”ウィンズアース”。武内さんは”ストリームアース”と言うんだ。僕がそう言ったといえばどんな状況であっても訓練をしてくれるだろう」
「わかりました。行こう、空」
「ああ」
空とあかりは教官室へと向かった。そこには、恐そうな男が一人だけいた。
「誰だお前ら？」
「あの、わざを教えて欲しいんですが」
「今は忙しいんだ。後にしてくれ。大体、お前らにわざが使えるようになるとは思えんしな」
「あの、シルフからわざを教わるように頼まれたんですけど」
「シルフ様から？　冗談はよせ」
「本当です。空にはウィンズアース。私にはストリームアースを教えてください！」
「また今度な」
「お願いします！」
「教えてあげてくれ、アース」
あかりが教官に向かって頼み込んでいる時、シルフがやってきてそういった。
「し、シルフ様！　は、シルフ様のご命令とあらば」
「頼んだよ。アースはウィンズアースとストリームアースを教えるのは得意だったよね？」

「はい。私が開発したわざですので」
「じゃあ、そのすべてを彼らに教えてあげてくれ」
「わかりました。よし、じゃあ、そこの二人は庭に出ろ」
空たちは庭へと出た。すると、そこで、アースは言った。
「よし、そっちの剣の坊主は、ウィンズアース。そっちのお嬢ちゃんは、ストリームアースだったな」
「はい。私は武内あかりと言います。こっちは風樹空」
「武内と風樹か。わかった。では、まず、ウィンズアースとストリームアースについて教えてやろう」
「はい」
「まず、ウィンズアースは、地を這う風だ。このわざは剣を使うものには効果が倍増する、剣士が使うととても有利なわざだ。こいつを応用すると、上空の敵にも攻撃することができるわざとなる。なぜかといえば、地上で上昇気流を発生させることにより、風が上昇し上空にいる敵に攻撃をすることができるからだ。
そして、ストリームアースは、わざと言うより魔法だ。ウィンズアースと同じく地上を回るのだが、風が竜巻のようになっており上空にいる敵でも攻撃することができる。どちらかといえば、トルネードアースとでも行ったほうがいいかもしれんわざだ」
「わかった」
「よし、じゃあ、とっとと始めるぞ」
こうして、空とあかりは新しいわざを身につける特訓を始めるのだった。

第０９話　「アース系のわざ」

ウィンズアースとストリームアースを覚えるために、特訓をしている空とあかり。
特訓を始めること三時間後のことだった。
「出やがれ！　ウィンズアース！」
空は教官から、教えてもらったやり方をずっと試していたが、なかなかウィンズアースを出すことはできなかった。そして、今回もまた失敗だったのである。
「くそ！　なんでできないんだ」
「落ち着け、風樹。あせりながらやればそれこそできない。落ち着いて、私が教えたとおりにやれば使うことはで切きる」
「そうよ、空。落ち着きなさい」
「さっきから落ち着いてやってるさ。でも、できないないんだよ」
「それはどこか落ち着きがない部分があるということだ。心を無にするような感覚でわざをやってみろ」
「わかった」
それから、その場は少しの間静かだった。ただ、風の流れる音が聞こえるだけである。
「行け！　ウィンズアース！」
空はその静かな空間の中で声をあげ、わざを発動させた。だが、今回もウィンズアースは発動しなかった。
「くそ！　やっぱりダメか」
「なにがいけないのだろうか……。武内はできたんだが風樹には何か違うものがあるのだろうか？」
あかりは、特訓開始後から二時間ぐらいでストリームアースを取得し、現在ではほぼ完璧に操ることができるようになっていた。
「あかりと俺では性格も違うし、頭のレベルも違うさ」
「だが、同じ風の民であるのには間違いがないならばできるはずな

んだが……。やはり、何か落ち着かない理由があるのかもしれんな」
「俺はちゃんと落ち着いてるぜ」
「だったらなぜウィンズアースを使えないのだ？　ウィンズアースはストリームアースを操るより簡単なわざなんだ。それができないわけはなかろう」
「やっぱり、空は落ち着いてないのよ」
「もういい。今日はやめる」
空はそう言うと、その場から離れ、特訓をやめてしまった。
「空……」
「しかたあるまい。風樹の心が落ち着くまでの休憩時間とするか」
「くそっ！」
武器庫に来た空は壁をたたきこう言った。
「落ち着けだって。冗談じゃない。ボルトがいつやってくるのかもわからないし、灰戸はとらわれたまま。こんな状況で落ち着けるわけないじゃないか」
空は、シルフが倒されたあのボルトを倒すことが本当にできるのか不安を持っていた。そして、そのボルトに灰戸という仲間をとらわれ今一体どうなっているかもわからない状況だったため、灰戸は落ち着いてなどいられなかったのだ。
ボルトの巨大な力の恐怖。灰戸の安否の心配。ウィンディンの死の悲しみもあるだろう。そんな中で、落ち着くのは難しいのだ。
そんな時、城内に警報が響き渡った。
「な！　なんだ！？」
空はそれを聞き武器庫を出た。すると、遠くの空からこちらに向かって何かが飛んできている。
「雷の民が戻ってきたか……」
空はそう思った。そして、空は庭へと向かった。
「どうやら来たみたいね、教官」
「ああ。ストリームアースで、上空の奴らを攻撃して来るんだ。この城に近づけさせるな」

「わかりました」
あかりは、城を出て、雷の民がいる方向へと向かった。地上から、ストリームアースで攻撃するのだ。
あかりが、その場を離れてから数分後。教官のところへ空が戻ってきた。
「はぁはぁ。教官！　雷の民が……」
「わかっている。武内を今、雷の民がいるほうへとやった」
「あかりを？　それまたなぜ？」
「武内はストリームアースが使える。それで、地上から攻撃させるためだ」
「わかった。じゃあ、俺もそっちへと向かう」
空は教官からそれを聞き、城から出て行きあかりを追った。
そんなころ、あかりは、雷の民が向かってくるであろう場所でストリームアースを唱えていた。
「いきなさい！　ストリームアース！」
あかりはストリームアースを発動させた。ストリームアースはいっきに上空へと風を送り、その場に巨大なトルネードができた。
ストリームアースの風は、目に見えないものだった。だが、威力はとても強い。
そのストリームアースの風が通っている場所へと雷の民が突入してきた。雷の民はその風でどんどんと下に落ちてきた。
「まずい！」
あかりを追ってきていた空がその様子を走りながら見ていた。
下へと落ちてきた雷の民は攻撃態勢に入ろうとしている。
「くっ、バリアー！」
あかりはストリームアースを片手にバリアーをはった。そのため、ストリームアースの力が弱り、通り抜けられる雷の民が増えてしまった。
そして、下に下りてきた雷の民があかりのバリアーに攻撃を始めた。
それにより、ストリームアースは中止しバリアーに力を入れた。

「このままじゃ、押し切られちゃう……」
バリアーは雷の民の電撃攻撃によりダメージを受けている。このままではバリアーが壊されそうになっていた。
「グラウンドウェーブ！」
バリアーが壊されそうになったそのときだった。地上をはって衝撃波が来て雷の民を攻撃した。
それに気づいたあかりは後ろを振り向くとそこには空がいた。
「空！」
「大丈夫か！　あかり！」
空はあかりに近づき言った。
「大丈夫よ。それより、こいつらを！」
「わかってる！　グラウンドウェーブ！」
空は地上をはうようにして衝撃波がいくグラウンドウェーブを使った。グラウンドウェーブはそれほど威力はないため、何発か使い相手を倒した。
「ふぅ。これで大丈夫だろう」
「ありがとう、空。さあ、城に戻るわよ」
「え？　なんで？」
「今の雷の民だけじゃないの！　別の雷の民が城に向かったのよ！」
「なんだって！？　全然気が付かなかった……」
「さあ早く行くわよ！」
空とあかりは城へと戻っていった。
一方その頃、城には雷の民が侵入していたが、城の兵隊が雷の民と戦っていた。
だが、雷の民の方が一方的に強く、兵隊は時間稼ぎとしかならないほどであった。
「バキューアース！」
その中で、空とあかりの教官であるアースは、トリックを駆使しながら雷の民を倒していた。
バキューアースは、敵を自分に近づけ、自分の周りにできている強

い風で敵を倒すわざで、ありじごくのようなわざだ。
　そのようにして、風の民が戦っている中。救護室でその様子を見ていたシルフがいた。
「雷の民がやってきたか……。ボルトがいないところを見ると、民がいなくなってから来るつもりだな。そんなことは絶対にさせないぞ！」
　シルフは立ち上がろうとしたが、まだ痛みが残っており立つことはまだほとんどできなかった。
それを見た救護室の風の民がシルフに立たないようにいった。
「シルフ様。まだ、立つことはできません。シルフ様のお怪我はそう簡単には直りません」
「これぐらい大丈夫だ。それより助けてやらないと……」
　シルフは強気の姿勢を見せたが、そう言ったときにがくっと倒れてしまった。まだ、足に力が入らないのだ。
「シルフ様。さ、お休みになられてください」
「くそ！　こんな時に戦えないなんて……。なんて僕は馬鹿なんだろう！」
「シルフ様……」
　一体この戦いはどういうことになるのだろうか。そして、風の民の運命は！？

第１０話　「雷の神襲来」

「行け！　グラウンドウェーブ！」
「ストリームアースよ！」
城へと戻ってきた空とあかりはすぐに攻撃を開始した。
城の庭にいる雷の民はざっと百人ほどいるだろう。だが、風の民は以前の戦いなどから三十人ほどしかいなかった。
だが、その差を埋めたのは空とあかりだ。彼らは、一人で一気に雷の民を倒していくのだ。
「バキュームアース！」
「ふん！　そんなわざなどもうきくか！」
教官であるアースは、バキュームアースで攻撃を続けていたが、ついにわざがかわされてしまい、ピンチを迎えた。
雷の民は自分のこぶしでアースに向かって殴りかかった。
「教官！　行け！　グラウンドウェーブ！」
「ストリームアースもそっちに送るわ！」
空とあかりはわざをアースに攻撃したものへと発射した。それによりその雷の民は倒れてしまった。
「教官大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ。それより……」
空とアースがそう話していると別の雷の民が攻撃を仕掛けてきた。
「ウィンズアース！」
アースは剣を一気に取り出しウィンズアースで攻撃をした。
バキュームアースが見切られたことがわかり、わざを変えたのだ。
「空！　シルフ様が心配だ！　シルフ様のところへ行ってくれないか？」
アースは雷の民と戦いながら空に話しかける。
「だけど、この状況では……」
「シルフ様がやられてはこの街も城も民も終わりだ。シルフ様に危

険が迫っていたら助けてあげてくれ」
「……わかった。なにかあったら俺が守ってやるぜ」
空はそう言うと、城の入り口に向かった。
その途中、あかりに手短にシルフのところへ行くことを告げた。
城の入り口には兵士が一人倒れていた。どうやら、雷の民は内部へと侵入しているようだ。
空は急いで階段を駆け上がりシルフがいる救護室へと向かった。
中に入るとそこには女性と男性の二人がいた。
「おお！　風樹くん。一体どうしたんだい？」
「教官から頼まれて、シルフに危険が迫るならば守ってやれと言われたから来たんだ。今のところ何の問題もないみたいでよかった」
「そうか、アースから頼まれて。それより、ボルトの奴はまだ来ていないだろうね？」
「来てないぜ」
「そうか。これは僕の想像だが、ボルトはこの戦いが終わった後に来ると思う。おそらく、我々を倒してから攻め立てようというのだろう。
だから、今の雷の民を倒してからも気を抜いてはいけないよ。このことをアースに伝えてあげてくれ。彼ならちゃんと指揮してくれるだろう」
「わかった。じゃあ、行ってくる」
空が救護室を出るため、ドアノブに手をかけたそのときだった。
ドアノブが手に触れる前に回ったのだ。
「なっ！」
すると、外から体をバチバチと雷を出し、身長が高い男が入ってきた。
それを見たシルフは言った。
「ボルト！」
「ざまねぇなシルフ。きさまを倒しに来たぜ」
「そうはさせない！」

ボルトが中へ入ってこようとするのを空は止めた。
「きさまなどにようはない。そこをどけ」
「嫌だね！　シルフには指一本触れさせないぜ！」
「シルフ？　なるほどな。きさまが風の民の救世主とやらか」
「なに！？」
「風の民はシルフを慕っている。呼び捨てなどで呼ぶものか。唯一呼べるものといえば、同等の力。いや、それ以上の力を持つといわれている風の民の救世主の身だ！　これは傑作だ！　こんなガキが救世主とはな！」
「黙れ！　これでもくらえ！」
空はそう言うと剣をボルトに降りかかった。ボルトはそれを手でとめた。
「なんだと！？」
「たいしたことはないな」
ボルトはそう言うと剣ごと空を振り払った。
「風樹くん！」
「かんねんしな！　サンダード！」
ボルトはでんきをバチバチとさせた雷をシルフに向けて攻撃した。
シルフは身を守るため、バリアーをやっとの思いではり、攻撃から身を守った。
「君は逃げるんだ……」
シルフは近くにいる看護師に言った。
「しかし……」
「大丈夫だ。ボルトの隙を見て逃げるんだよ」
「きさまにまだ力が残っていたとはな。どうやら見くびりすぎたようだ。ならばこれを食らうがいい」
ボルトはそう言うと何か力をため始めた。どうやら、ライトニングスパークを発射しようとしているらしい。
「今だ！　逃げて！」
シルフはボルトが何かをためている時に看護師を室内から出して

やった。
「それで終わりか！　ならばきさまが消えるがいい！」
「させるか！　グラウンドウェーブ！」
ボルトが攻撃をしようとしたとき、立ち上がった空がボルトを攻撃した。
攻撃自体のダメージは少なかったが、発射する直前だったため、わざの力が小さくなり攻撃できるものではなくなってしまった。
「きさま！」
「残念だったな。俺を残っていることを忘れたのが間違いだぜ！」
「ならばきさまから倒すこととする！」
「好きにしな！　返り討ちだぜ！」
空はそう言うとボルトに切りかかった。
だが、先ほどと同じくそれを抑えられた。
「無駄だ！　これでもくらえ！　サンダード！」
「ちっ」
空は剣を手から離しサンダードをかわした。
だが、剣はボルトが廊下へと放り投げてしまった。
「これで終わりだ！」
「くっ」
空はボルトのサンダードをかわし、廊下へと出て行った。
「剣など取りにいけるかな！　サンダード！」
ボルトは剣を取りに行っている空に対しサンダードを放った。
だが、空はそれをうまくかわしながら剣に近づいていく。
「ならば！」
ボルトはそう言うと攻撃を中止しシルフに焦点を合わせた。
そして、ライトニングスパークの発射準備に取り掛かった。
「まずい！」
空は急いで剣を取り、救護室へと戻った。
「遅い！」
だが、ボルトは一気にライトニングスパークを放った。

「くっ」
シルフはなんとか体を動かし、近くの窓から外へと出て行った。
それによりライトニングスパークをかわした。
「なに！？」
「くらえ！　グラウンドウェーブ！」
その時空はグラウンドウェーブでボルトを攻撃した。
「きさま！」
「よそ見しているんじゃないぜ！」
こうして、空とボルトの戦いが、狭い救護室で始まるのだった。
一体、空の運命はどうなるのか。

第１１話　「力の差」

「サンダード！」
ボルトはサンダードを放ってきた。
空はそれをぎりぎりかわした。
「へん！　そんなわざなんか効くかよ！　くらいやがれ！　グラウンドウェーブ！」
「サンダード！」
空はグラウンドウェーブで攻撃をした。しかし、サンダードによりそれは抑えられてしまった。
「なに！？」
「サンダード！」
「ちっ」
空は放たれたサンダードをかわした。しかし、わずかながらも左肩にかすってしまった。
たいしたかすりではなかったが、それだけで激痛が走った。
だが、空はその痛みに耐えながらボルトに立ち向かっていった。
「これでもくらいやがれ！」
空は横からボルトに切りかかった。それはボルトに当たった。
「それだけか」
「なに！？」
「サンダード！」
空は近距離でサンダードを受けてしまった。
それによって、空は廊下へと吹き飛ばされてしまい、さらには痛みで体が動かなくなった。
「終わったな」
ボルトはそうつぶやくと力を一点に集め始めた。どうやら、ライトニングスパークを放とうとしているようだ。
空は身を守ろうとするものの、体が動かずどうしようもできない。

「くそっ……。俺はここで終わりかよ……」
「さあ止めだ！　ライトニングスパーク！」
巨大なライトニングスパークが放たれた。空はもうダメだとそう思った。
それから数秒たったとき空はゆっくりと視界を開いた。
すると、そこには髪が赤く全身も赤い少年がこちらを向いていた。
「気が付いたな。大丈夫か？」
「お前は……。ああ、大丈夫だ」
空はそう言うと痛みに耐えながらも立ち上がった。
「炎火、一体どうしてこんな所に……」
「話しは後だぜ。まずは奴を倒してからだ」
炎火がそう言うと、看護室からボルトが出てきた。
「邪魔が入ったか。まあいい。お前も倒してやるだけだ」
「そんなことなどさせるか」
そう言うと炎火は剣を取り出した。すると、ボルトは言った。
「きさまその剣を一体どこで……。まあいい。フレアブレード単体だけでオレを倒すとなどできるはずがない！」
「どうかな。行くぞ！」
炎火はそういってボルトに向かっていった。
その間に空は落としてしまった剣を拾ってボルトに攻撃をした。
「フレイムブレイズ！」
「サンダード！」
「グラウンドウェーブ！」
ボルトは炎火にむかってサンダードを放った。それを炎火はかわし、フレイムブレイズという剣を炎のように熱くし敵を焼ききる攻撃をした。
フレイムブレイズを当てた炎火に続き、剣を拾った空はグラウンドウェーブでボルトに攻撃を当てダメージを与えた。
「このガキどもが！　ならばこれでもくらえ！」
ボルトはそう言うとライトニングスパークを放つためにチャージ

をし始めた。
「隙だらけだな。フレイミングブラスター！」
炎火は剣から巨大な火炎玉を作り出しそれを拳銃から玉が出るように剣から発射した。
まるで、いんせきが地球をめがけて飛んで行くように。
そして、それはボルトに当たり、チャージが中止されその場に倒れた。
「くっ……。きさま……よくも！」
「まだ生きているのか。しぶとい奴だ。ならば止めを刺してやろう」
「させるか！」
炎火が攻撃しようとしたその時、ボルトが強力な光を放った。
そして、その光が解けたときにはボルトの姿はなかった。
「ちっ。逃げられたか」
「ふぅ。やった……」
空はそう言うとその場に倒れてしまった。
「おい空！　しっかりしろ！」
それから何時間がたっただろうか。空は真っ暗な真の闇の中にいた。
「ここは……」
「空……」
すると、暗闇の中から一筋の光が現れ、空に話しかけてきた。
「……。もしかして、ジンプウ……？」
「空……。ウィンド遺跡に向かうのです……。そこであなたはさらなる力を得ることでしょう」
「ウィンド遺跡……」
「はい。さあ行くのです。あなたの帰りを待っている者がありますよ」
そう言うとその一筋の光はその場からなくなってしまいまたそこは闇の中とかした。
そして、空は光のある場所へと戻ってきた。ベッドかなにかに乗

せられているため起き上がってみるとそこには、シルフとあかり。炎火がいた。
「あ、気が付いたのね」
あかりがそういった。
「ここは……」
「ここは三人の部屋のベッドだよ」
「私がこの部屋を使っているから空はあまりここを見たことがなかったのよね」
「ああ」
「奴のわざを受けダメージを受けていたというのにそのような感じを出していなかったのでぜんぜんわからなかった」
「何のことだ？」
「私がお前を倒したとき、立ち上がっただろう？　あの時すでに奴の攻撃を受け立ち上がれない状態じゃなかったのか？」
「ああ……そうだったな」
「そのときに立ち上がれないほどのダメージを受けているような雰囲気を出していなかったということだ」
「そうか……。ところでボルトは？」
「ボルトなら自分の街へと戻っていった。どうやら、休養をとるのではないかと思う」
「その間は私たちもゆっくりできるということよ」
「そうか。ところで、シルフは大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃないけどたいしたことはないさ」
「そうか。なあ、シルフ。ウィング遺跡っていうのはどこにあるんだ？」
「ウィング遺跡？　なぜそれを……。もしかして、ジンプウ様が……」
「多分……。でも、夢の中で誰かがそこにいくようにいったのは確かだ」
「そうか。ジンプウ様のお告げとならば目的地に行くようにしなけ

ればいけないな」
　と、ここでシルフは少し間を空けてから話し始めた。
「ウィング遺跡はここから南に二十マイルほど行ったところにある。そこはジャングル地帯となっていて魔物が住み着いている場所だ。そこになぜいかなければいけないという理由は前回の時よりかは明確だ。ウィング遺跡にはウィンドブレードが安置してある。そう、風樹君も知っているあの剣だ」
「ウィングブレードが……。ということは」
「そう。炎火君と同じ伝説の剣の一本の所持者となるということだ。そうなったからには僕もサポートしよう。まあ、まずはゆっくり体を休めてくれたまえ」
　シルフはそう言うと部屋を後にした。
　それから数日がたったとき、空とあかり、炎火も付きウィング遺跡へと向かった。
　伝説の四本の剣の一本であるウィングブレードを手に入れるために。

第12話　「風の剣」

ウィンドシティを後にしてから二日目の朝。
空、あかり、炎火の三人はウィング遺跡があるというジャングル地帯へとやってきた。
ジャングルは予想通り林となっており、じめじめしていた。
「本当にこんな所に遺跡なんてあるのかよ」
「ジンプウ様が言われたのだあるに決まっているだろう」
「ほら、もたもたしないの」
「ちぇっ。わかったよ」
それからジャングル地帯の中を歩き回った三人は、なにやら古びた家を発見した。
レンガ造りの家で壁にはつるがかかっている。
「なあ、少し休んでいかないか？」
そういったのは空だった。
「そうね。私も少し疲れたし……。炎火君はどうする？」
「お前達が休むというなら休むとしよう。遺跡には強力な魔物がいるという話だ。体力がないままいけばひとたまりもないだろうからな」
彼らはその家に入った。
ドアにもつるがかかっていたため、剣でそれを切りドアを開けた。中は、ほこりだらけだったが、つるなどの植物が中に入っているということはなかった。
右手には暖炉があり、左手にはテーブルがある。テーブルの近くにはイスがあったため、空はそれに座った。
「はぁ疲れた……」
「体力のない奴だ。少しは体力をつけたらどうなんだ？」
「俺だって体力には自身はあるぜ。学校の長距離走でトップだったんだからな」

「長距離走でトップでも今の現状ではたいした長距離走じゃなかったということだ」
「なんだと！」
「落ち着いて空！　あまりほこりを立たせないでよ」
「だってあいつが……」
「あいつがじゃない！」
「わ、わかったよ……」
立ち上がっていた空は再度イスに納まった。そして、空は言った。
「しかし、この家は不自然だな」
「確かに不自然だ」
「え？　なにが不自然なの？」
「だって、普通は暖炉の近くにこういうテーブルとかを置くんじゃないか？　あったまるにはそうするぜ」
「それが暖炉の真反対にある。これはどう考えても不自然だ」
「そういわれてみればそうね……。暖炉で料理でも作っていたんじゃないの？　そしたら、テーブルとか邪魔になるし」
「そうだとしても真反対には置かないと思うがな」
炎火はそう言うと、暖炉の周辺をたたいたり、引っ張ってみたりして調べ始めた。
「ちょっとなにしてるの？」
「もしかしたらと思ってな……」
炎火はそういっただけで他には何の返事もしなかった。そして、数分立つと炎火は言った。
「ここだ……」
「なにがだよ？」
「これだ」
炎火はそう言うとその床に剣を差した。
「ちょ、ちょっと炎火君！？」
「これを見ろ」
そういわれそこを見た二人は驚いた。そこには小さい階段ができ

ているではないか！
　階段は奥につながっており、とても暗い。しかも、地下だというのに風が吹き通っている。
「まさかこれが……」
「おそらくこれがウィング遺跡だろう。地下から風が吹いてくるはずなどない。もし吹くとしたら」
「ウィング遺跡しかないということね。そうとわかれば行きましょう」
「おう」
　空を先頭にし、あかり、炎火の順番で中に入っていった。
　中は暗く何も見えなかったが、炎火のフレイムブレードで照らされていたため、少しばかりは見えるようになった。
　そして、階段を降りきるとそこは、石造りの壁でできている廊下の途中で風が石と石の間から吹き抜けている。
「どうやら本当にウィング遺跡だったようだな」
「だな。よし、そうとわかればとっととウィングブレードを手に入れようぜ」
　彼ら三人は遺跡内を歩き始めた。
　遺跡内は、噂どおり魔物が多くおり、その一匹一匹がとても強く、炎火がいなければ負けていそうなほどだった。
　だが、空とあかりも負けてはいなかった。空は未完成ながらもウィンズアースが多少使えるようになっており、グラウンドウェーブの補助として使っていた。あかりはストリームアースをうまく使いながら敵をなぎ倒していった。
　そして、ある一つの大きな部屋へとやってきた。その部屋の奥には、扉があるのだが閉ざされている。
「どうやら、あの扉の奥があやしいな」
「だな」
　そういって歩き出した三人だったが、歩き始めた時に空から何かが落ちてきた。

それは巨大な生物で、真ん中に唯一の巨大な目がある。
「なにあれ……。気持ち悪い……」
あかりがそれから目をそらしながら言った。
「どうやらウィングブレードは本当にあそこにあるようだな」
「ああ。そして、こいつがウィングブレードの守護をしているということか」
「そうとなるならやるしかねえぜ！　行くぞ！　炎火！」
「ああ！」
空と炎火は巨大生物に向かって攻撃をしていった。
「グラウンドウェーブ！」
「フレイムブレイズ！」
二人は攻撃をした。だが、それはあまり聞いていないようだった。
それどころか、攻撃の反動がわずかばかり戻ってきて空たちを攻撃してきた。
「ちっ。でかいだけじゃないってことか。だが、これに耐えられるはずはない……」
炎火はそう言うと剣から巨大な火炎玉が作り出された。
「フレイミングブラスター！」
一気に巨大な火炎玉は巨大生物に向かって飛んでいき攻撃をした。
しかし、フレイミングブラスターを受けた巨大生物は、少しばかりのダメージを受けはしたがまだぴんぴんとしていた。
「なに！？」
すると、巨大生物は巨大な竜巻を作り出し、空たちに攻撃を仕掛けてきた。
「フレイムブレイズ！」
「ウィンズアース！」
巨大竜巻を空と炎火は攻撃した。しかし、それだけでは抑えることができない。
「くっ。ならば！」
炎火がフレイミングブラスターをしようとしたときだった。

後ろから同じような巨大竜巻が現れ、竜巻同士がぶつかり合った。そして、それらの竜巻は打ち消しあい消えてしまった。
「な！」
「私がいることも忘れないでよ」
「あかり！」
「その気持ち悪い生物をとっとと倒すわ！　こんな所にずっと痛くないもの」
「よし！　今度こそ行くぜ！」
空はそう言うと巨大生物に近づいていった。そして、切りかかった。
「くらえ！　ウィンズアース！」
空は切りかかりながらウィンズアースを発射した。まるで、剣にウィンズアースがまとうようになり、フレイムブレイズに近い攻撃となった。
それを見た炎火はフレイムブレイズで攻撃をした。そして、あかりもストリームアースで攻撃をした。
巨大生物は空と炎火をなぎ倒そうと手のようなものを使っているが、標的が小さすぎて当たらない。
「炎火！　やっちまいな！」
「わかった。くらえ！　フレイミングブラスター！」
炎火は超至近距離からフレイミングブラスターを放った。それは下からどんどんと上に上がっていき、ついには目にも当たった。
すると、巨大生物は悲鳴をあげ、苦しみ始めた。
「目が弱点か！」
「よし！　あかり！　奴の目を攻撃しろ！」
「ええ！　ウィンドストリーム！」
あかりのウィンドストリームは巨大生物の目に当たった。それにより巨大生物はさらに苦しみ始め。結果、その場に倒れたと思うとその姿を消した。
「消えた……？」

それを見た空とあかりは不思議に思った。
「倒せたようだな。消えるのは当たり前だ。倒れた魔物は姿が消えるのだ。そんなことより奥に行くぞ」
「あ、ああ」
三人は奥の扉に攻撃をし、ふさがっていたものを壊した。
すると、奥の小さな台座に緑色に輝く剣が安置されていた。
「これがウィンドブレード……」
空はそれを手にした。すると、ウィンドブレードは一瞬光りだして、元の輝きに戻った。
「どうやら、お前を持ち主として認めたようだ」
炎火が言った。
「どういうことだ炎火？」
「持ち主を選んだ剣は一回光るんだ。俺のもそうだった」
「そうなのか。よし、頼んだぜウィングブレード！」
空はウィングブレードを掲げた。
こうして、空はウィングブレードを手に入れたのだった。

第１３話　「青い所持者」

ウィングブレードを手に入れた空たち。
彼らはウィングシティのシルフの城へと戻ってきていた。
「よく帰ってきたね。剣は手に入れられたのかい？」
シルフはすっかり体が治り、いつもと同じ様子だった。
シルフを見た空たちは風の民の治療法はすごいことを改めて知った。
「ああ、この通りさ」
空は鞘から緑色に光る剣を取り出した。
「おお！　よくとってこれたね。それこそ風の民に伝わる伝説の剣、ウィングブレードだよ」
「結構苦労したぜ。変な生物が守ってたからな」
「そいつこそ魔物さ。結構強かっただろう。
さて、ウィングブレードをついに手に入れた。これでボルトがきてもほぼ大丈夫になったわけだけど、このまま待ち構えているのはさすがにまずい」
「どういうことですか？」
あかりが言った。
「ボルトの襲撃が多すぎた。僕たちで戦えるものがほとんどいなくなってしまったんだ。風樹くん、武内さん、アース、僕ぐらいがまともに戦える状態かな」
「私も戦えます」
「ありがとう、炎火君。炎の民の君が僕たちを助けてくれるなんてありがたいよ」
「これもエンジン様のお告げ。ならば私はそれに服従するまでです」
「ところで一体これからどうするんだ？」
「ああ、ごめんごめん。少し話しがずれちゃったね。ボルトたち雷の民が攻め込んでくるならば今度は僕たちが攻め込もうと思ってる

んだ。風樹くんはウィングブレードを手に入れたし、炎火君もいる。攻め込んでも大丈夫だと思う」
「でもそれは危険じゃないんですか？」
「危険さ。でも、このままじゃ僕たちが滅びてしまうだけだ。大丈夫。ウィングブレードとフレアブレードがあるんだ」
「わかった。じゃあ、雷の民がいる場所を教えてくれ」
「待て、空」
「な、なんだよ？　炎火？」
「雷の民の場所は私が知っている。案内しよう。シルフ様、今しばらくお時間をいただけませんか？」
「どういうことだい？」
「今、我ら炎の民の神であるイフリート様は、ボルトを倒すためにアクアブレードの持ち主を探しておられます」
「アクアブレードの？」
「はい。私と空で伝説の四本の剣は二本。ボルトの莫大な力にこれだけで通用するかはわかりません。ならば、三本目の持ち主を探し出し、ウィンド、フレア、アクアの剣を持つものを集めたほうがいいのではないかと考えます」
「ふむ、それは一理あるな。だけど、ボルトがその間にここに攻め込んで来たらどうするんだい？」
「そのときの想定も考えております」
「どんな考えだい？」
「それはお答えしかねます」
「なぜだい？」
「イフリート様より口止めをさせられております」
「ふむ、イフリートの奴の考えか。ならよかろう。五日だ。五日間だけまとう」
「ありがとうございます。それでは、私は失礼いたします」
炎火はそう言うと、部屋から出て行ってしまった。それを見届けたシルフは言った。

「五日間だ。五日間だけ二人ともここにとどまってくれないか？」
「わかりました。水の剣を操りし者が現れるといいですね」
「まったくだ。だが、ウィングブレードと同様、アクアブレードを持つものが今現在いるかもわからない。一体どうなることやら」
「いなかったらどうなるんですか？」
「それまでだろうね。五日間は無駄な時間になるということだよ」
「ところで、雷の剣はどうなってるんですか？」
「エレキブレードはすでに所持者がいるだろうね。伝説の剣なしで攻め込むということはないだろうから。もし、ボルトが負けたとしてもエレキブレードの所持者が助けに来るだろうし」

それから五日後。
その間の期間で空たちはアースに習って、新しいわざの練習や習得済みのわざの強化に励んだ。
空はいつの間にかにウィンズアースが使えるようになっており自分自身もアースも驚いていた。
その間に炎火は二人の前には姿を現さなかった。だが、五日目の出発の日には炎火は二人の前に現れたのだった。
「どこいってたんだよ？」
「イフリート様のところに戻っていた。アクアブレードの持ち主を探し出すためにな。まあ、それは無駄に終わってしまったが」
「どういうことだ？」
「アクアブレードの持ち主はいないそうだ。アクアブレード自体はちゃんと存在はするがな」
「じゃあ、この五日間は無駄だったということだ」
「そういうことになるな。仕方ない。我々だけでいくことにしよう。それでは」
炎火はそう言うとシルフに向き直った。
「私たちはこれから雷の民及びボルトが住む、ライトサンシティへといってまいります」

「うん。気をつけてね。僕も行きたいところだが、このときに城に攻め込まれたときのためにここに残らなければいけない。君たちをサポートできないのは残念だ」
「いえ。ご心配には及びません。それでは行ってまいります」
炎火がそういい、空とあかりを含めた三人はボルトがいるライトサンシティへと向かうことになった。
この攻め込みが吉と出るか凶と出るか……それは誰もわからないのだ。
ボルトがウィンドシティの城に攻め込まないことを祈るのだった。

第１４話　「伝説」

ボルトが住むライトサンシティを目指しウィンドシティから旅立った空たち。
ライトサンシティは西の方角にあった。炎火の話しによると、方角には関係があるということをライトサンシティに向かっている途中に聞いた。
かつて四神と呼ばれた、東の青龍。西の白虎。南の朱雀。北の玄武をモデルにしているのだという。
まず、東の青龍。青龍のイメージカラーは青であるため、水の民達は東に領土を持つ。次に南の朱雀。朱雀のイメージカラーは赤であるため、炎の民達は南に領土を持っている。
同じ原理で風の民は、緑がイメージカラーであるため、北に領土を持っている。そして、西の白虎が、雷の民をイメージしているのだという。
ここで、あかりは疑問を持った。なぜ、白虎が黄色のイメージなのかということを。虎のイメージには黄色より白の方が似合っている。
だが、ここで雷の民は悲しいことにあまった白虎の方角――つまり、西に領土を構えることになったのだという。つまり、あまりものだ。
こうして、現在の東のウンディーネ。西のボルト。南のイフリート。北のシルフという形を作り出した。
「ふーん。結構意味深だよな」
それを聞いた空は言った。
「そうだな。なぜ四神による方位で領土を決めたのかも不明だしな。だが、実際にこういう形で今の領土を決定しているんだ。それをボルトの奴が占領していっている」
「でも何でボルトは領土を増やそうとしているの？」

「おそらく、四方の領土を確保して中心部にあるゴッドリメインにいこうとしているのだろう」
「ゴッドリメイン？」
「ああ。別名神の遺跡。四神の長である黄龍の領土だ。まあそれは四神での話しであるから、今現在、黄龍の役割を果たしている者がいるかどうかはわからん。あったとしても私は知らない」
「でも、何で領土を確保する必要があるんだ？」
「これも仮定だが、四つの領土の長である黄龍だ。これら四つの領土を手にすることによって中央の領土に新たな神が生まれるのかもしれない」
「その仮定だとしたら、第五の神が存在するっていうことになるわね」
「そうだな。まあ、あくまで仮定であるから実際にどうだかはわからない。でも、ボルトがゴッドリメインを狙っているのは確かだ」

その話しを聞いてから数日が立った時に彼らはライトサンシティへとやってきた。
ライトサンシティの上空は黒雲に包まれていた。黒雲以外のものは受け入れられないほどである。
そして、黒雲は時々光出す。その状態にライトサンシティはおかれていた。
「あれがボルトの住む城だ」
炎火の指差した先には城があった。それはライトサンシティよりさらに奥にあった。
城の上空には大量の黒雲があり、回りにも黒雲で取り囲まれている。そして、かみなりを放ち続けている。
「黒雲でよく見えないわね」
「ああ。以前はそれほどでもなかったんだが、今はすっかり変わり果てたな。――そんなことはどうでもいい。さあ、行くぞ」
炎火が向かった先。それはライトサンシティの外。つまり、ライ

トサンシティの中には入らず周りを歩き始めたのだ。すると、簡単に城の近くまで近づくことができた。
だが、城は堀で囲まれているため、簡単に向かうことなどできなかった。さらに、入り口の門のところには門番がいるようだ。空たちがいる場所は門番たちから見えない場所にいるため、まったく気づいていない。
「で、ここから一体どうやっていくっていうんだ？」
「そうあせるな。ええっと、目印はどこにあるんだ……」
炎火はあたりを見回した。すると、何かを発見したかのように近くの大きな岩のところに近づいた。すると、岩についているシールをはがした。
「これだ」
「どうしたんだ？」
「目印をつけたのさ。城に入るための地下通路を他の炎の民たちで作り出したんだ。その目印にシールをつけていた。まあ、炎の民にしか見えないという特殊加工をしているからお前達には見えんがな。さあ、行こう」
そう言うと、岩のてっぺんを下に引くようにすると、そこに通路が現れた。
地下通路内は即席で作ったのか、とても雑な出来で穴をほったような道だった。じめじめしているのは無論だった。
途中、分かれ道が出てきたがその道は炎の民達が気づかれないように通路を掘るために使っていた道だということを炎火は二人に教えた。
「ところでこれからの作戦だが」
と、炎火は話しを切り出した。
「この道を抜けると、そこはもう城の中だ。地下の武器庫だから人はいないだろう。だが、まだ城への通路はつながっていない。つなげたらばれてしまうからな」
「じゃあ、最後のその道は私たちで開く必要があるの？」

「そうだ。それもこっそり壊さないといけない。あまりに大きな音を立ててしまえば雷の民に見つかってしまうからな」
「じゃあ、どうやって壊す？」
「それが難しいのだが、音を出して壊す以外の方法はないのだ。だが、少しばかり考えがある。私たちが壁を壊したらあかりのトリックでバリアーを張ってほしいのだ」
「どうして？　それにどうして私がバリアを使えることを……」
「知っているかもしれないが、音は光より遅い。バリアというトリックは光を使う。だから、音が奥に届く前にバリアーを張れば音を伝えずに済むと思うのだ。バリアについて知っていることは、アース殿に聞いた」
「教官の奴、何を教えてやがるんだ」
「ほとんど聞いた。空がストリームアースを完全にコントロールをできるようになったこともな。お、あれが最後の壁だ」
　炎火がそういって指差した先にあったもの。それは行き止まりだと思わせたが、最後の壁であることを彼らは知った。
「よし、じゃあ、さっき言ったとおりに頼む。空は準備だ」
「おう！」
　炎火と空は壁より少し後ろに下がった。そして、あかりは二人より前に立った。
「一、二、三のタイミングだいいな？」
「おう！」
「ええ！」
「よしじゃあ行くぞ！　一、二、三！」
「行け！　グランドウェーブ！」
「フレイムブレイズ！」
　二人は遠距離攻撃で攻撃した。それに少しばかり遅れてあかりのバリアが放たれた。
　グラウンドウェーブとフレイムブレイズは予定通り壁を壊した。そして、その時あかりのバリアが張られた！

「むっ」
炎火はそれを見て少しこわばった顔になった。それに気づいたあかりは言った。
「もしかして少し遅れちゃった……？」
「ああ、少しばかり遅れたな。まあ、大丈夫だろう。大丈夫じゃなくても済んだことだ。気にしていても仕方がない」
「さあ、じゃあ早く中に行こうぜ」
空がそう促し三人は雷の民の武器庫に侵入することに成功した。
炎火はそこからのルートについてはよくわからないということなので、慎重に進むしかないと二人に告げた。
その炎火の言葉が終わったとき、空はあるものを見た。それを見た空は二人にこれがなにかということを告げた。
「これはなんだ？　トリックを使う時に用いる杖のようだが……。しかも、水の民用のようだな。一体どうしてこんなものがここに……」
「あかり。これはもしかしたら……」
「ええ」
あかりは杖を取り出しそれを炎火に見せた。
「む？　形状が同じだな。ということは、この杖は風の民が作り出した水の民用の杖ということか？」
「おそらくな」
「だが、そんなことを風の民がする必要があるのか？」
「それがおおありなのよ」
「こないだ言ったと思う。俺たちの仲間が人質に取られたということをな」
「ああ、確か灰戸とかいう名前だっといっていたな。魔法使いだったはずだ」
「そうだ。ここは雷の民の城。あいつもここにいるはずだ。そして、これは炎火には言わなかったことだけど、あいつは俺たちと一緒にいたけど水の民なんだ」

「なんだと？　では、これは……」
「おそらく……灰戸のもの……」
灰戸の杖。彼らはこの杖をみて灰戸の安否がいっそう不安になったのだった……。

第１５話　「再会」

「灰戸はここにいるんだ。助けに行こう」
「ええ、もちろん。炎火もそれでいいわよね？」
「私はどちらかといえば反対だ。だが、仲間となれば助けるほかなかろう」
炎火はそう言うと、武器庫の唯一のドアに耳を近づけた。
「誰もいないようだ。行くぞ」
炎火はゆっくりとドアを開けると、外を確認した。その廊下は静寂に包まれており、誰もいる様子はない。
三人はゆっくりと武器庫を出て、通路を歩いていった。通路は使われていないのかそれほど明るくはなっていなかった。
奥へ奥へと進むと、だんだんあかりが着いてくる。三人は慎重に慎重に進んで行った。
「むっ。こっちだ」
炎火が突然言った。炎火の後ろをついて歩いていた二人は炎火の行ったほうに歩いた。すると、奥からこちらに向かって誰かがあるいてきたではないか！　どうやら、雷の民のようで武器庫に向かっているようだ。
その雷の民が三人の前を通り過ぎると炎火が小声で言った。
「まずいな。武器庫から侵入したことがばれてしまう。急ごう」
炎火はそう言うと、あたりを見回し手で合図をしてまたさらに進んでいった。
「なぁ、炎火。お前はいったいどこに向かってるんだ？」
「牢屋だ。灰戸を助けるんだろう？」
「そうだけど、一体どうして道がわかるんだ？」
「これだ」
炎火はそう言うと地図のような紙を空に渡した。それにはこの城の見取り図だった。

「炎の民はここまでやってるんだ。お前らみたいにのんびりはしていない」
「なんだと」
「ちょっと、空。静かにしなさい」
「なんだよあかりまで」
「今は争っている時ではないわ」
と、あかりがそういったときだった。突然、警報音がない響きあたりは赤色に染め上がった。そして、「侵入者あり侵入者あり」と声が鳴り響く。
「な、なんだ！？」
「まずい、ばれたようだ。急ぐぞ！　こっちだ！」
炎火はそう言うと走り出した。二人もそれに負けじとついていく。
まるで迷路のような城。そこを炎火は迷いもせず駆け抜けていく。警報音は無常にもまだ鳴り響いている。三人には耳障りな音だった。
そして、炎火は一つのドアの前で止まると、そのドアを剣で破壊した。中に入るとそこにはさらに階段ができていた。
「いそげ、この下が牢屋だ」
炎火がそう促し階段を下りていった。
そこは最初に武器庫を出た場所のように静寂に包まれていた。だが、あたりは小さなろうそくの火だけが頼りで壁も土が直接出ていた。
階段を完全に下りると、そこは牢屋が並んでいた。牢屋の中には今にも餓えそうな人物がおり、その者の民は水の民、炎の民、雷の民、風の民……全民族のものがとらわれていた。
それらの人物に空とあかりは同情し助けてあげようとしたが、炎火がそれを止めた。
「今それをすれば私たちがつかまるだけだ。まずは灰戸を助けるぞ」
二人は炎火のその言葉に従った。まずは本来の目的を達するべきだと思ったのだ。そして、ボルトを倒したら彼らを助けようと……。
三人は牢屋の一個一個を見ながら奥へと進んでいった。そして、

最後の牢屋の中をのぞくとそこには空とあかりが見たことのある少年がいた。
その少年は他の民と同じで半ば餓え倒れそうだった。
「灰戸！」
その姿を見た空は言った。
「灰戸！　大丈夫か？」
返事がない――いや、返事はあった。だが、それはとても小さな声で空には聞こえないのだ。
だが、そんなことに気づくこともできない空は剣を取り出し鍵を壊し、牢屋の中に入った。
「灰戸！　灰戸！」
空は体を揺さぶる。すると、声が聞こえてきた。
「……くう……空くん……」
「あかり、回復してやってくれ」
「わかったわ」
あかりはそう言うと回復トリック”リペア”で灰戸の体力を回復させた。
だが、餓えだけはそれで回復できないので空が持っていたパンを灰戸に渡した。
「これで後はボルトだけだな」
炎火が言った。
「ああ、だけど、このまま灰戸を置いていくわけにはいかない。灰戸が回復するまで待ってくれないか？」
「ダメだ。このままではボルトの体力が完全に回復してしまう。そうなっては私たちに与えられたチャンスを失ってしまうことになる」
「でも、このまま灰戸を置いていくわけには」
「空くん……僕は大丈夫だから先に行って」
灰戸が言った。先ほどとは違い大分状態が良くなったようだ。
「でも……」
「いいんだ……僕なら大丈夫だし。それに……」

と、灰戸はここで声を詰まらせた。
「まだ、あのことを気にしているのか？」
「……」
「あれは俺が悪かったよ。だからに気にするな」
「それでも、僕が行っても足手まといだよ……先に行って」
「空。ここは灰戸の言うとおりにしましょう」
「でも、それじゃあ……」
「大丈夫だよ。僕なら……絶対に後で合流するから」
「灰戸……わかった」
「よし、じゃあ行くぞ」
「その前にあかりあれを」
空がそう言うとあかりは一本の杖を取り出した。それは、武器庫で見つけた水の民用の杖だ。
「これはお前のだろ？　渡しとくよ」
「ありがとう」
灰戸はそれをまだ弱々しい手で受け取った。
「よしじゃあ行ってくるよ」
「うん、がんばってね」
空たちは灰戸をその場においていき、元の道へと戻った。
そして、ボルトの部屋を目指して廊下に出るのだった。

第１６話　「三」

警報機の音が今だ鳴り響いていた。あたりも赤く染まっている中、空たちはボルトの部屋へと向かっていた。
案内は引き続き炎火が行い、雷の民の姿を時々認めたが、空のグラウンドウェーブなどの攻撃でそれらを倒していった。
「まだかよ炎火？」
息を切らしている空。体力には自身があるほうだったが、この広い城を。しかも、階段があったりして、長い時間を走っていたからさすがに疲れてしまっていた。
空だけではない。あかりもだ。だが、例外は戦闘を走っている炎火だった。彼は全然息を切らしておらずまだまだ余裕を見せていた。
「もう少しだ。がんばれ、二人とも」
空とあかりは休むということが考えられなかった。警報音が鳴り響いていれば休んでいる暇などないからだ。でも、内心は休みたいと願っていた。

それから走り続けると一つの大きな扉が彼らの前に現れた。厳重になっており、鍵までかかっている。
「この部屋がボルトのいる場所だ。この鍵を壊し内部に侵入するぞ」
「わかった。でも、ちょっと休ませてくれ……」
「あかり、今回復魔法は使えるか？」
「ええ、使えるわ」
「だったら、空を回復してやってくれ。それと自分の体力も回復するんだ」
あかりは言われたとおりに自分の魔法で、自分自身と空を回復させた。これで、二人の体力はほぼ元通りになった。
「よし。空、やるぞ」
「わかった」

そう言うと二人は剣を抜き出した。
そして、炎火はフレイムブレイズで。空はフレアブレイズの風バージョンのウィンドブレイズで鍵を破壊した。
鍵が破壊されたら後は扉を押し、部屋の中を見ることができた。
部屋はとても広くまさに王室を思わせる部屋であった。その王室の奥にあるベッド。そのベッドの上にボルトは横たわっていた。
「来たか……このオレを殺しに」
ボルトは言った。
「お前がいなくならなければこの世界の平和は乱れるんだよ。まあ、もう乱れているがな」
「風の民の街は絶対にお前なんかには渡さない！」
「ふん、お前らごときに倒されるオレではない」
ボルトはそう言うとベッドから起き上がり三人の前にその完全な姿を現した。
「お前を倒すのは私たちの役目。行くぞ！」
炎火はそう言うと一気にボルトに接近した。そして、フレイムブレイズで攻撃を図った。
だが、それはボルトがジャンプしたことによりかわされてしまった。だが、そのボルトに空のウィンズアースが向かっていく！
「サンダー！」
だが、ウィンドブレイズはボルトが空たちに始めて見せたわざ”サンダー”でその勢いを失わされた。
サンダーはサンダードと同じわざなのだが、唯一違ったのがパワーだった。サンダードの二倍――いや、三倍、四倍の威力があるわざだった。
「フレイミングブラスター！」
サンダーでウィンズアースを破壊したボルトであったが、下にいる炎火のフレイミングブラスターの奇襲を受けてしまった。フレイミングブラスターの炎があたりのものに点火した。
「お、おい！？　火事が起こっちまったぞ！？」

「かまわん！　フレイムブレイズ！」
炎火はフレイミングブラスターを受け、身が半ば燃えているボルトに追い討ちのフレイムブレイズで攻撃した。ボルトはそれをかわすことができず、追加ダメージを負った。
「くっ……」
「なさけないなボルト！　私の最強わざを受けよ！　バーニングブレスト！」
炎火の剣がフレイミングブラスターを発動する時より燃え上がる！　巨大な炎を作り出し発射されたその炎を身にまとってしまったボルトは恐怖にとらわれたような大声を出した。

「戦いは終わった」
あたりの火がどんどんと燃え始めている中、炎火はそうつぶやいた。
「あのボルトが簡単にやられてしまうなんて……」
「ああ、炎火の奴。一体どうしちまったんだ――それより、炎火！　早くこっちに来い！　脱出するぞ！　牢屋にいる奴らも助けなきゃいけないしな！」
炎火はゆっくりと二人のところへと戻ってきた。するとこういいだした。
「ボルトは消えた。これでこの世界は終わりだ」
「なにいってるんだ？」
「東西南北に存在する神はそれぞれのバランスを保っていた。だが、そのバランスはボルトによってくずされた」
「おい！　炎火！」
空は強く炎火に言葉をかける。だが、炎火はそれを無視し続け言葉を続けた。
「そのボルトも今崩れた。とらわれていた二つの領土はそれぞれ返還された。だが、一つの地に神がいなくなった」
「炎火！」

空は炎火をひっぱたいた。倒れた炎火だったが、それでも言葉を続ける。
「今度は神のバランスが崩れた。残された領土をめぐり神は争うだろう……。ねぇ、ウンディーネ様？」
「よくわかったな、わらわがここにいることを」
炎火が言葉を終わらせるとそのような声が聞こえた。すると、あたりの炎は一気に鎮火し始めたと思うと、三人の前に水にまとった美しい女性が姿を現した。
「このボルトの領土はわらわがいただくことにいたす。そちたちはそれぞれの主君にそう伝えよ」
「そんなことなどさせんぞ！」
怒号な声が聞こえるかと思うと今度は炎に身をまとったこわもての男性が姿を表した。
「い、イフリート様」
「ご苦労だったな、炎火。お前は下がってよい」
「はっ」
炎火はそう言うと三歩後ろに下がった。そこは空とあかりがいる場所だったので、三人は並んだ。
「イフリート。そちは私が先に来たというのにこの領土を奪うと申すのか？」
「そうだ！　この領土は炎火が手にしたもの。ならばおれ様たちの領土だ！」
「こしゃくな。ならばここでどちらのものかを決めようではないか」
「いいだろう。この領土はおれ様たち炎の民のものであることを証明してくれる」
二人がこの領土の占有権を手に入れるため争おうとしたそのときだった。
「この領土は変わらず私たちのものです」
「誰だ！」
イフリートが叫ぶとイフリートとウンディーネの間に一人の少年

が入り込んできた。その手には雷がまとっている剣を持っている。
「私はこの雷の民の相続者、サレッド。ボルト様がお亡くなりになったからには私がこの領土を管理します」
「そちがか？　笑わせる出ない。そちは神ではない。この領土の管理をさせる権利などありはせぬ」
「そうですか。ならば、私にその権利が出るようあなた方には消えていただきましょう」
　サレッドと名乗る男は剣に強力な電気エネルギーをため始めた。ものの数秒でそれは巨大化しあたりを吹き飛ばすことができそうなほどのエネルギーをためてしまった。
「まずい！　イフリート様！　お逃げください！」
　炎火はイフリートの元へと向かった。
「あかり！　バリアを！」
「ええ！　バリア！！」
「これでもくらいなさい。マスターサンブラスターズ！」
　強力な電気エネルギーは放たれた。
　マスターサンブラスターズが放たれた後のその部屋はおそろしい光景だった。
　イフリートとウンディーネ。炎火はその場に倒れこみ、バリアを張ったあかりと空でさえもその強力なパワーにバリアが破壊されその場に倒れこんでいた。
　その部屋で立っている者はただ一人。
「この領土は私がいただきます。そして、炎の民と水の民の領土もちゃんといただきます。そして、あのおろかなボルトが手に入れそこなった風の民の領土もね」
　サレッドは勝利に満ちて高々な笑いを上げるのだった。

第17話　「脱出」

空が目を覚ました時のあたりは最後の記憶があった場所と違っていた。薄暗く、光という光はろうそくの灯りしかない。少しばかりろうのにおいがする。壁は暗くてはっきりしないが茶色の土壁だ。出入り口と思われる場所には鍵がかかっており、部屋全体を柵でしきっていた。

牢屋だった。それも灰戸がいたのとは違う場所。空は閉じ込められてしまったのだ。出せ！　と大声で言っても廊下には誰もいないのか反応がない。いや、正確には反応があったがそれは牢屋に入っている囚人達の反応だった。

空はここから脱出するための作戦を考え始めた。こういうときはパニックに陥り考えることなどできないのだが、空の頭だと考えることができた。

空が持っているものは何もない。衣服を身につけ安いスニーカーをはいているだけだ。ウィンドブレードがあっても硬そうな柵を破壊することはできないかもしれないのに、武器がないこの状況ではさらに無理だ。

うんうんと悩んでいると、遠くからこつこつこつと音が聞こえてきた。誰かが歩いている。音は次第に大きくなってきている。こちらに向かっているのだ。

「気分はどうだ？」

空の獄の前で一人の男の声がそういったときに、足音は聞こえなくなった。

空はその男の顔に見覚えがあった。忘れるわけがない。何時間も――いや何日も前だろうか？　イフリートとウンディーネが争っている時、間に入ってきたあの男だ。名前は確かサレッドといった。

「なんのようだ？」

空は力強く脅すような口調で言った。
「そんな恐い声を出すな。せっかくここから出してやろうと来てやったのだ」
「なんだって！？」
「あせるな。条件がある。お前、ウィンドブレードの使い手だな？」
「そうだ」
「ならば話は早い。私たちの仲間とならないか？　伝説の剣を使えるお前と私。それにあの炎火とか言うフレアブレードの使い手もいればこの世は私たちの手に収まる。私たちはこの世界の王となれるのだ」
「この世を自分達の手におさめるだって？　ふざけるな！　俺はそんなことをするつもりはない！」
「残念だ。ならばお前はここでのたれ死ぬのだな」
また足音が聞こえる。サレッドは空の牢屋から離れていこうとした。空はそれを声でとめた。
「おい！　あかりは……あかりは無事なのか？」
「お前が気にする必要もない。だが、教えてやろう。そんなことを知っただけで何の意味もないだろうからな。――彼女は生きている。お前と同じく牢屋に閉じ込めてあるがな」
サレッドはそう言うと足音を遠くさせていった。
それから空は脱出する方法を再度考え始めた。この牢に欠陥などがなさそうだ。脱出するのは難しいだろう。
その時、さっと空の頬を風がなでた。風通しが悪そうな――そもそも風が通らなさそうな場所に風が吹く時点で不思議だった。
『風樹くん』
「え？」
風が頬をなでてから数秒立つと声が聞こえた。左右のどちらから聞こえたのかはわからない。だが、どこかで聞いたことのある声だ。
『風樹くん。僕だよ』
「し、シルフ？」

『そうやっと気づいてくれたか』
「一体どこから？」
『さっき風が通らなかったかい？』
「通ったけど……」
『それは僕が送ったメッセンジャーウィンドだ。風に乗せてメッセージを送るトリックさ。それより大変なことになった。雷の民が動き出したんだ。ウィンドシティに向かってきている。どうか、早く戻ってきてくれ』
「それが無理なんだ」
『なぜ？』
「俺は今牢屋に閉じ込められてるんだ。あかりもそうらしい」
『どういうことだい？　まさか、ボルトに倒されたのか？』
「ボルトは炎火が倒したんだけど、その後に雷をまとっている剣を持った男が現れて、俺らは倒されたらしい。気がついたらここに入ってたし」
『まさか……。ボルトの次はその男か』
「ああ。それと、その男が領土を管理するとか言っていたから、奴が指揮をしてるんじゃないかと思う」
『わかった。じゃあ、こっちはこっちで何とか対応するよ。それより、風樹くんは牢屋を出るあてはあるかい？』
「今のところ無理みたいです。さっきから考えてるんだけど」
『よし、じゃあ少し待っていてくれよ』
と、そこでいくら話しかけてもシルフの声が聞こえなくなった。一分ぐらいたっただろうか？　通信が途絶えたことを受け止めた空に風がまた通った。
すると、シルフがその場に突然現れた。
「し、シルフ！？」
「お待たせ、風樹くん。さあ、手を出して」
空が右手を出すとシルフは手を取った。すると、いつの間にか空とシルフは牢屋の外に出ていた。

「な、なにが！？」
「なあに、メッセンジャーウィンドに僕らが添付されただけの話しさ。それより、これで牢屋を出てこれた。ここから風樹くん一人で行ってくれ。武内さんと炎火くんを助けてやってくれ。僕はウィンドシティに戻らなければいけない」
「わかった。必ず二人は助けてやるぜ。シルフも気をつけて」
「うん。それじゃあ僕は行くね」
シルフがその場からいなくなると、空は辺りを見回した。牢屋は全部で四つしかない狭い獄なのだが、牢屋の中に入っているのは空だけだった。
牢屋から出て左には階段があり、上へとつながっているようだ。どうやら、出口らしい。階段の右には一本の剣が刺さっていた。空はそれを引っこ抜いた。少々古いかたで黒い塊のようなしみがついているがまだ使えそうだった。
それを片手に空は階段を昇っていった。昇りきるとドアが前に現れたのでゆっくり開いて隙間から外の様子を見た。
誰もいない廊下だ。どうやら、三人で通ったときのような一般の廊下らしい。獄からはこれでぬけられたのだ。
空はゆっくりと廊下に出ると、隠れながら進んでいった。今いる場所がどこかはわからないから、闇雲に歩くだけだが、それでもあかりが閉じ込められている牢屋を探していった。
果てしなく続いているこの廊下。本当にここは建物の中なのだろうかと思うほどだった。歩いても歩いてもまだ廊下は続いている。
さらに、かたっぱんしからドアを開けていくのも大変だった。ドアを開けるという作業も神経をすり減らしながらやらねばならないため、とても大変なのだ。
驚いたことに、何十もの部屋を開けたにもかかわらず、誰にも会わずに空は獄へとつながるドアを一箇所発見した。
一歩一歩、できる限り音をたてずに階段を降りていった。降りた先にも廊下に人はいなかった。だが、八つある牢獄の中に人は一人

ずつ入っていた。
その中に、あかりが入っている牢屋があった。あかりは落ち着きを払っているようだが、内心は早くここから出してとあせっていた。
空は剣で鍵を壊し、あかりを牢屋から出させた。
「ありがとう、空。それより、炎火はどうしたの？」
「まだどこにいるかわからない。他の牢屋に閉じ込められているんだと思う。例えば、灰戸がいた牢屋とかな」
「灰戸がいた牢屋？　獄は複数あるの？」
「みたいだ。俺も別の牢屋に閉じ込められてたしな。さあ、早く探しに行こう。今、ウィンドシティも大変な状況におかれているしな」
あかりはその言葉に興味を示したので、空はシルフから聞いたことを伝えてやった。すると、あかりは驚きながら言った。
「じゃあ、早くウィンドシティに戻らなくちゃ。早く、炎火と灰戸を探しに行きましょう」
二人は空があかりが閉じ込められていた獄に来るまでのように、行動をした。そして、また、獄の入り口を発見することができた。
中に入り込むと、そこは灰戸が閉じ込められていた獄だった。だが、そこには炎火どころか灰戸もいなくなっていた。
「どういうこと……。灰戸もつかまっちゃったのかな……」
空は閉じ込められている水の民の囚人に話しかけた。他の囚人と比べ比較的落ち着いている囚人だ。
「なあ、灰戸――あそこにいた水の民の囚人はどこにつれていかれたかわかるか？」
「奴なら雷みたいな剣を持っていた奴に連れて行かれた。炎のように真っ赤な剣を持った男と一緒にな」
真っ赤な剣を持った男。この言葉を聞いた空とあかりは真っ先に彼を――炎火を思い出した。炎火がサレッドと？　一体、どういうことなのだろうか。あいつがサレッドと手を組んだとでも言うのか？　あの誇り高い炎の民が、一回だけ雷の民に負けただけで。
「そいつらがどこにいったかはわかるか？」

空は驚きを隠しながら訊いた。
「知らない。――そういや、ウィンドがどうのこうのとか言ってたな。『ウィンド……に行く……お前……』みたいな感じだった」
ウィンド！　空とあかりには馴染み深いこの言葉。シルフが言っていたし、こっちの世界に来た時にウィンディンも言っていた。ウィンドシティだ！　ウィンドシティがあぶない！
空とあかりは獄を一気に抜け出した。そして、廊下に出ても先ほどのように慎重にいくのではなくどたばたと走っていくのだった。出口を探し、ウィンドシティに戻るために。

第１８話　「伝説の剣終結」

二人の前に雷の民はほとんど現れなかった。現れたのはほんの数人だけで、二人の前にはなんの役にも立たなかった。
雷の城をすんなり脱出した二人は急いでウィンドシティへと向かった。だが、そうすぐにウィンドシティに到着するはずはなかった。来た道のりを戻るのだから、来た時と同じように数日はかかるのだ。
二人は時々、小休憩で体力をできる限り回復してはまたウィンドシティへと向かってを繰り返していた。それ故、ウィンドシティに到着した時の二人の体力といえばほとんどなかったほどだ。
「なにこれ……」
二人の目の前に現れたウィンドシティは二人の知っているウィンドシティではなかった。美しい街並みは跡形もなくなっており、小さい煙が遠くからたっている。城は変わらず建っていた。
二人は急いで城へと向かった。城が無事ならばシルフも無事かもしれない――そう考えたのだが、城は見た目こそ無事だったものの城門では雷の民が見張りをしている。
しかたなく、空たちは近くにある木によじ登り、これからどうするかを決めることにした。
「どうする？　雷の民たちはもうここをのっとりやがった。シルフの安否も微妙そうだ」
「どうするもこうするも、城に侵入するしかないでしょ。このままシルフたちの安否を知らなかったら、この世界にやってきた意味がないじゃない」
この世界にやってきた意味――雷の神。すなわちボルトの進軍からウィンドシティを。風の民を守ること。
「だけど、城の中にはどうやって侵入するのさ？　俺たちは裏口があるかないかも知らないんだぜ？」
「裏口なら知ってるわ。ほら、出発する前に五日の猶予があったじ

ゃない。あの時、トリックを教官から教えてもらっていた時、見つけたの。こっちよ」
空とあかりは近くにある草陰に隠れては進み――という手法で、城の裏へと回っていった。
城の後ろはまったくといっていいほど無防備だった。誰も監視していない。二人は城壁に近づくと、あかりがなにやら壁を細かく見ていく。
あかりが何かを発見したかと思うと、何かに手をかけ手前に引いた。すると、そこに入り口が現れた。
「ここよ。一見何もないところなんだけど、よくみるとあるのよ。驚きよね」
二人は中に簡単に城の中に入ることができた。城の中の地理についてはおのずと詳しくなっていたから、庭からならば簡単に侵入することができるのだ。
城の中は静まりかえっていた。どの部屋にも人がいるような気配がない。行く当てがない二人は、とりあえずシルフといつもあっていた大広間へと向かうことにした。
奇妙だ――二人はそう思っていた。ボルトの城でもそうだったが、監視がほとんどいない。このシルフの城でさえ監視がいない。いたのを見たのは門番だけだ。普通ならばもっと監視がいるだろう。
そして、とうとう二人は大広間の前まですんなりとやってきてしまった。
空はゆっくりと扉を少しだけ開けた。しかし見えるのは、白い壁と赤いじゅうたんだけだ。
と、その時。扉に何かがぶつかった。いや、ぶつかったというよりか何かが突き通ったのだ。その衝撃で扉は壊れ部屋の中に向かって倒れてしまった。
「隠れても無駄だです。あなた方が姿を現さないので私があらわさせていただきました」
声が聞こえた。その声の主はイフリートとウンディーネを倒した

雷の民の男――サレッドだった。
サレッドは王座に納まり、脇には真っ赤に燃えている剣を持つ男と真っ青な剣を持っている男を従えている。
「なっ！」
脇にいる二人の男は空にもあかりにも見覚えがある者だった。真っ赤な剣を持つ者は、炎火焔。フレアブレードを持つもの。
そして、真っ青な剣を持つ者は、川原灰戸。アクアブレードを持つ者。
「ふふ、驚きましたか。この二人は、伝説の剣を使う者。そして、この私も」
サレッドはそう言うと鞘から雷がビリビリとはしっている剣を抜き出した。これこそサンダーブレード。伝説の剣。
「あなたも伝説の剣の一本を持つものだそうですね。ウィンドブレードを持つ者。風樹空よ」
「だからなんだってんだ！　二人を返せ！」
「返すだって？　なにを馬鹿なことを。この二人は私に忠実に慕っている手先だ。君に返す者ではない。なあ？　炎火と灰戸？」
「仰せのとおりです、サレッド様」
そういったのは炎火だった。灰戸は黙っている。
「なにをいってやがる！」
空はウィンドブレードを抜きだし炎火に向かって走っていった。
「君は熱くなりやすいんだな」
サレッドは剣から電撃を飛ばし空の足元に放った。空はその攻撃で足を止めた。
「どうしても返して欲しいというなら返してやってもいい」
「その時、君の命はなくなるけどね」
「なんだと！」
「ウィンドブレードを持つものよ。私の手先になるつもりはないか？」
と、サレッドは不意に言った。不意に言われたので空は「え？」

としかいえなかった。
「私の仲間になれば、この世界は思いのまま。伝説の剣が四本集まれば、この世を征服するための力も手に入るというもの」
「いやだね」
今度ははっきり言った。
「俺はこの世界を征服するために来たんじゃない！　守るために来たんだ！」
「よく言うぜ」
と、炎火が口をはさんできた。
「お前が守るべきものはこの風の民だ。世界などというレベルではない。しかも、風の民は滅びた。お前の使命は果たされなかったのだ」
「なんだって？　お前、まさか……」
「私は風の民を殺した。何か問題でもあるのか？」
空の怒りは爆発した。一気に炎火に近づいていきりかかろうとする！
だが、それより先に炎火に何かがぶつかった。後ろを振り返るとあかりが何かを唱えた後だった。そう、あかりのトリックが炎火に直撃したのだ。
「あかり……」
「ふざけないで！　あなた何を言っているかわかってるの！」
炎火の発言に対してあかりも怒っている。普段のあかりとは違うオーラを放っていた。憎しみが混じったオーラが……。
「灰戸」
と、サレッドがつぶやいた。すると、灰戸は剣から強力な水を発射した。その水は目にも留まらぬ速さであかりを襲った。その勢いであかりは部屋から飛び出してしまった。
「あかり！」
空はあかりのところに行こうとしたときに首の前に剣が現れた。
ビリビリいっている。サレッドの剣だ。

「もう一度訊く。私たちの仲間になるのか？　ならないのか？」
「俺は……俺は絶対、お前の仲間にはならない。世界征服をするためにこの世界に来たんじゃないんだからな」
「そうか。残念だ」
サレッドは剣を腹までおろしそのまま剣を腹にぶつけられ、空はその場に倒れた。
「こいつにはまだ利用価値がある」

第１９話　「変わり果てた」

空が目を覚ましたところはまたもや薄暗い牢屋の中だった。
腰に挿していた鞘からウィンドブレードは抜かれており、シルフの助けも来る当てがない。今度こそ獄から出る手段をなくし、絶望していた。
いくら叫んでも、誰も反応しない。あたりの獄には誰も入っていない。
そうか――空は思った。ここはシルフの城なのだ。城の中を案内されていた時、牢獄の場所も聞いていたのだが、中には誰もいないということをウィンディンが言っていたことを思い出した。
もしかしたら、空が最初の囚人なのかもしれない。そう少しでも思った空は背筋が冷たくなった。いやいや、俺は囚人なんかじゃないんだ――と。
それからしばらくするとこつこつと音が聞こえてきた。誰かが入ってきたのだ。その音の主が空の前に現れたのはまもなくだった。
「灰戸！」
目の前に現れたのは灰戸だった。サレッドの横にいたときの冷徹な顔をしており、空を見ていた。
だが、少したつと、その表情は一変した。あのいつもの灰戸の顔になったのだ。先ほどまでの冷徹な顔を思わせない普通の顔に。
「空くん、少し静かにしてて。サレッドや炎火くんに見つかると大変だからね」
灰戸の忠告を空は守り静かにしていた。その間は灰戸は鞘から青い剣を取り出し鍵穴をその先端でいじくっていた。カチッと音が鳴ったと思うと、今度は扉が開く音が獄中に響いた。
空が牢屋から出ると灰戸は言った。
「ごめんね、空くん。僕はサレッドの言うとおりにしなければ命が危なかったんだ。詳しく説明をしている時間はないんだけど」

「そうだったのか。あかりは大丈夫か？」
「うん、武内さんなら別の牢屋に入ってるよ。僕の魔法で少し怪我をしてるけど、風の民の治療薬を使えばすぐ直るよ」
と、灰戸はズボンのポケットから一つの錠剤を取り出し、空に渡した。
「サンキュー。ところで、どうしてアクアブレードを灰戸が使ってるんだ？」
「わからない。サレッドが僕のところに剣を持ってきて、それでなんか選ばれちゃったみたい。よくわからないけど
そうだ。はい、これ」
灰戸はアクアブレードの鞘の反対側にある鞘を抜き、空に渡した。
「これ、剣と鞘。空くんは剣士だからこれが必須でしょ。ウィンドブレードはごめん。サレッドの管理下だったから持ってくることはできなかったんだ……」
「サンキュー灰戸。いいさ、ウィンドブレードは俺自身で取り返すよ」
「ごめんね。じゃあ、僕は行くよ。サレッドに感ずかれるとややこしいことになるから」
「なあ、灰戸。もう、言いなりになる必要はないんじゃないか？こうやって再会もできたんだしさ」
「そうもいかないんだ。アクアブレードはパワーを制御されているんだ。裏切ったとたん、アクアブレードのパワー制御が開放され、パワーが限界を超えて爆発する仕組みになってるから……。
それじゃ、空くん。僕はもう行くよ。武内さんならもう一個の牢屋にいるよ。場所はわかるでしょ？　ただし、監視が多いから気をつけてね」
灰戸はそう言うと、冷徹な表情に戻り、獄から出て行ってしまった。
空はゆっくりと獄のドアを開き外をのぞいた。灰戸の姿はもうなくなっており、静かな廊下だった。

空はゆっくりゆっくりと廊下に出て、隠れながらもう一個の獄に向かった。
もう一個の獄は少し遠い場所にある。空が入れられていた獄は小さなものだったが、今度のは大きい獄で地下に四十五人ほどを入れることができる獄だ。
大きい獄の入り口付近にたどり着き、獄の入り口を見るとそこには一人の男が立っていた。やはり、監視がついているようだ。肥っている大男で、今にでもおなかをすかし食事を取りに行きそうである。何時でも食べていなければ気がすまないような。
空はそう考えるとすこし吹いてしまったがすぐに気持ちを切り替えた。一体どうすれば突破できるだろうか？
正直に言えば、切り殺してしまえば一件落着である。だが、空にそこまでの勇気はなかった。自分の目的だけのために人を殺めるなんて……。
いろいろ考えていると、ふと牢屋に入る前の最後の記憶がよみがえってきた。
「そういえばサレッドの奴……。剣を俺の腹に切りかかったのに、全然痛くないな……」
あかりが灰戸の水の魔法で飛ばされ、助けに行こうとしたときサレッドは空の首に剣をやった。空が誘いを断るとそのまま腹に剣で切りかかった。
それなのに今は全然痛くない。そうだ！　みねうちだ！
空はみねうちで監視を突破することにした。剣を抜きだし、みねを見た。これなら大丈夫そうだ。
準備を整えた空は、肥った監視にグラウンドウェーブで攻撃した。男はその場に倒れ、足首を手で触っている。
その時、空は影から飛び出し肥った男に近づいていった。そして、剣のみねで腹部を切りかかった。
「痛い！　誰か！」
空の計画は狂った。みねうちをすれば気絶するという予想に反し

て、肥っている男にみねうちはきかなかったのだ。さらに、大声を出され誰かがこちらに向かっていることだろう。
「ごめん！　ウィンズアース！」
空はウィンズアースを起こし、その強力な風で肥った男を吹き飛ばし、壁にぶつけたことで気絶をさせ、空は獄の中に入った。
空はその場で外の声を聞いていた。
「おい、大丈夫か？　おい！」
誰かがやってきたようだ。肥った男に話しかけているよう。
「たくっ、気絶しやがって。なにがあったんだよ。おい、次の時間の監視をつれて来い。それと、こいつを連れて行くための人もな」
それからしばらく静かになった。どこかに行ってしまったのだろうか。空は少し安心してゆっくりとできる限り音を立てずに階段を下りていった。
たどり着いたのは空が閉じ込められた牢獄と同じ暗さの獄で、広さは倍以上ある場所だった。
どこからかこつこつと誰かが歩いている音がする。見張りがいるのだろうか。空はゆっくりと顔を出し辺り周りを見回した。
誰もいない。閉じ込められている人の足音か――空は内心ほっとした。
獄は広く、牢屋の並びが九列あるのだが、そのうちの三列がある左へと向かった。
そこにいたのは、ほかならぬ風の民達だった。みな、おびえ声を出すこともできないらしい。空はみな助けたかったのだが、それほどの時間もないことから静かにするよう求めて、助け出すのは後にした。内心、心が痛みながら。
空は獄内をくまなく探し続け、右の列から二番目のところの列にいた、あかりを見つけ出すことができた。
「大丈夫か？」
「空……。えぇ、何とか大丈夫。ここから出して」
空は剣の先で灰戸がやったように鍵を壊しあかりを外に出した。

「シルフはどこにいるかわかるか？」
「わからないわ……。私がここに閉じ込められる時までにシルフは一回も見つけられなかったし」
「そうか。じゃあ、あかり。ここの人たちを助けてあげてくれ。鍵を壊すことはできるか？」
「ええ、何とかなると思うわ。そういう空はなにをするの？」
「この中で後一つみていない場所があるんだ。そこを調べてから手伝うよ」
空は最後の一番右の列をのぞいた。
すると、そこには監視が二人奥のところにある椅子に座っているではないか。他の場所ではそんなことはなかったのに、ここだけ警備が厳重だ。
列から少し遠かり、どうにかして突破しようと考え始めた空。シルフがあそこにいることはほぼ確実だ。たとえいなかったとしても、ウィンドブレードなどの重要なものがしまってあるに違いない。
「ふふ、無駄な抵抗はやめたほうがいいんじゃないかな？　風樹よ」
考え込んでいた空の首にまたしても剣の刃が現れた。空は顔を動かすこともできぬまま言った。
「一体、どうして俺がここにいることを……」
「入り口でお前が気絶させたものがいたのを忘れたか？」
監視をしていたあの肥った男の意識が戻ったのだ。そして、証言した。空の服装やらを。それはサレッドの耳にも渡りここに来たのだ。
「まあ、知らせなどなくてもわかってはいたがな。灰戸が君を脱走させようとしたことも。君の仲間がここにいることを伝えたことも」
すべてお見通しだったのだ。このサレッドには。
「俺をどうしようっていうんだ？」
「忘れたとは言わせない。私たちの仲間になるかどうかを問いに来たまで」
「いやだといったらどうなる？」

「今度こそ君をあの世に送ってやろう。先ほどのようにみねうちではない」
「ならばやっちまえよ。俺はお前の仲間になるつもりなんかないぜ」
「そうか。ならば、新しいウィンドブレードの使い手を捜さねばならないな」
「なあ」
サレッドが空の首をそのまま切ろうかと思ったとき、空がそうつぶやいたのでそれをとめた。そのとたん、サレッドに向かって風の刃が飛んできた。
サレッドはそれを見事な動きでかわし、風の刃は空の後ろにある壁にぶつかった。空の首は無事だ。
「邪魔が入ったか」
「サンキュー、あかり！」
空はそう言いながら剣を取り出した。あかりも閉じ込められていた列とその隣の列の鍵を壊し中に入っていた人を助け出してこちらに向かってきている。その中には、アース教官もいた。
「お前を倒してやるぜ！　この城や民を守るためにも。俺が来た使命を果たすためにもな！」

第２０話　「ＶＳサレッド」

空はサレッドに切りかかった。だが、サレッドはジャンプしてそれをかわした。すると、出口に向かって走り出していった。
「待ちやがれ！」
空はサレッドを追いかけた。
「皆よ！」と、アースがあかりに対して言った。
「私とあかりは空を追いかける。他のものは牢屋に閉じ込められている者を助けるんだ！」
皆が同意を表すと、アースとあかりは空たちを追いかけた。
空が外に出るとサレッドは庭の中央に立っていた。
「逃げるんじゃねぇよ」
「逃げてなどいない。あそこで戦うには狭かろう。ここで決着をつけようではないか」
サレッドはエレキブレードを片手に構えた。空も剣を構えた。
「行くぞ！　グラウンドウェーブ！」
空は地を這う衝撃波をサレッドに放った。サレッドはそれをやすやすと横にかわし、空に接近してきた。剣の電気がさらに大きくなる。
「これで十分だ」
サレッドは切りかかってきた。空は剣でそれを抑えたが、長い時間それに耐えることはできない。
「ほう、ただの剣でエレキブレードを抑えるとはなかなかだな」
サレッドはつぶやいた。
だが、空は何もいえない。話そうとしたとたん、空の体は真っ二つになるだろう。
その時、空の後ろからウィンドカッターが飛んできた。サレッドはそれをかわすため、エレキブレードを空の剣から離した。
「邪魔だ！」

サレッドは剣から電撃を放った。だが、ウィンドカッターを放ったあかりとアースはそれを軽々とかわした。距離が遠すぎるのだ。
「グラウンドウェーブ！」
空はグラウンドウェーブを放った。あかりたちに気を取られているサレッドにそれは直撃した。だが、微動だにしなかった。
と、その時、あかりとアースは空の隣にやってきた。そして、とらわれている人たちは今助けていることも同時に伝えた。
「サンキュー、あかり、教官」
「さあ、それより奴をどう倒すかだ」
「邪魔が入るとはな。まあいい、お前達などまとめてかかってやる！」
サレッドは再度、電撃を放った。そのスピードは速く、先ほどよりも近い場所にいるため今度はあかりバリアでそれを防いだ。
空は反撃に出るため、ウィンズアースを。あかりはウィンドストリーム。アースはバキュームアースでサレッドに攻撃を試みた。地を這うウィンズアースに続き、空を支配するウィンドストリームが続く。そして、足を捕らえるバキュームアースでサレッドの動きを食い止めた。
だが、バキュームアースに足を捕らえているサレッドは空とあかりのアースわざが来る前にバキュームアースから抜け出し、すべてのわざをかわした。すると、サレッドの剣に巨大な電気エネルギーが集まっているのが三人にはわかった。
空とあかりは何をしようとしているのかがわかった。
「まずい！　教官！　バリアが張ってください！　あかりのバリアだけじゃ足りないんです！」
「どういうことだ？」
「いいから！」
「消えろ！」
あかりとアースがバリアを張った。それと同時に雷の剣にチャージされていた電気エネルギーが解き放たれた――マスターサンブラ

スターズが。
　あかりとアースによるバリアのおかげで、三人は無事だった。だが、後ろに流されたマスターサンブラスターズのエネルギーは風の城に直撃した。直撃した場所は牢獄の入り口の近く。幸いにも入り口はふさがれなかったが、近くに巨大な穴が開いた。
　二人のバリアは解けた。空はウィンズアースを放った。ウィンズアースは見事サレッドに直撃した。ウィンズアースは剣士に対してパワーが倍増するため、大きなダメージを与えた。だが、サレッドはまだ倒れていなかった。
「よくもやってくれたな……」
　サレッドはそうつぶやくと、剣を構えた。
「だが、所詮はウィンズアースなど下級トリック。私にはほとんどきかん」
「ならばどんどんウィンズアースを当ててやるまでだ」
　空は再度ウィンズアースを放つ体勢に入った。だが、放つのをアースはとめた。
「奴の言うとおりだ。ウィンズアースは下級トリック。奴にはほとんどきかん」
「そんなのやってみなきゃ――」
「わかるのだよ、空。あの男は巨大な雷のエネルギーに包まれているのだ。下級トリックでは太刀打ちできん」
「じゃあどうすれば――」
「それは」とサレッドが言った。
「上級トリックを使えばいいことだ。他にも一つだけあるが、今のお前達にそれが使えるとは思えないがな」
　トリックにはトリックによって威力の高さで示すレベルがある。ある一定のレベルをこすと下級、中級、上級の三タイプに分けられる。一番強いのは上級である。さらに、秘級という級があるがこの級は本当にあるかは謎だった。
「調子に乗るな！」

空はウィンズアースを放った。だが、あっさりとかわされウィンズアースは空振りに終わった。
「無駄な抵抗をするな。さあ、今度こそとどめを刺してやる」
雷の剣に電気エネルギーが集まっていく。マスターサンブラスターズがまた放たれるのだ。まだ、完全に回復をしていないあかりとアースのバリアでは今度こそ防ぐことはできないだろう。
空はそう思ってサレッドに近づき、直接攻撃を試みた。だが、アースが言ったように奴は雷エネルギーに包まれており、近づいたとたんに電気が空の体に走った。幸いにも防具をシャツの下につけているため、地肌がやけるようなことはなかった。
「さらばだ。風の使者よ」
サレッドはそうつぶやくと剣をおろした――。
だが、マスターサンブラスターズは不発に終わった。空は聞いた。サレッドの「うおっ」という言葉を。死を覚悟してまぶた閉じていたが、開いてみるとそこには炎火が立っていた。
「フレイムブレイズ！」
炎火は炎の剣を操り、サレッドに切りかかった。だが、サレッドはすばやくそれをかわした。それを見ていた空の肩に手が置かれた。そして、話しかけてきたのは聞き覚えのある声だった。
「大丈夫？　空くん？」
「は、灰戸。ああ、大丈夫だ」
「よかった。はい、これ」と、灰戸は緑色の剣を差し出し、それを受け取った。
「ありがとう、灰戸。これはウィンドブレードだな？」
「そうだよ。さあ、立って。サレッドを倒そう」
空はうなずくと立ち上がると、炎火とサレッドは戦っていた。空と灰戸は炎火の援護に回った。
炎火とサレッドは共に剣をぶつけ合っていた。キンキンと剣がぶつかり合う音がする。炎火はまだまだ余裕だが、サレッドは空との戦いで少し疲れていたため、体力の消耗が激しかった。炎火はフレ

イムブレイズを時々はさみながら攻撃をしていたが、サレッドはそれを通常の剣で抑えていた。
そんな時、空と灰戸は援護に回った。空はグラウンドウェーブでサレッドの注意を引き、灰戸は水の魔法を使って注意を引かせていた。メインの攻撃は炎火だった。
「小ざかしい！」
サレッドは炎火を力任せで押し返し、炎火に隙を作らせ攻撃を仕掛けた。だが、それを灰戸のアクアブレードが防ぎ、今度は灰戸とサレッドが戦いを始めた。灰戸はどちらかといえば非力なほうで、剣も得意ではないためおされ気味だった。空はみかねて灰戸と共にサレッドと戦った。
「空くん！」
「集中しろ灰戸！」
空が喝を入れると灰戸はサレッドとの戦いに集中した。サレッドは二人を相手にしてるのに、まともに戦っていた。
「ウィンドブレイズ！」
「アクアブレイズ！」
風の剣が風に包まれ攻撃力をあげるウィンドブレイズと水に包まれる水の剣の攻撃力をあげるアクアブレイズで二人はサレッドを攻撃した。サレッドもたまらずサンダーブレイズで対抗してきた。
「……マスターフィールド」
サレッドはそうつぶやくと、後ろに大きく後退した。サレッドのあたりをさらに巨大な電気エネルギーが作り出された。それを知らず、近づいていく二人はその電気エネルギーにはじき返された。
弾き飛ばされた二人はあかりとアースによって助けられた。炎火も四人のところにやってきた。
「大丈夫か？　空？　灰戸？」
二人は大丈夫だといった。立ち上がると、伝説の剣を持つものはサレッドに焦点を合わせた。サレッドのあたりには元の電気エネルギーで包まれていた。

第２１話　「そしてなくなった」

「わかっていたよ」とサレッドが言った。
「炎火と灰戸。君たち二人が裏切ることなどね。炎の民と水の民の神を殺した私を許してくれるとは到底思えないからね」
「だったら、なぜ私と灰戸に仲間になれなどといった？」
「簡単な話しだ。水雷炎風の剣のパワーを引き出すためだ」
　その言葉の意味が炎火以外の者にはわからなかった。炎火は言った。
「そうか。四本の剣のパワーをまとめたんだな」
「さすがだな、炎火。そうだ、そう言う意味だ」
「どういうことなんだよ？　炎火？」
「今、ここに伝説の四本の剣が集まっている。そして、フレアブレード、アクアブレード、サンダーブレードの力は完全に解放されているんだ」
　炎火はここで間を開けた。空がその言葉の意味を理解するのを待っていたのだろう。だが、空はまだ理解できていなかった。炎火は続けた。
「だが、お前はウィンドブレードのパワーを引き出していない。それは奴の計画を阻止することを示す」
「全然、わからないんだけど……」
「ならばこれだけはいえる。お前がウィンドブレードのパワーを完全に開放してはいけない」
　炎火はそう言うとサレッドのほうに体を向け、炎の剣に火のエネルギーが集まっていく。
「灰戸、お前もやるんだ」
　灰戸はうなずくと、水の剣に水のエネルギーを集めていった。
「空くん」と灰戸は言った。
「剣の力を完全に解放すると、強力な攻撃を使うことができるんだ

……」
　その時、炎の剣が完全に真っ赤になった。それと同じく、水の剣が完全に青くなった。
「食らえ！　バーニングブレイジング！」
「いけえ！　ウォータールブラスター！」
　フレアブレードから火のエネルギーが巨大な玉を作り出しサレッドに近づいてく！
　アクアブレードから水のエネルギーが巨大な複数の玉を作り出しサレッドに近づいていく！
　それら二つの玉はサレッドに直撃した。大きな音を立て、煙を黙々とたたせながら……。
　煙が晴れると皆の前に現れた姿は顔は険しい表情となり、服のところどころが焼け下に身につけている黒くこげた鎧が見える。剣は右手に持っており、普通の状態であり攻撃してくる様子はない。
「見せてもらったよ、炎火、灰戸」と、サレッドは言った。
「フレアブレードの秘級”バーニングブレイジング”と秘級”ウォータールブラスター”をね。これで私のマスターサンブラスターズと同じ秘級が使えるわけだ」
「なにが言いたい」鋭い口調で炎火が訊ねた。
「ぜひともウィンドブレードの秘級を見てみたかった。だが、その気がないならば仕方があるまい。君たちをこの世から葬り去ってやろう」
「そんなことができるもんか！」灰戸が反論した。
　それと同時にサンダーブレードに電気エネルギーが集まり始めた。だが、その集まりは以上だった。マスターサンブラスターズを放つときよりかエネルギーが大幅に集まっている――急速に。
「まずいな。あかり！　アース！　バリアはもう一度張れるか？」
炎火は叫んだ。
　二人はバリアが張れることをあらわした。
「じゃあ、早急に張ってくれ！　灰戸！　お前と私は秘級を使う準

備だ」
「一体どうしたっていうんだよ？」空がそう訊ねた。
「奴はマスターサンブラスターズより強力なわざを使ってくるはずだ！　あのエネルギーのたまり具合は尋常じゃない！」
サンダーブレードに集まってきている電気エネルギーはバチバチと巨大な音をたてており、青いイナズマが目に見える。
「お前はバリアの中にでも隠れてな、役に立たないんだからな」
「なんだと！」
その時、サレッドはつぶやいた。
「時は来た……」
「早く隠れろ！」炎火は叫んだ。それと同時にあかりが空の手を取りバリアの中に入れた。
「我、雷の神の使いなり。我にその巨大な力を分け与えん」
「灰戸行くぞ！」
灰戸はうなずくと、炎火と同時に秘級を繰り出した。
「くらえ！　ダークネスサンダー！」
サレッドの体から電気エネルギーが三六〇度に解き放たれた。巨大なイナズマを作りながら、空たちに迫ってくる。炎の玉と水の玉はそれとぶつかり合い、押さえ込んでいる。だが、二つの玉ははじけ飛び、強力なイナズマは炎火と灰戸を襲った。そして、二人がどうなったかもわからぬうちにバリアにもそれが直撃した。バリアは押さえ込むことなどなく壊れた。だが、それでも進軍をとめたいイナズマは城にも直撃し、城を破壊した。
それはまさに死の光景。空は雷雲に覆われイナズマが鳴っている。地上に見えるものはただ地平線とがれき、無残に倒れている人の姿だけ。その中で一人たっている黄色の剣を持つ男。
その男はあえいでいた。しばらくすると剣を地に落とし、笑い声をあげた。
「これで私がこの世の神だ。ゴブドラの力など頼らなくても私の力でこの世を支配したのだ！」

男は――サレッドは優越感に浸っていた。ついにこの世界を支配することができたのだ。この世で生きている者などもはやサレッドに対抗できるものはいない。伝説の剣を持つものはサレッドのみ。四神もいない。各民の救世主ももはや息がたえている。サレッドの支配を妨げるものなど存在しない。

だが、彼にも予想外のことが起こった。あえいでいるのは相変わらずだったが、さらに頭痛が加わった。さらに、吐き気が加わった。さらに、体に痛みが走った……。彼は自らを保てなくなり、その場に倒れた。

「ボ、ボルト……！　きさま……私の邪魔……をするというのか……！」

ダークネスサンダー。雷の神の力を受け、使う秘級と同等――もしくはそれ以上――のわざを使った彼の体には巨大な電気エネルギーがたまっていた。まだ放出し切れていない電気エネルギーが。サレッドはそれを知っていた。だが、それを対処する術などこれ一つない。未知のわざの一つなのだから。

そして、彼も息を引き取った……。

つぶやく声が世界のある場所で聞こえる。

「ねえねえ、みんな死んじゃったよ」

幼い声だ。潤いを感じさせるような声の響き。

「当たり前だ。ダークネスサンダーなど自らをも傷つける悪魔のわざなんだからな」

威厳ある声だ。燃える情熱を感じさせるような声の響き。

「どうしましょう？　これではこちらの世界へやってきた彼らにも申し訳が立ちません」

やさしい甘い声だ。やさしく吹き抜ける風のような響き。

「そんなことどうしようもなかろう。オレたちもそうだった」

バチバチした声だ。雷の威厳をもつような響き。

「その世に来て私たちは死んだ。世界を守ると同時にな」バチバチ

した声の持ち主は続けて言った。
「それはそうですが――彼らはまだ目的を達していません」
「じゃあどうするっていうの？　ゴブドラに頼む？」幼い声の持ち主が言った。
「ゴブドラも聞いてくれまい。サレッドという男が起こした地上の出来事などにな」威厳ある声の持ち主が言った。
「しかし、私たちが行ったときは助けてくれました」
「それはおれたちが生きていたからでこそだ。この世にいないおれたちの話など聞かないだろう。なあ、ライジン？」
「そうだ。無駄なことをすればオレたちの命が減るだけだ。もっともすでに命などなくなってはいるが」
ライジンと呼ばれたバチバチした声の持ち主は言った。
「もともとはあなた達雷の民が起こしたことでしょ！　何とかしなさいよライジン！」やさしい甘い声の持ち主が叫んだ。
「怒るな、ジンプウ。そんなこといわれてもどうしようもなかろう」
「ねえねえ、あれを見て」
と、幼い声の持ち主は地上を指差した。皆がその先を見ると、一人の男が立ち上がっていた。緑色の剣を持っている男。男は立つことすらつらいようだ。剣を杖代わりにしてやっと立っていた。
その男は近くにいる少女に声をかけた。――おきろおきろ――と。だが、少女は起きる様子など見せない。それでも男は呼びかける。
「風の民だ。それも使者だな」威厳ある声の持ち主が言った。
「なんて生命力が強いんでしょう。彼ならやってくれそうだわ。ねえ、スイジン？」ジンプウと呼ばれたやさしい甘い声の持ち主が言った。
「そうだね。さあさあ、早く伝えちゃったほうがいいんじゃないの？　ジンプウ？」
「そうね。エンジン、ライジン。邪魔しないでよね」
ジンプウはたっている男の下へと降りた。その姿を見れるものはいない。たっている男もだ。彼女は彼の真正面で止まった。そして

言った。
「ゴッドリメインに行きなさい。フレアブレード、アクアブレード、サンダーブレード、ウィンドブレードを持って」

第２２話　「世界復興」

草木が生い茂る森の中の一角に古風な小さいピラミッド型の遺跡がある。建物は風雨にさらされもろくなり、土色も色あせていた。
その遺跡に、緑の剣、赤い剣、青の剣、黄色の剣を持った男が近づいてきていた。体はぼろぼろで服装も整っていない。だが、気力と力だけは残っているらしく少しよろけながら歩いている。その男の頭の中に数時間前に聞こえたささやきの声が流れた。
『ゴッドリメインはここから南にある森の中にあるわ。そこに行けば何とかしてくれる方がいらっしゃる。その方に会いに行くのよ』
その男はすぐに遺跡を見つけた。中に入ると地下に行くための階段ができていた。通路は狭く、外の色より少しばかり明るい色をした壁に囲まれている。電気などはなく、赤の剣と黄色の剣にまとっている炎のエネルギーと雷のエネルギーが中を照らしてくれていた。
そこを何時間歩いただろうか？　歩いても歩いても見ている光景は同じ。まるで迷路の中で同じところを何度も通っているようだ。そんなとき、ついに変化が現れた。男の視線の先に扉が見えてきたのだ。扉の両脇にはたいまつが灯っている。
男は言葉を思い出した『何とかしてくれる方がいる』と――誰かが扉の先にいるのだ。はやる気持ちを抑えながら、男は扉に近づいていった。扉を開くとそこは風の城でシルフがいつもいた大広間と同じぐらいの広さで、まっすぐ先には王座がある。中もたいまつが灯っているため、明るかった。
男は誰かいるか呼びかけてみた。だが、返事はなかった。男が落胆したその時、たいまつの火が風に吹かれたように消えた。あたりは急に暗くなり、フレアブレードとサンダーブレードの光だけが頼りになった。
空は急に不安になり始めた。一体になにが起こるのだろう？　まさかまたあんな目にあうんじゃ――そう思うと背筋に悪寒が走る。

「よくきたな、若造よ」
部屋内に突然、声が響いた。威厳ある声で、怒ると暴走しそうな人物の声だ。声は続いた。
「汝、何をしにきた？」
空はその問いにちゃんと答えた。「あなたのところに行くよう言われたんです。――目に見えない人に」
答えを聞いた謎の声の主は王座に座り空の前に姿を現した。足はなく、目つきがは鋭い。口にはキバが生えており、はがっしりしている。おそらく男性だろう。明かりが剣の光だけであるため、完全な容姿を空が知ることはできなかった。
「して、行って何をしろと？」その男性は訊いた。
「それがわからないんです。ただ『何とかしてくれる方がいらっしゃる』といわれただけなんです」
「それについては私がお答えします」と、甘い声が空と男性の耳に響いた。
この声だ――空は思った。ささやいてきた声はこの声だ。そう思っていると男性は衝撃の言葉を発した。
「ジンプウか」
ジンプウ！　空はこの言葉に聞き覚えがある。そうだ！　ヘムリスに行けといってきた、昔、風の民の救ったという人物の名前。
「そうです。エンジン、ライジン、スイジンもいます。本日、こちらに来たのは地上が大変になっているからです。――空、私が言ったことを続けて言いなさい」
空は、本日からからです。までの言葉を復調した。男性が何も言わないと、ジンプウは続けた。
「地上で生きている者は今、風樹空しかおりません。他の生存者を探しましたが地下にいるものでさえ死んでいました。地上はめちゃくちゃになっております」
空は復調した。
「地上で生きている者は風樹空のみ。ですが、風樹空はこの世界の

ものではなくいずれこの世界から離れます。そうなると、この世界はなくなる運命になってしまいます」
空は復調した。
「どうか、この世界の未来を救う手段はないでしょうか？」
空がそこまで復調した。しばらくすると男性は言った。
「お前達、よく考えたな。この少年を連れ、権限のない自分の考えを少年に言わせるとはな」
男性は間を空けてから続けた。
「いいだろう、この世界の未来を復活させる。四本の剣はあるな？」
「空、四本の剣を差し出すのよ」
空が男性に四本の剣を渡した。剣はエネルギーを失いあたりは暗くなった。
「ジンプウよ。最後のことは忘れていまいな」
「えっ？」
「とぼけるな。世界復興には四人のいけにえが必要であることを忘れたわけではあるまい。お前達四人もそれでこの世から去ったのだからな」
「どういうこと？」
空が口出しした。すると、ジンプウは説明をする時間を男性に承諾させ、説明を始めた。
「あなた、私がどんな人物かはわかってるわね？」
「昔、風の民を救った方でしょ？」
「そう。でも、それは風の民だけだけど他の民も同じように救われたの。炎の民はエンジン。水の民はスイジン。雷の民はライジン――という風に。
古代に今と同じような現状が起こってしまったの。その中で私たちは生き残り、ここにいるゴブドラ様に今の世界を作りなおしていただいたわ。言っている意味はわかるわね？」
「昔、今と同じように人がいなくなったけど、四人は生き残ってここにきたってこと？」

「そうよ。その時、私たちは死んだ世界復興と引き換えにね。それでこの世界は救われた。それで、私たちはそれぞれの民にたたえられたわ」
「そして、今の世界復興には四人の犠牲者が必要であるってこと――？」
「ええ」
しばらく間が空いた。空に不安がよぎる。すると、ジンプウはゴブドラと話し始めた。
「ゴブドラ様。この世界には今、一人のものしかいません。そして、まだ幼きものでもあります。どうか、犠牲者なしでは世界復興はできないのでしょうか？」
「ダメだ」ゴブドラは即答した。
「ねえ」と、空はつぶやいた。
「犠牲者を出して世界が復興しても結局は人がいなくなるんでしょ？　それだったら何の意味もないんじゃない？」
「それは――」
ジンプウは空の問いに答えようとしたが、空はそれを止めた。「ゴブドラ様に訊いたんだ」
ゴブドラは空を観察してから、言った。
「世界復興は人の生がよみがえることも意味する。もともとあった世界をそのまま引っ張り出して元に戻すからな」
「それだったらまた繰り返されるんじゃないか？」
「いやそれはない。おおよそ、世界が今の状況になってしまったのかはわかる。この剣を使ったのだろう。だが、その剣は先ほど壊した。その剣だけは元には戻らない」
「みんな、生き返るんだな？」
「もちろんだ」
「ちょっと、空」
空ははっとした。その言葉はジンプウが発したものだったがあかりが言ってきたような感じがした。

「あなた、いけにえになるつもりじゃないでしょうね？　ダメよ、それは絶対に。あなたには仲間がいる。そして愛する――」
　ジンプウは続けて言おうとしたが、空が手を上げストップの合図をしてるのを見てやめた。
「ゴブドラ様。一人のいけにえだけでも復興はできるんでしょうか？」
「できないことはない。だが、失敗するかもしんがな」
「それでもかまいません。俺をいけにえにしてください」
　空はゴブドラに歩み始めた。ジンプウはそれをとめるよう声をあげた。
「そんなことをしちゃだめ！　あなただけでも生きなければ。何もあなたがいけにえにならなくても世界を復興させるための手段はあるわ！」
「どうやって？」
「それは――」ジンプウは言葉に詰まった。だが、別の声が答えた。
「それはゴブドラ様に頼むしかない」威厳ある声だ。エンジンの声である。
「ゴブドラ様。どうかこのものをいけにえにしないで世界は復興できないのでしょうか？」
「絶対に必要だ。いけにえがなければ世界の復興などできん」
　空はまた歩み始めた。それに気づいたジンプウは叫んでそれをとめようとしたが、空は歩き続けた。
「俺がこの世界に残っても――もとの世界に戻っても何のいいこともない。ならば、俺も死んだほうがいいだろう。それであいつらがよみがえるなら」
「馬鹿なこと言わないで！」ジンプウは声を張り上げた。その声で空は歩むのを止めた。それは張り上げられたからではなく、”あいつ”の声に似ていたから。
「それで本当にいいと思ってるの？　あなたがいなくなったら、よみがえった彼らだって悲しむんじゃないの？　あなたが今受けてい

る悲しみを彼らも――彼女も受けるのよ」
「だったらどうすればいいのさ！」
空は振り向きながら大声で言った。見えない相手がどこにいるのかわかるように。そのときの空の顔をみてジンプウははっとした。目から涙を流している。悔しそうな。巨大な悲しみに襲われている表情だった。
「どうすることもできないんだろ！　俺がいなくなればで他の人たちは救われるんだろ？　人一人と人数百人が助かるなら人一人ぐらいたいしたことないじゃないか」
「それでもあなたが死ぬのは間違ってる！」
空は床にへこんだ。地面は涙でぬれてゆく。
その姿を見た幼い声のスイジンがゴブドラに質問を問いかけた。
「ゴブドラ様。死んだものではダメなのでしょうか？」
「死んだものなど生気がない。いけにえには使えん」
「四神でも――？」
ゴブドラはためらった。死んでしまっている四神。だが、彼らの秘めているエネルギーは生気など無用な予感がする――ゴブドラやスイジンはそう考えた。
「四神ならば――やるだけの価値はある。だが、どうなるかはわからない」
「決まりだな」エンジンがいった。
「ジンプウ、そいつを連れて四神を探しに行くぞ。奴らの死体を探しに行く。そいつが死ななくてもいいかもしれん」

エピローグ

ライトサンシティ雷の民城内で、四神のうちの三人が死体で発見された。ボルトを除いて電気による感電死していた。見るも無残な姿だった。

ゴッドリメインを出て、ライトサンシティに来た空とかつての神たち。空にかつての神たちを見ることはできなかったが、誰かがトリックがつかるのか倒れている三人をトリックで運び、城を後にした。

次に風の民の城へとやってきた。城は無残にも崩れ落ち、がれきの山となっていた。がれきの下にはたくさんの人々がいる。もちろん、伝説の四本の剣を使っていたものたちも。

空は彼らを見ないよう遠回りして城に近づいた。見たら悲しくなる。

「ええっと、確かこの辺に……」

がれきの上に立つと、ジンプウはシルフを探し始めていた。これもまたトリックを使っているのだろうか。空は地道にがれきをどかしシルフの姿を探していた。だが、それは無意味に終わりスイジンがシルフがいる場所を感知した。

その場所のがれきをどかしてみると、そこには傷ついたシルフが倒れていた。

「シルフ！」

空はシルフを抱え上げ、何度も声をかけゆすった。だが、起きる気配などない。やはり、死んでしまっているのだ。その表情は他の人たちに指示を与えている時の表情だった。唐突に起こったこの惨劇。痛みを感じる間もなく死んでいった。

かつての神たちがシルフをトリックで運び始め、五人はゴッドリメインへと戻った。

ゴブドラに四神を渡すと、ゴブドラは「なんとかできるかもな」

といい、準備を始めた。
準備といえど、四神を横一列にならべることだけだった。その後の儀式では一人ずつ宙に上げそのエネルギーをゴブドラが吸収するというだけのことだった。
全員が完全に死んでしまうとゴブドラはつぶやいた。
「ふむ……。やはり足りんな」
「どうしてですか？」ジンプウが訊いた。
「ボルトのエネルギーだけがやたらと少ないためだ」
「ボルトの奴だけやたらと傷ついていたからな」ライジンが吐き捨てるように言った。
ボルトは炎火による攻撃とサレッドによる攻撃の二種類を受けている。それだけダメージも大きく、体も傷ついている。
「ダメだな。これでは復興はできん」
あたりに沈黙が流れた。最後の望みは絶たれたのだ。この世の復興をこのまま犠牲なしではすることはできない。空は沈黙を破るとともに言った。
「だったら――だったら、俺が犠牲になる」
「空！」
「仕方ないさ。俺だけ生き残ってもしょうがないんだ」歩きながら空が言った。
「しょうがないわけない！」ジンプウが叫んだ。
「まだ……まだやれることはあるわ！」
「ゴブドラ様」と、空はジンプウを無視していった。
「あの四人の口を押さえていただけませんか？　俺の気持ちが変わるかもしれない。そうならないうちに」
「ちょっと！　く――」
ジンプウの声が途切れた。ゴブドラはシルフの横に倒れるように言ったので、空は言われたとおりにした。すると、空の体は浮き始めそのエネルギーがゴブドラに流れて行く。
「ジンプウ」と空はつぶやいた。

「あいつらに――あいつらに俺のことは言わないでくれ。あいつらに心配はかけられないからな」
返答は聞こえない。やはり四人からの声は聞こえないようになっている。空はそれ以上何も言わなかった。そして、空のエネルギーはゴブドラに吸収されその場に倒れた。
ゴブドラは「これなら大丈夫だ」とつぶやいた。
すると、かつての神たちの声がゴブドラの部屋に響く。空、空！――と。
だが、ゴブドラはそれを無視して世界復興を始めた。ゴブドラの体の中からエネルギーがゴッドリメインから世界中へと光と課し、光は雨として地上に届きわたった。そして、壊れた剣に光が再度宿りそれらもゴッドリメインから去っていった。
「四本の剣は世界の柱となるものでもある。あれがこの世に存在しなければつぶれてしまうのだよ」
ゴブドラは倒れている空に言った。だが、空にその言葉は届いていなかった。そう、かつての神たちの声が聞こえなくなったあのトリックがなくなった後でも、彼らの声が届かないのと同じように。

風の城城内の廊下に倒れている一人の少女――あかりがゆっくりと目を開いた。あかりの近くには風の民の教官であるアースが倒れていたので、呼びかけるとアースは目を覚ました。
「大丈夫ですか、教官？」あかりは訊いた。
「ああ、大丈夫だ」
アースは立ち上がるとあたりを見回し、なぜこんな所で倒れているかを思い出していた。やっとの思いで思い出すとあたりを二人は見回した。だが、そこに一緒にバリアの中に入っていた空の姿はなかった。
「空、どこにいるの？」あかりは叫んだ。だが、空が出てくる様子など微塵もなかった。

二人は空を探すため廊下を進んで行くと、そこでは灰戸と炎火、そしてサレッドも倒れていた。二人は全員を起こすと、空がどこにいるか知ってるかを聞いた。だが、知っているはずもなかった。
「私が知るわけなかろう」と、サレッドは立ち上がりあかりの質問に対して言った。
「私はこれで失礼する。こんなところにいても何の意味もない。私の計画は終わったのだ」
「どういうことだ！」
炎火はサレッドの肩を引き、面と面を向けさせた。
「私の計画――世界を我が物にすることは失敗に終わった。ならばここにいても仕方ない。
それに、私も含め皆、死んだのだよ、炎火。それなのにこうしているということは、伝説の剣四本はまた世界に散らばり私の手から離れた。これでは私の計画を成功させることはできない」
「僕たちが死んだって――どういうこと？」灰戸が訊いた。
「自分で考えてみな。では失礼する」
「とにかく、手分けして探そう」サレッドがその場からいなくなると、炎火がそう提案した
だが、いくら探しても探しても空の姿はなかった。そして、探すうちにわかって行った事実が、風樹空の姿とシルフの姿だけがなくなっていることだった。
日がくれ謁見の間で落胆している四人の耳に何かがささやかれた。
「空とシルフはこの世界を救うため犠牲になりました。もうこの世にも存在しません」
あかりたちはそれを聞き返答をした。だが、その返答の答えが返ってくることはなかった。ただ、最後に聞こえたのは「ごめんなさい、空」という言葉だけだった。

それから数ヶ月後、あかりたちはウィング遺跡の最深部へとやってきていた。以前いた巨大生物はおらず、ウィンドブレードも安置

されていなかった。
「さあ、もう戻るが良かろう」と、アースはあかりと灰戸が炎火と話している話しが区切りが良かったので言った。
「無事に送り届けてやるよ。二人――いや三人が住んでいるもとの時代にな」
世界には無事に平和が訪れた。雷の民も神がいなくなり勢いを失い今ではライトサンシティだけにその勢いをとどめている。また、他の民達も町の復興作業を続けている。争いごとは少なからずあるが、大きな争いではない。
こうして平和にしたあかりと灰戸はもとの時代に戻るためにウィング遺跡へとやってきていた。
アースは教官ではあるが、シルフやウィンディンみたいなトリックを使うことはできない。そのため、時空転送もできないのだが、ウィング遺跡からパワーをもらえば時空転送のトリックが使えるであろうというアースの考えできていたのだ。
「それじゃ、炎火」と、灰戸が言った。
「いろいろありがとう。助けてくれたりしてくれて」
「たいしたことはしていない。灰戸ががんばっただけさ」
「私からもお礼を言うわ。空の分も」と、今度はあかりが言った。
「いなくなった空も炎火にはお礼を言ってくれると思うわ。あれだけ助けてもらったんですもの」
「私もいろいろ助けてもらったよ、あいつにも君にも。元の時代に戻っても元気でな」
あかりはうなずいた。すると、アースは言った。
「じゃあ、二人とも背をあわせてたってくれ。無駄なくトリックを使いたいのでな」
二人は背をあわせた。そして、あかりは目を閉じ、灰戸は炎火に再度お礼を言った。
「空……」
あかりは最後にその言葉を放った。それと同時に二人はウィング

遺跡からいなくなった。
外から野球部の声やサッカー部の声が聞こえる。その活気ある声であかりは目を覚ました。
あたりを見回してみると、そこは風研究部の部室で衣服も制服になっている。入り口付近では灰戸が倒れていたので、あかりは起こした。灰戸がおきあたりを再度見回してみた。だが、やはり空はいない。
「元の時代に戻ってきたんだね、僕ら」
「そうみたいね。あいつを除いて……」
部室に重たい空気が流れた。灰戸はもともとおしゃべりではなくユーモアでもないため、この雰囲気にどう対処していいのか考えていた。
と、その時、突如扉が開き扉の前に立っていた灰戸は倒れ、積み上げられているノートの山を崩してしまった。
「おいおい、大丈夫か灰戸？」
入ってきたのは男だった。あかりが誰が来たのかと思って振り向いてみるとそこには見慣れた男が立っていた。その姿にあかりだけではなく灰戸も驚いていた。
「く、空……」
「よっ」手を挙げながら空はあかりに言った。
あかりは思わず走り出し空に抱きついた。そして「お帰り」と泣きながら言った。
「エネルギーは抜けても生きる意志があれば、自然とエネルギーが体に蓄積されよみがえるだろう」
ゴッドリメインの一室でその言葉が響いた。

番外編「国際防衛センター」（前書き）

風の伝説「エピローグ」終了後の世界を描く、スピンオフ作品です。
「エピローグ」までを読了後に読むことをおすすめします。

番外編「国際防衛センター」

テイルゴッドワールドが、風の民の英雄に救われてから、五年がたっていた。

風の民の英雄が、今のこの世界をみたら驚くだろう。風の民の英雄がいた五年前のテイルゴッドワールドとは違い、各民は他民の国へと自由に出入りすることができるのである。また、そこで争うことはなく、テイルゴッドワールドは国際社会という道をたどっていたのだ。国際社会化によって、各民の他民への考えを言い出すことができるようになり、また、争いが醜いものであると唱える者も現れるようになり、結果的に安全と秩序が保たれる世界になっていた。

国際社会にしようと唱えたのは、五年前に伝説の剣の一本であるフレアブレードの所持者であったホノオ・エンカだった。彼は五年前に一度、世界が滅びたことを知っている数少ない人物である。彼は二度と世界を滅ぼさせないようにと、なぜ世界が滅びてしまったのかを調査し、国際社会を推進したのである。このことからエンカは各民から知られる、炎の民の代表的な政治家として名をはせた。

「なかなかよい結果になったな、エンカ」とファイリーは言った。

炎の民の中心地であるフレアシティにあるフレア城の謁見の間で、エンカはひざまずいた。彼は、燃えるような赤髪をしており、人を射るような鋭い目をしている、新しい炎の民の神であるファイリーと謁見をして、言葉を受けていた。

「ありがとうございます」とエンカ。「これもすべてファイリー様のご協力のおかげでございます」

「おれは何もしていないさ。お前ががんばったから、この社会ができたのだ。ここまでなるとは、おれを含めほかの民のやつらも思わなかっただろうな」

「ところで、ファイリー様、本日はお話があるのですが」

「新しい提案でもするのか？」とファイリーはうれしそうだった。

「話してみろ、エンカ」
「ありがとうございます。実は、国際防衛センター――ＩＤＣというものを設立したいと考えているのです」
　ファイリーはただうなずいただけだった。エンカは話を続けた。
「国際防衛センター――略して、ＩＤＣは国際間のトラブルを解決する組織です。国際社会となると、民との間でさまざまなトラブルが生じることでしょう。場合によっては、かつての戦いになるかもわかりません。そのようなことに発展しないために、ＩＤＣでは国際間でのトラブルを処理する、というのが目的です。また、もし戦いになった場合、ＩＤＣが積極的に加わり終結へ向かわせます」
「つまり、国際治安維持隊のようなものだな？　しかし、この案はおれ一人では決められないな」
「承知しております。つきましては、この件をファイリー様にほかの民の神たちにお話していただきたいのですが」
「いいだろう。ところで、エンカ、私は聞きたいのだが、それはおれが行かなければいけないと考えているか？」
「いえ、事情に詳しい私ができれば参りたいと考えております」
「ならば、おれがあいつらと都合をつけてやろう。提案者であるお前のほうがうまく説明できるだろうから、お前自身で行くといい」
　ファイリーの計らいによって、エンカは数日後、風の民の新しい神であるウインディと謁見を果たし、続いて水の民の新しい神であるウォータリー、雷の民の新しい神であるサンディとの謁見も果たした。エンカはその謁見でＩＤＣについて説明をし、風の民のウインディと水の民のウォータリーは賛成を示した。しかし、雷の民のサンディだけはそれに反してきた。
「そのような機関を作ることによって」とサンディはその理由を話した。「この社会は、現状の平和を脅かされることになる」
「なぜ、この世界の平和を守る目的で造られるＩＤＣが、平和を脅かすとお考えなのですか？」とエンカはたずねた。
「ここに弱い魔法使い（トリッカー）と弱い魔法使いがいる。二人

がその能力を合体すれば、強力なトリックが生まれ、彼らは支配力を強めるだろう。それと同じことで、平和の中に平和を維持する組織を作れば、その組織は支配力を強め、結果的に平和を脅かすことになる」
「そんなことはありません」とエンカは抗議した。「ＩＤＣは国際間でのトラブルだけを解決する組織です。その席も四つの民に平等に分けられておりますから、平和を脅かすなどということはありません」
「武力を持つということは平和を脅かすということでもある。戦いが起こったとき、それを終結させる力があれば平和も脅かすだろう。それにな、おれらは自衛する。ＩＤＣなどという組織は、我々には必要ない」
「決して、平和を脅かす目的で武力は用いません。また、自衛だけでは済まない場合があるのです。国際間の問題は糸がほつれやすい。そのほつれた糸を裁つのをうまく行わなければ、戦いになるのです。そうならないために、ＩＤＣを設立しＩＤＣの目的を果たさなければいけないのです」
「なんといわれようと」とサンディは声を荒げていった。「おれの考えは変わらない。ＩＤＣという組織の設立にも断固として反対する」
「しかし――」
「お帰り願おうか、ミスター・エンカ。謁見はこれで終わりだ」
サンディは堪忍袋の尾が切れる寸前であった。雷の民というのは頑固であり短気な者が多い民である。それはエンカも承知していたから、これ以上議論しても仕方ないと考え、退くほかなかった。
この雷の民の反対は、ＩＤＣの大きな失敗であった。テイルゴッドワールドに存在する四つの民のうち三つの民は賛同を示したのに、一つの民だけが反対をする。しかも、それが気性の激しい雷の民であるというのだから、たちが悪い。
――雷の民を一番最後にしたのが間違いだった、とエンカは後悔

した。すでに賛同を示した民には、ＩＤＣに派遣する者を手配するように頼んでいた。ＩＤＣの本部となる建物もすでに建設に取り掛かっている。いまさら中止にするのはエンカの名に傷が尽くし、エンカはＩＤＣが絶対に必要なものであると確信していた。

「ＩＤＣはそのまま建設すればよい」とサンディは相談してきたエンカに助言をした。「サンディだけが賛同していないのなら、建設されるまでに交渉すればまったく問題はない。あったとしても、運営が少し遅れる程度だ。問題あるまい」

「しかし、もし完成しても賛同していなかったら……」

「お前らしくもないことをいうな。必ず成功する。そう信じて交渉をしなければ、いつまでたっても賛同は得られまい。自信をもって交渉を続けるんだ」

エンカはそれを受けて、一週間に二度のペースで、雷の民の首都であるライトサンシティにあるライト城にいるサンディを訪ね、交渉を続けた。一週間に二度というペースは雷の民の性格を考えてのことであったが、この配慮も何度も続ければサンディの怒りが増すだけだった。それに、交渉を続けるにしたがって謁見時間も短くなり、相変わらす賛同を示すこともないのである。一度や二度など、サンディはトリックでエンカを攻撃をしたこともあった。

賛同を一向に示さないサンディに絶えかねた、ウインディやウォータリー、ファイリーもサンディを説得しに行ったこともあったが、やはりサンディの賛同を得ることはできなかった。

雷の民は強情すぎるんだ！　とエンカはため息をついた。自己主張ばかりをして他人の話をまったく聞こうとしないのだ。だから、ボルトのようなやつが世界征服などという突拍子もないことを考えるのだ。さらに自己中心的であるということを自覚していないのも、たちが悪い。サレッドだって……。

そのとき、エンカの脳裏にはサレッドという男の姿がよぎった。サレッド！　かつて、雷の民の前の神であるボルトを倒し、炎の民の前の神であるイフリートと水の民の前の神であるウンディーネを

一瞬にして、この世から消し去り、そして世界を滅ぼしたことのある男……。しかし、彼は雷の民の特徴を自覚し、それを補っていた。だからこそ、伝説の剣の一本であるサンダーブレードの所持者にもなれ、絶対的な力を持ったのだろうか。

とはいえ、前の雷の民の神であるボルトを消し去ったのは、やはり世界征服をするという突拍子もない考えを実行しようとのことである。自分の能力に酔いしれたのか、それとも何か目的があったのか。いずれにせよ、世界征服をしようとして、伝説の四本の剣の一本であるアクアブレードのかつての所持者であるハイトと、同じく伝説の四本の剣の一本であるウィンドブレードのかつての所持者であるクウを引き込もうとしたのは事実だ。

そのサレッドの世界征服を打ち砕いたのは、フレアブレードを持っていたエンカを含めた三人であった。そのときに、世界をも滅ぼすトリックを使ったことから、魔力（トリックエネルギー）を失った。それ以来どこかに姿を消して、まったく五年間音沙汰を聞かない。

トリックエネルギーを失ったサレッドはいまどうしているのだろう？　とエンカは考えた。もしかしたらもう死んでいるかもしれない。しかし、あのような男がそう簡単に死ぬわけはないか。それにしぶとい雷の民なのだから。

そのとき、エンカの頭に一つの考えがよぎった。サレッドという男は危険な男である。しかし、サレッドの魔法剣士（トリック・フェンサー）としての剣術と魔術は長けており、一時ながらも雷の民の指導者となったこともあるほどの明晰な判断力、観察力を持ち合わせている。それに――雷の民だ。

――あの男からサンディへの交渉を成功させられるかもしれない。

危険な男であることに違いはない。だが、やるだけの価値はある。とにかく探すだけ探そう、とエンカは決心した。

エンカとサレッドが最後にあったのは五年前であり、サレッドは行き先を告げてもいない。故にエンカはサレッドの居場所を知らな

かったから、サレッドの居場所を探し出すということからはじめなければならなかった。まず彼はライトサンシティにサレッドという男が、住んでいるかどうかを調べたが、サレッドという男はおらず、また、その消息どころか名前すらも知らない者ばかりだった。名前を知っている者もいたが、サレッドが前の雷の民の神のボルトを殺したことから、サレッドに関する悪態をついてくる始末だった。

エンカはライトサンシティでは情報を得られないと思い、風の民の首都であるウィンドシティを訪れた。彼は早速ウィンド城に向かい、テイルゴッドワールドで一番親しみのある風の民の男である、アース・グラウンド教官をたずねた。しかし、アース教官もサレッドの行方は知らないという。

「できることならば」とエンカはいった。「風の民にサレッドという男を知っている者がいないか、調べてほしいのだが？」

「いいだろう」とアース教官は答えた。「調べてはみる。しかし、いったいどうしたんだ？　政治家として有名なホノオ・エンカが、急にサレッドという男の消息を知りたいなんて？」

「サンディへの交渉を彼なら成功できると思ったからさ。あいつは、明晰な判断力を持っているし、雷の民であるから、サンディへの交渉をうまくすることができると思うんだ」

「にしても、エンカ。私は思うのだが、サレッドの消息を一番知っているのはお前ではないのか？　一番最後にあったのは、お前なんだからな」

「ほかにもいたよ、あいつらがな。ま、私が知っていれば苦労する必要もないのだが……。そういえば、あいつらはいったい今どうしてる？」

「さあわからんな。アカリやハイトたちの世界とは、通信手段がないんだからな。それにあいつらがこっちに来るということは無理だ。ディメンションワープは、膨大なトリックエネルギーが必要とされる。あのウィンディンが使ったが、かなりのトリックエネルギーを消費していたからな。そんなディメンションワープをいつらができ

るとは思えん」
「じゃあ、連絡手段もないのか？」
「そうだな。あいつらに、サレッドの消息を聞くというのは絶対に無理だろう」
「いや、そういう特にそういう意味でいったわけじゃない」とエンカ。「クウのことがあるだろう。それに、たまにはあいつらに会いたいし、この新しい世界をぜひとも見てもらいたいと思ってるんだ。五年前の汚れた世界ではなくて、もっときれいなこの世界を……。あいつらは元気にやっているだろうか？」
「元気にやってるだろうさ。あいつらのことだから、苦悩からも抜け出しているさ」
　後のアース教官の報告によると、サレッドの消息を知る者は一人もいなかった。エンカはその報告を聞き、愕然としてしまった。その報告が来る前に、彼は水の民でも調査を行ったが収穫なしで、風の民の報告だけが頼りだったのだから。この風の民の報告によって、エンカのサレッド探しは暗礁に乗り上げてしまったのだ。
　かくて暗礁に乗り上げたエンカの前に、さらなる現実が待っていた。彼はこの世界では著名な政治家で、決して暇な身ではなかった。サレッド探しに膨大な時間を尽くした彼には、膨大な仕事がたまり、膨大な量をこなさなければいけなくなったのだ。彼のサレッド探しも、この仕事を終えないことには、再スタートを切ることはできない。
　その晩のエンカは、膨大な仕事の処理でだいぶ疲れきっていた。彼はフレア城の自室に戻ると、整えられているベッドに飛び込み、眠りに落ちた。
　その眠りの中、エンカは誰かに声をかけられているのに気がついた。しかし、その声はかすかでしかなく、完全に聞き取るのはままならなかった。彼は必死にその声を聞こうと耳を傾ける……サレッド？　……あたっている……？　眠気が彼に襲い掛かってきた。彼は必死にそれをこらえ、声を聞き取ろうと必死だった。そして、

リメインという言葉を彼は聞くと強い眠気に襲われ、彼は再び眠りに落ちた。

その声のことを翌朝起きたエンカはしっかりと覚えていた。彼の覚えていた言葉は、聞き取ることのできた「サレッド」「あたっている」「リメイン」という三つの言葉だけではあった。そのうち彼の気を引いた言葉が、「リメイン」という言葉だった。テイルゴッドワールドでリメインという言葉がつくのはただ一つ……四神をまとめる第五の神がいるという、ゴッドリメインのみ。

たとえば、炎の民はイフリートからファイリーに替わっているし、風の民ではシルフからウインディに替わっているように、四神――水、炎、雷、風の民の神たち――はどんどんと移り変わる。しかし、第五の神であるゴブドラは、この世界ができてからずっと変更はない。いわば、世界の人々の神はゴブドラであって、この世界はゴブドラに支配されているといっても過言ではないのだ。

その神聖な場所でもあるゴッドリメインに、サレッドという男があっているという意味になるとしか考えられない。エンカは、この眠りの声が、「お告げ」であることを信じて疑わなかった。「お告げ」は、かつての神が眠りの中に出、この後の道しるべを示してくれることであり、それがそのまま現実になることから、「お告げ」と呼ばれている。かつて、エンカも「お告げ」によって伝説の四本の剣の一本であるフレアブレードを所持するにいたったこともある。

この「お告げ」が間違うことはありえない。となると、ゴッドリメインにサレッドがあっている、というのはどういうことになるか？　あっているはおそらく、いるの意味を聞き間違えたのだろう、とエンカは考えた。ゆえに、「お告げ」はゴッドリメインにサレッドがいる、ということになる、とエンカは推測した。確かに、この神聖な地であるゴッドリメインをエンカは調べる必要はないと思い、調べなかった。しかし、今となってはゴッドリメインにいるという可能性は高い。

「とにかくやるだけのことはやるしかない」とエンカは決意した。

エンカは立ち上がり、仕事のことはどこへやら、部屋を飛び出した。

ゴッドリメインというのは二重に面倒な地である。まず一つに、ゴッドリメインという言葉は、ゴブドラがいる土地とゴブドラが住んでいるといわれる遺跡の名前であるからである。つまり、ゴブドラの住んでいる場所というのは、ゴッドリメインのゴッドリメインにいるのである。また、土地の意味でのゴッドリメインは、草木生い茂る森で、視界が悪いわりにはこれといった道はまったくなく、歩きにくい場所である。迷いの森ではないのだが、先に進むのは厄介でしかない。

こんなところに本当にサレッドがいるのだろうか……とエンカは思った。ここほど住みにくい場所はない。いくらなんでもサレッドがここにいるとは思えない。しかし、それは錯覚でしかなかった。ゴッドリメインを探索して、一時間ほどたったとき、あれの前に草木の色ではなく土色の建造物が見えたのである。彼はいささか驚きながら、それに近づいていくと、それがレンガ造りのロッジであった。そのロッジの半径六、七メートルには草木が生い茂っておらず、庭のようになっていた。

――まさか本当にここにサレッドがいるのか。

エンカはある種の恐怖に襲われた。あの危険な男がここにいれば……あの男がもし雷の民の特徴に従っていて、その欠点を本当は知らない者だったら――。エンカは首を振った。そんなことはありえない。確かに――サレッドは欠点を知っていた。そんなことがあるはずはないのだ――――。

彼はドアへとつながる小さな階段を上った。そのとき、ロッジのドアがかすかなきしむ音をさせながら、開いた。エンカは途中で動きを止め、ドアからロッジの住人の姿をみた。

まるで雷のような金髪をし、背が高い男。それは紛れも泣くサレッドだった。しかし、五年前のサレッドの生気がまるでなく、顔もやつれていた。身なりも雷の民の標準服でしかなく、それもだいぶ

着古していてボロになっていた。この男はサレッドの仮面をつけた偽者なのではないか、とエンカは思ってしまったほどだ。
「こんなところになんのようだ？」とロッジの住人は言った。
「あなたはミスター・サレッドに間違いはありませんね？」とエンカは念を押すようにたずねた。
「お前にミスターをつけられる覚えはないな、ホノオ・エンカ」とサレッドはいった。
「私の名前を覚えているとは光栄だな。もっとも、私のことが忘れられないのかもしれないが」
「いったい何のようだ？」
「お前に話があるんだ、サレッド。どうか、中に入れてもらえないだろうか？」
　サレッドはエンカの表情から、その裏にあることを読み取るように、彼を見つめた。そこから何を得たのかわからないが、彼は顔をあげ、あたりを見回した。
「警戒しなくていい、私一人しかいないからな」とエンカはサレッドを安心させた。
　サレッドは少しの間、目をつぶった。彼が再び目を開けると、サレッドはエンカをロッジの中に案内した。中は必要な物しかなく、椅子などは一脚しかなかった。その唯一の椅子である安楽椅子にサレッドが座ってしまい、エンカはたっているしなかった。
「こんな神聖な場所じゃ生活もしにくかろう」とエンカは皮肉めいていった。
「そんな話をしにきたわけではなかろう、エンカ」とサレッド。
「いいだろう、早速本題にはいろうじゃないか。その前に確認したいことがあるんだが、国際防衛センター――ＩＤＣという組織を設立するということは知っているか？」
「私はここからでないのでね」とサレッドは首を横に振った。
　エンカは、ＩＤＣのことについてサレッドに話して聞かせた。また、サンディからの了承が得られないことも話した。

「そこで、私はお前に頼みたいことがある」とエンカはいった。「ＩＤＣ設立に賛同してくれるよう、サンディの説得をかけてもらいたいんだ」
「本気でそれをいってるのか？」
「もちろん本気だとも。雷の民であるにかかわらず、その特徴と欠点を理解し、それを補って明晰な判断力を持つものはいまい。そのお前だったら、絶対にサンディを説得できると私は思っている」
「そんなことはできないだろうな」
「なぜだ？　まさか、お前もこの案に反対なのか？」
「私は賛成だ。この世界はお前の目論見どおり、国際社会になったのだから、そのような組織は必ず必要であると思う。しかし、私がいったい雷の民たちからどのような扱いを受けているかを知れば、サンディへの交渉が無理であることがわかるだろう」
　そのとき、エンカはサレッドを探してライトサンシティで調査していたときのことを思いだした。サレッドの名前を知っている者は必ずサレッドの悪口ばかり言った。それは前の雷の民の神であるボルトをサレッドが、殺したことに起因しているのはエンカにもわかった。
「つまり、雷の民の前に出す顔がないということか？」
「いかにも。ましてや、新しい神などに会うことなどありえないことなのだ。反逆者の私は、雷の民とは一切縁を切らなければいけないし、私も切っている。そんな身である私に、新しい神に説得などかけられると思っているのか？　それに私は疲れているのだ」とサレッドはため息をついた。「五年前に使ったダークネスサンダーで、私のトリックエネルギーはなくなってしまった。トリッカーが――正確にはトリックフェンサーなんだが――トリックエネルギーをなくせばどうなると思う？」
「……命が尽き果てる」とエンカはつぶやいた。
「そのとおり。しかし、私は死ななかった。私は何かを求めるようにして、このゴッドリメインに足を運び、今まで生き延びてきた。

ゴッドリメインはトリックエネルギーがあふれていて、私はそのトリックエネルギーを得、回復をしてきている。五年間もだ！　しかし、まだ完全に回復はしていない。少しトリックを使ったり動いたりするだけで、私は疲れてしまう」
「しかし、サレッド。私はトリッカーではなく、フェンサーでトリックエネルギーはほとんど持ち合わせていない。だが、私にはわかる。確かには完全ではないかもしれないが、お前は普通に行動するだけのトリックエネルギーを持ち合わせていることが」
「トリックフェンサーはトリッカーとは違う」
「そうかもしれない。しかし、私が目下論じていることは、この世界の未来のことなのだ。ＩＤＣは今後の世界に絶対いる組織だ。このままでは、世界は再び五年前の世界に逆戻りする可能性だってあるんだ。それだけは避けなければいけない。それはお前もわかるだろう？　再びクウのような男が現れるとは限らないんだ。もし現れなければ、この世界は五年前のように、滅びてしまうかもしれないんだ」
　サレッドはその言葉を聞き、エンカをまじまじと見た。世界の崩壊……それは、過去にサレッドがした最大の過ちだった。彼は世界を統治しようとしていた。しかし、それを反対しようと伝説の四本の剣のうち三本の剣を持つものが反対し、ついにサレッドは秘級を超えるトリックであるダークネスサンダーを使い、世界を滅ぼしてしまった。全人類は死に、何らかの力によって復活させられた。
　その何らかの力をサレッドは知っていた。世界が復活したのは、ゴッドリメインにいるといわれる第五の神であるゴブドラの力であるのだ。世界は復活するはずはないのに世界は復活した。ゴッドリメインの膨大なトリックエネルギーによって……。
　サレッドはゴッドリメインに五年間いて、知っていた。ゴッドリメインにはトリックエネルギーが充満していて、そのトリックエネルギーによってこの聖なる地が保たれていることを。
　――この聖なる地を再び汚してはならない。私と同じ過ちを繰り

返してはいけないのだ。
「成功する保証はないぞ」とサレッドはいった。
「ありがとう、サレッド！　恩にきるよ」
「世界は絶対に滅びてはいけないんだ。そう、二度とゴッドリメインの力を借りてはいけない……」

エンカは、サレッドを率いてライトサンシティのライト城にいる、サンディに謁見を求めた。謁見が許可され、サンディのところへ案内する雷の民の面持ちは、明らかに不満そうだった。この案内人の不満の対象は、サレッドではなくエンカであっただろう。エンカは、毎度この案内人に案内をされており、しつこいやつだと思われているに違いない。

うまくいくだろうか、とサレッドは思っていた。うまくいくとはいいかねる。しかし、失敗してはいけない。ゴッドリメインを守るためにも……。そのためには、まずサンディがどのような扱いをしてくるかによる。それをサレッドは気にしていた。

謁見の間は開かれた。エンカとサレッドは、イエローカーペットの先にいる雷の民の神であるサンディを見ながら前に進み、そこでひざまずいた。
「そいつは？」とひざまずくのをみると、サンディはサレッドを疑わしそうに見た。
「私は」とエンカではなくサレッドがいった。「トーマ・サレッドと申します、サンディ様」

その言葉を聞いたサンディの顔がみるみる曇ってゆく。サレッドは、この交渉は失敗になるだろう、と早速予見した。しかし、その予見はすぐさまはこなかった。サンディは爆発させないよう我慢しているらしい。
「お前のことは知っている」とサンディはサレッドに不機嫌そうにいった。「自分が神になるため、おれの前の神であるボルト様を殺し、雷の民を裏切った男だろう？」

「そのとおりでございます」とサレッドはあっさりと認めた。「鹿ｓｈい、私どもはそのことで参上したのではございません。ミスター・エンカから国際防衛センター設立案のことを伺いました。サンディ様はこの案に反対されていらっしゃるようですが、私はサンディ様が、この案に賛成を申していただきたく、参上したのでございます」

「お前にとやかく言われる筋合いなどない。それに私は断固として反対する。誰になんと言われようとも、私は賛成を示さない。それだけだ、帰ってもらおう」

「サンディ様」とサレッド。「私は裏切り者と呼ばれようとかまいません。しかし、雷の民は――いや、この世界は別です。もしこのまま行けば、おそらく国際防衛センターの初仕事は雷の民にかかわった事件となるでしょう。そのとき、おそらくサンディ様は戦いをなされます。それは、裏切り者だろうと雷の民である私が一番よくわかります。そうなれば、サンディ様は世界に対する反逆者として扱われ、私と同じような道をたどってしまうことでしょう」

「お前と一緒にするな。私はお前とは格が違う」

「いいえ、違いません。雷の民は雷の民です。雷の民は、それこそ個性はありますが、雷の民の特徴は全雷の民に備わっているのです」

「だまれ！」とサンディの怒鳴った。「お前と一緒にするなといっただろ！　私のことは私が知っているし、私は国家だろうと世界だろうと反逆することはありえない！　お前と一緒にするな、この裏切り者めが！　今すぐここから消えろ。そして、二度とおれのまえにその姿を現すな！　でてけ！」

「しかし――」

とエンカはここで口を開いたが、サンディは明らかに憤慨していて、話など通じる状態ではなかった。完全に退散せざるを得ない状況となり、エンカとサレッドはすぐさま謁見の間から身を引いた。

ライト城を退くと、サレッドが口を開いた。

「結果は悪い方向へと向かったな」

「仕方あるまい。サンディの一方的な偏見だ。まだこの状態なら何とかなるだろう。あまりスパンが短すぎるとやつの怒りも収まらないから次は――」
「悪いが」とサレッドはエンカの言葉をさえぎった。「私はもうサンディに交渉をするつもりはない」
「なんだって？」
「やつは、偏見の塊だ。これ以上、交渉しても首を縦には振るまい」
「しかし、サンディを説得しなければ、この世界に再び危機が起こったときに必要なＩＤＣが設立できなくなってしまう」
「しかし、これ以上私に交渉をさせても、やつを刺激させ、さらなる戦いを生み出すというのが目に見えている。私は退かざるを得ないのだ」
サレッドはそういって歩き出した。エンカはサレッドをとめようと、声をかけたが、サレッドは振り向くことなく、そのままライトサンシティの人ごみの中に紛れ込んでしまった。

サンディの了承が得られないまま、ついに国際防衛センター――ＩＤＣは完成した。この事態をまったく予期していなかったファイリーは、ただただ戸惑うばかりだった。この事態から、雷の民の神であるサンディを除いた神たちとエンカは、緊急の会談を開くことになった。
その会談で、ＩＤＣにある雷の民のための議席をどうするかというのが、議論の焦点にあたった。議席をそのままにするか、議席をほかの民で使うかという二つの議論対象で、後者に決議された。また、ＩＤＣの運営は予定通り行い、運営を行いつつ、交渉を続けるということで了解された。また、反対の雷の民の領土でも、国際問題が起こればＩＤＣが出動し、快刀乱麻を断つことも決定した。
ＩＤＣの運営はもっとも重要な課題を持ち、運営が開始された。ＩＤＣは、テイルゴッドワールドの中心地であるゴッドリメインの南――つまり、炎の民の領土に近い場所に設置されていた。これは、

ＩＤＣの長および提案者が炎の民であるミスター・ホノオ・エンカに起因しその功績をたたえられてのことである。もともと、世界の中心地に建造したかったのだが、ゴッドリメインに建造するのが無理であると判断され、また、長の民に一番近い場所に設置したというわけだ。

ＩＤＣの運営は順調に開始されたといってよかろう。エンカの鋭敏な頭脳によって、その問題点の多くは当初から改善されており、たとえば領事裁判権などそうそう考えられるものではないが、エンカはその点をクリアしていた。しかし、やはり唯一クリアしていない問題がエンカを苦しめた。雷の民たちはいまだに反対を示し、また、運営を開始したことから憤怒でＩＤＣに抗議をしに大勢の者が押しかけてきたのである。

ここは鋭敏な頭脳を持つエンカの出番だった。彼は、ここに来た雷の民たち相手に演説を行い始めたのである。雷の民の領土で許可もなく演説することはできないから、彼はサンディの一方的な偏見を民から取り除こうとしたのである。そうして理解が得られれば、国民運動が起こりサンディの考えも折れるという寸法である。

しかし、暴動はさらに増すばかりだった。強く燃え上がる炎に、彼は油を注いでしまったのだ。それによって、雷の民たちはその特徴を露骨に表し、トリックを使って攻撃をし始めた。この事態に、エンカを含めたＩＤＣメンバーたちが駆り出され、この暴動にピリオドを打つまで一時間の時を要した。

この事件は、当然サンディの耳にも届いていた。彼はいわんこっちゃないというかのように、即刻ＩＤＣの運営を中止し組織を壊すべきだとしきりに主張してきた。エンカはこの主張にたいしてサンディに刺激を与えないように説明をし、ＩＤＣが閉鎖に追い込まれないようううまく対処をした。しかし、対処したのはいいが、サンディの賛同を求めるのは、よりいっそう厳しくなってしまった。

それから何日間と仕事に追われたエンカは、休暇を得ることになった。彼は、その休暇を使って、サレッドのところを訪ねていた。

この事件のことで、交渉が難しくなり、少なくともエンカでは交渉ができなくなったといわざるを得なかったから、サレッドに助力を再び求めにきていたのだ。まだ、エンカはサレッドの交渉に臨みをかけていたのだ。

サレッドがロッジのドアを開け、エンカの姿を見たとき、彼はいやな顔を見せた。くるなといっただろう、と彼はエンカにいったがエンカは再び、サレッドのロッジの中に案内された。椅子は相変わらず一つであり、サレッドはその椅子に座ってしまった。

「なんといわれようと、もう交渉をするつもりはない」とサレッドは椅子に座ると口を開いた。

「そこを何とか考え直してほしい」とエンカはいうと、先日の事件のあらましを話した。

「それだったら、なおさら私にも無理だと思うが」と話を聞くと、サレッドはいった。「お前よりも嫌われているこの私では、サンディも交渉には応じまい」

「お前への偏見がサンディからなくなれば、同じ民として、交渉を受け付けてくれると私は思う」

「なぜだ？」とサレッドは疑問を呈した。「なぜ、私に交渉の話を持ちかける？　かつて、この世界を滅ぼそうとした、この私になぜそのような交渉をさせようとする？」

「私はお前のことを高く評価しているんだ」とエンカはいった。「確かに五年前にお前はあらぬことをした。しかし、一時でも雷の民の神になった前の力と判断力はすばらしいものだと思っている。それに私はお告げを信じているんだよ」

「お告げに私の名がでたというのか？」

「そうだ。聞き取れた単語は、『サレッド』『あたっている』『リメイン』の三つだけだった。二番目のあたっているというのは、サレッドを探すのはあたっている。つまり、お前が必ず何かをするというのを暗示しているに違いないと考えているんだ」

「しかし、私は失敗を犯している」とサレッドは指摘した。

「失敗なんて誰でもあることだ。一度の失敗など問題にならない。何度もやれば絶対に成功できるはずだ。だから、サレッド、私はお前にサンディがＩＤＣに賛同するように、交渉をしてくれまいか？
この世界には――」
そのとき、外からとてつもないほど大きな爆音が響いたのだ。二人はロッジから飛び出し、周りを見てみたがどうなってもいない。エンカは空を見上げると――木々が邪魔をして見にくいが――かすかに南のほうから煙が上がっているのが認められた
「フレアシティの方角だ！」とエンカは叫んだ。「いったい何が――」
エンカの頬をなでるような風が吹き抜けた。と同時に、どこからか声が聞こえてきた。
「メッセンジャーウィンドから通信です」とその声は言った。
「こちらはエンカ」エンカは冷静にいったが、内心はまったく冷静ではなかった。「いったいどうした？」
「大変なんです！　雷の民がＩＤＣに攻め込んできました。彼らはＩＤＣを壊そうと――――」
音は途切れた。エンカは呼びかけるもののまったく応答はなかった。
「メッセンジャーウィンドが途切れたか。聞いたかサレッド？　どうか、お前の力を貸してくれ。ＩＤＣを守らなければ……」
サレッドはうなずいた。エンカは驚くこともなく、二人はＩＤＣに向かって走り出した。
二人がＩＤＣに到着したとき、まだＩＤＣはほとんどが無事だった。しかし、ＩＤＣ正面ではＩＤＣメンバーと雷の民たちが戦いを続けられていた。二人は、戦いの中をうまく潜り抜け、ＩＤＣ側本部へと顔を出すと、副管理者の水の民が指揮を執っていた。
「ノール、いったいどうしたんだ？」とエンカはノールと呼ばれる水の民に尋ねた。
「実は、少し前に水の民の領土にて雷の民が暴れていると通報を受

けまして」とノールは説明を始めた。「ＩＤＣが出動し、規定により水の民の牢獄に該当の雷の民を送還したところ、サンディ殿が憤怒をし抗議をしにきました。そうしたら、いつの間にか戦いになっていたというわけで……」
「怒ったんだな」とサレッドはつぶやいた。「気の短いやつだ。それで、民をあげてＩＤＣを壊そうというわけか」
「おい、スカイル」とエンカは風の民の副管理者に言った。「メッセンジャーウィンドで、炎の民に応援要請を出すんだ。それと、ノール、剣を二本貸せ。二本だぞ」
　エンカは剣を二本受け取ると、片方をサレッドに渡した。
「私に考えがある」とサレッドは剣を受け取るといった。
「考えだって？」
「無駄な戦いをしたところで、何の解決にもならない。解決するには根源をたたくべきだ。幸いにも防衛ができているようだし、応援が繰るならば守りは任せることができるだろう」
「そういって、私たちをどうするつもりだ？」とノールがサレッドにいがみついた。
「おい、ノール！」とエンカはたしなめた。
「こいつは雷の民ですよ、エンカさん。相手は雷の民なのだから、信用できるはずないでしょう」
「信用できないならしなくてよい」とサレッドはいった。「私は自分がすべきことをする。ただ、それだけだ」
　そういうと、サレッドは歩き出した。エンカは、ノールとスカイルに指示を与えると、サレッドの後を追った。
　二人は戦いの脇を通って、サンディがいる場所へと向かった。戦いに集中している彼らは、二人にはほとんど気づく者がいなかった。気づいた者は二人に襲い掛かったが、エンカとサレッドに立ち向かうには荷が重すぎた。よって、雷の民の群れを潜り抜けることはわけのないことであった。
　群れを抜けると、百メートルほど先のに雷の民のフェンサーかト

リッカーか、はたまたトリックフェンサーらしき者たちに囲まれて、サンディがいた。周りの者は二十名ほどで、それらの者を使って指示を出しているらしく、時々一人離れて行ったり戻ってきたりしている。

「やつらは、おそらく上級フェンサーと上級トリッカーだろう」その様子を草陰に隠れてみていたエンカが言った。「どうする？」

「フレアブレードとサンダーブレードを扱った者は、上級など目ではない」とサレッドは断言した。

「しかし、この剣は伝説の四本の剣の一本ではなく、ただの剣だ」とエンカは指摘した。「秘級は使えない」

「秘級などやつらに必要ない。ここは私に任せろ」

エンカはうなずいた。二人は立ち上がり、草陰から出、彼は上級フェンサーと上級トリッカー、そして、サンディのところへとゆっくり歩み寄り始めた。二十人のうちの一人が二人の姿に気がついた。サンディもそれに気がつき、彼らはみな二人のほうを向いた。

と、サレッドは剣を掲げた。その剣に、どんどん電気エネルギーがたまっていくのが、エンカならずほかの雷の民たちにもわかった。民たちはそれを危険だと判断し、フェンサーたちはサレッドに向かって走り出し、トリッカーたちはいっせいにトリックを唱え始めた。

スターサンダー、そうサレッドがつぶやいた瞬間、剣にたまっていた電気エネルギーが複数の星の形をして一気に放出された。迫りくるフェンサーたちはもちろん後ろでトリックを唱えているトリッカーたちにも、スターサンダーと呼ばれるトリックは直撃し、その場に倒れた。

倒れていなかったのは、サンディだけだった。だが、そのサンディは普段のサンディではなく、前の光景が信じられないといったサンディだった。二人はゆっくりとサンディに近寄った。

「くるな！」サンディは強くそういったが、声はいささか震えていた。「いったい、私をどうするつもりだ？　これが、お前らのいうＩＤＣの行動だというのか」

「決して、違います」とエンカは強く言った。サンディとは違って、声には威厳がこもっていた。「ＩＤＣは世界の秩序を守る組織。このような事態が起こったときに出動し、争いを食い止める組織です。そう、まさしくサンディ様、あなたが今回おこしたこの戦いが起こったときに終結させるのが、ＩＤＣの役割なのです」
「だまれ！」とサンディは叫んだ。「元はお前らがわが民を水の民の牢獄に閉じ込めるのが悪いんだ！　前にいったな？　ＩＤＣのような組織は平和を脅かすと。それがこの結果だ！　お前らが不適合にことを運ぶから、このように平和が脅かされるんだ」
「それは、あなたのせいであって、私たちのせいではない。いわば言い訳です」とサレッドが口を挟んだ。「つまり、雷の民というのは従来からそういう戦いの精神があるのです。何かと戦いに持ち込みたがる。だからこそ、このＩＤＣというのが必要なのですよ。平和と秩序を守るためにもね」
「だまれ、裏切りものめ！　お前にいったい雷の民の何がわかるというのだ」
「わかりますとも、裏切り者といえど、私だって雷の民です。サンディ様、どうかこの戦いをおやめください。そして、ＩＤＣをお認めください。雷の民は不器用な民であるのです。ただ、争うことしかできない求めない。そんな民を変えませんか？　世界は移り変わり、争いは好まれなくなる。このままでは雷の民は生きにくくなるでしょう。ですから、争いごとはしっかりと受け止めるためにも、ＩＤＣという組織が必要であり、争いが悪いことであるというのを学び、新しい世界に適応し楽しく生活をしていきませんか？」
「新しい世界」とサンディはつぶやいた。「ふん、所詮おれたちは古い世界に住んでいる。それがおれたちのやり方だ。だが――新しい世界も悪くないかもしれないな」
サンディはそういうと、大きな雷を放った。
「戦い終了の合図だ。これで戦いは終わるだろう」
サンディはそういうとその場を去っていった。そして、戦ってい

た雷の民たちも続々とライトサンシティへの帰途へとついていった。
　それから一日がたったとき、サンディは民を全員集め、演説を行った。彼はその演説で、雷の民がいかに不器用であるか、世界は移り変わっていてそれに乗らなければいけないということを語り、最後に彼は、ＩＤＣ――国際防衛センターに賛同をすることを示した。

「ありがとう、サレッド」とサンディの演説が行われた翌日に、エンカはサレッドのロッジを訪れ、例を述べていた。「雷の民も無事にＩＤＣに加盟することになった。これもすべてサレッド、お前のおかげだよ。本当にありがとう」
「私はたいしたことはしてないさ。あの状況であれば、お前でも説得できただろう」
「いやいや、これもお前の力をもっていたからさ。ところで、サレッド、あのときにお前はスターサンダーとかいうトリックを使ったが、あれだけのトリックが使えたなら、もう回復はしてるんじゃないのか？」
「完全ではないにしても、ある程度はしているようだ。しかし、あれでだいぶ疲れを感じたし、あまり多くは使えないだろうな。マスターフィールドなどを使えば、一発でアウトだ」
「なあ、サレッド。マスターフィールドのような上級トリックを使う必要もない、この平和な世界をさらに平和にするよう力を貸してはくれないだろうか？」
「つまり、私にＩＤＣに入れというのか」
「やっぱり、頭だけはしっかりとしてるな」とエンカは微笑しながらいった。「そうだ。幸いにして、ＩＤＣはゴッドリメインの近くにあるし、こんなところで一人でいるよりも、人とかかわっていたほうが回復すると思う。それに、平和を脅かす新しい事件が起こるかもしれない。それを解決できないようでは、どうしようもないのだ。ぜひ、お前にもＩＤＣに加わってもらいたいんだ」
「しかし、私でいいのか。かつて――」

「昔ではなくていまさ」とエンカはサレッドの言葉をさえぎった。
「昔にこだわる必要はない。今のお前は昔のお前ではないのだから」
サレッドはためらって、エンカの顔をみた。その目は真剣で、しっかりとサレッドの目を見ていた。
サレッドは手を差し出した。そして、いった。「ありがとう、エンカ」

ＩＤＣ――国際防衛センターの議席はすべて埋まった。さらに、ミスター・ホノオ・エンカとともにミスター・トーマ・サレッドが管理者に就任し、共同管理となったＩＤＣは、平和を守りさらなる平和にするために、正式運営が始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3862e/

風の伝説

2010年10月8日15時01分発行